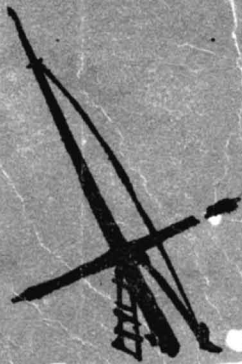


時事新報社翻譯

露艦隊

最期賓記





露艦隊三戰記序

予嘗テ海軍勳功表彰會ノ著ス所日露海戰記ヲ讀ム其記
ス所詳密精確ニシテ能ク日露海戰ノ終始本末ヲ網羅シ
其後世史料ノ爲メ益スル所小少ナラサルヲ知ル今又同
會ノ發刊ニ係ル露艦隊來航秘錄同幕僚戰記及ヒ最期實
記ノ三篇ヲモ併セ讀メリ其來航秘錄ト稱スルモノハロ
ゼストウエンスキー提督ノ幕僚タル造船技師ボリトウ
スキー氏ノ著ス所ニシテ西曆千九百四年九月十日始テ
クロンスタツドニ於テ軍艦スワロフニ乘艦ノ日ヨリ始
マリ翌年五月廿三日即チ日本海々戰ノ前四日ニ終ハル
之レ同氏カ乘艦以來日々艦隊行動ノ實況ヲ手記シ以テ

其細君ニ通信セシ實錄ナリ幕僚戰記ト稱スルモノハ第二艦隊幕僚某氏ノ著ス所ニシテ其記事ハ五月廿五日臺灣海峽附近ニ於テ既ニ會戰ノ近キヲ察シ運送船ノ一部ヲ解放シ上海ニ回航ヲ命シタルノ日ニ始マリ開戦後口ゼストウエンスキー提督重傷ヲ負ヒ最後命令ヲ發シタルノ時ニ終ハル又最期實記ト稱スルモノハ實戰者ノ一人タル某將校ノ著ス所ニシテ其記事ハ五月九日第二第三艦隊カ始テホニコ一灣ニ會同セシ時ニ始マリ口ゼストウエンスキー提督ノ坐乘驅逐艦ペトウエイ號ノ投降決議及ネボカトフ提督ノ降伏談判ノ時ニ終ハル其記スル所ノ要各異ニシテ一ハ則チ萬里遠征ノ苦味艱難ヲ詳述シ一ハ則チ專ラ艦隊苦戰ノ狀ヲ描寫シ又其一ハ則

チ戰策ノ利害得失武器ノ優劣等ヲ詳論セリ故ニ此三者ハ互ニ相補足シ讀者ノ研鑽ニ利スル甚タ多シ若シ此三者ヲ併讀スルトキハ露國艦隊ノ裏情一トシテ其要ヲ得サルモノナク且ツ其悲惨ノ狀炳然トシテ眼中ニ映スルカ如シ讀者チシテ無量ノ感ニ禁ヘサラシムルモノアリ抑モ彼レ艦隊カ旅順浦鹽艦隊ノ敗衄ヲ聞キ萬里ノ波濤ヲ凌キ苦辛艱難ヲ極メ之レカ應援ニ努メタル大膽不撓ノ勇氣ハ之ヲ稱スルニ餘リアリト雖モ其出征準備ノ盡サハル所アルト兵員ノ研磨訓練ヲ缺キ航行十餘ヶ月ノ間孜々トシテ此ニ努メサリシハ將帥タルモノ、能ク心ヲ用ヒタリト言ヲ得ス開戦ノ時ニ臨ミ屢ハ隊形ノ不整ヲ來シ炮火ノ効力ヲ著明ナラシムルヲ得サリシハ豈ニ

其レ之レカ罪ナラサランヤ且ツ其兵員カ屢ハ反心不羈ノ形勢ヲ示シ司令長官ノ信賴ヲ薄弱ナラシメタルハ平生軍紀ノ頽廢ヲ表白セルモノニシテ是亦敗戦ノ一原因タルヲ疑ハス所謂戦ノ勝敗ハ地ノ利ニ如カス地ノ利ハ人ノ和ニ如カストハ是此ノ謂ナリ蓋シ此書ハ能ク敵ノ缺窬ヲ明示シ之ニ依テ將來益ス我カ士氣ヲ鼓吹シ忠君愛國ノ至衷ヲ發揮セシムルノ良箴トナスヘキカ曩ニ著ス所ノ日露海戦記ハ我カ艦隊ノ實見觀察ニシテ所謂表面ノ顯象ナリ此三戦記ハ彼レ艦隊ノ實見觀察ニシテ所謂裏面ノ寫影ナリ此二者ハ則チ表裏相照シテ能其眞象ヲ示スモノナリ勳功表彰會カ前後彼我ノ海戦記ヲ發刊シ世ニ公ニセシモノ蓋シ其意焉ニ在ラン予聞ク此三戦

記ハ嘗テ時事新報社ニ於テ稿ヲ購ヒ之レカ譯ヲ施シ上梓發刊ノ企圖アリ然ルニ偶々勳功表彰會ニ於テ佐世保紀念館設立ノ舉アルヲ聞キ此稿ヲ寄贈シ以テ其資ヲ幫助セリト果シテ然ラハ此書ノ讀者ニ與フル裨益ハ獨リ勳功表彰會ノ賜モノトミニアラス其一半ハ則チ時事新報社ノ賜モノト言フヘキカ今其梗概ヲ略記シ以テ之カ序トナス

明治四十年初冬

海軍大將 柴山矢八 撰

拜啓先頃御來訪被下候翌朝新聞紙を閲し候處前日回向院の大相撲にて太刀山常陸山を破り而も其手解は人々によりて觀る所を異にし太刀山自身も亦確と記憶せざる由記載有之小生は之を讀みて感懷今更の如きものあるを覺え申候東西二人角牴の贏輸すら真相を窺ふの難きと是の如くなるに况や日露兩帝國百餘隻の軍艦か日本海に於て二日間奮闘を續け其區域南北三百餘海里東西二百餘海里に亘れる未曾有の大戦に候得は其大要たにも研究するの至難なる事は申までも無之次第に候へども我れ無比の大勝を制し以て戦役の大局を決せしめたる此の海戦の顛末を知るは海國民たる面目上缺く可らざる事なるに同時に未來の發展に關しても必ず研究し置くべきもの、一ツかこ被存候海戦の當時東郷大將の公報及諸將校の談話等にて兎も角も我戦況の大要こそ知られたれ露國側の行動に至りては具體的のもの殆んど無之頗る遺憾に存じ居り候處今般貴會にて曩に時事新報紙上に掲げ世間の喝采を博したる露艦隊に關する紀事三篇を一巻に收めて御發刊相成候趣洵に結構なる御企にて斯くてこそ彼我勝敗の原因も略ほ究められ従つて國民を裨益すること多かるべきは小生等の信じて疑はざる所に有之候知彼知己百戰不殆との孫武子の言は嘗に軍事當局者か作戦上に必要なるのみにては可無之と被考候先は右迄勿々不備

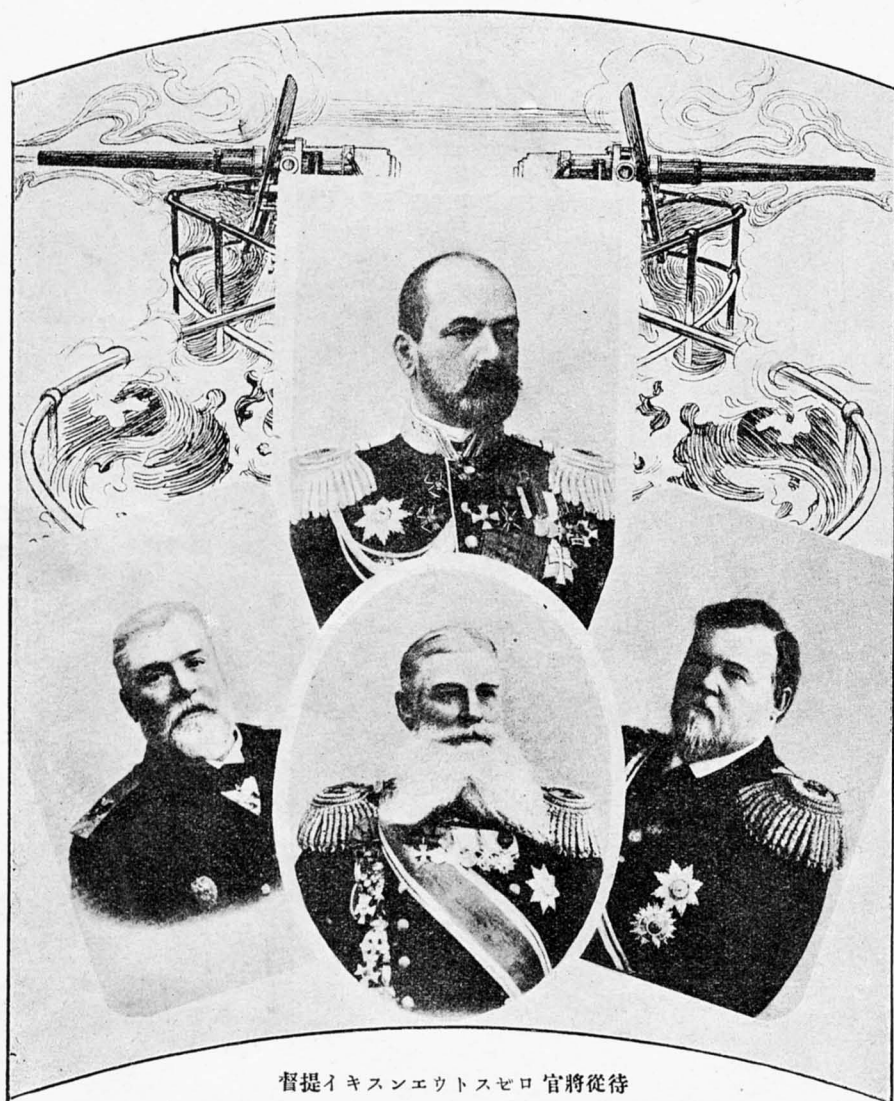
六月廿九日

海軍中佐子爵 小笠原長生

海軍勳功表彰會

田熊萬藏殿

露艦隊四提督の肖像



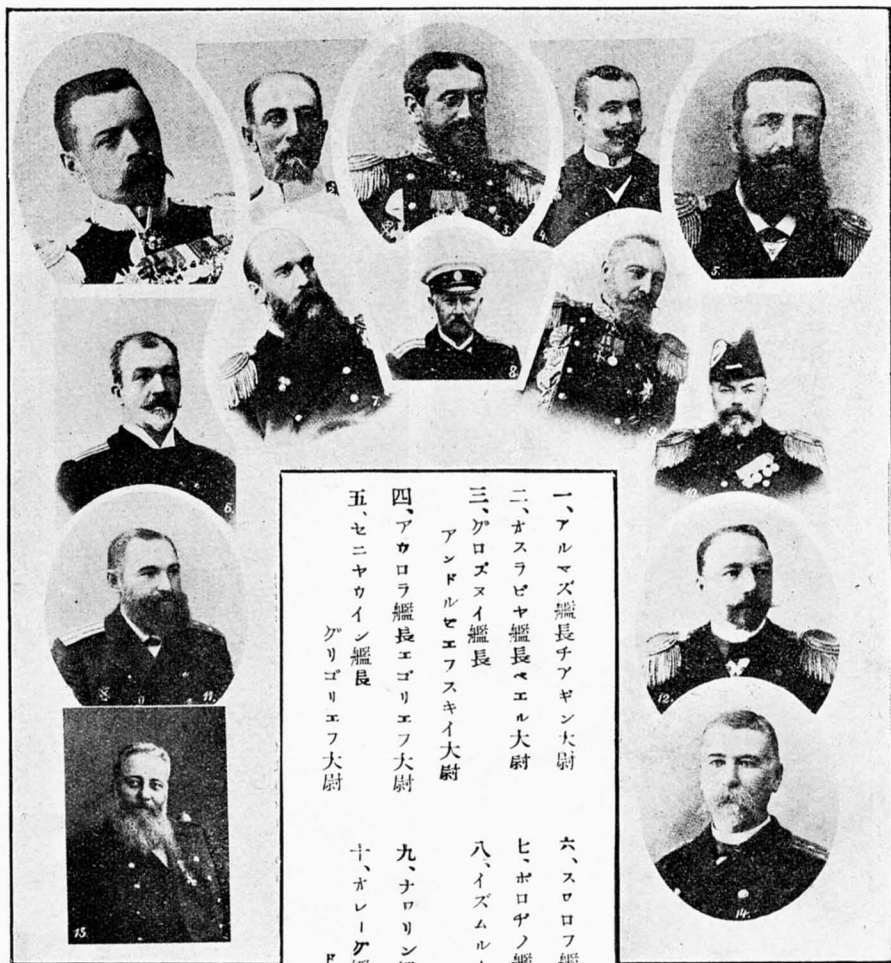
待從將官 セロウツエウシキ提督

ネボカフト提督

フエレルム提督

エウクソイト提督

露艦各隊長の肖像



一、アルマズ艦長チアギン大尉
 二、オスラビヤ艦長マエル大尉
 三、カロズヌイ艦長
 アンドルセエフスキイ大尉
 四、アカロラ艦長エゴリエフ大尉
 五、セニヤウイン艦長
 グリゴリエフ大尉

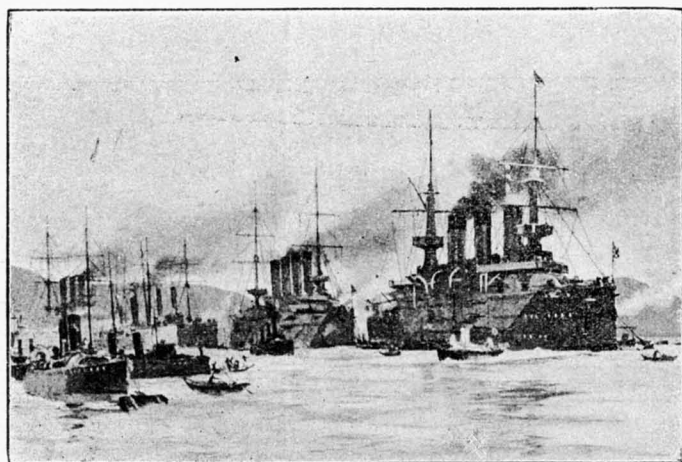
六、スロロフ艦長イグナツウクス大尉
 七、ボロザノ艦長セルブリヤニコフ大尉
 八、イズムルード艦長ノエルゼン大尉
 九、ナロリン艦長ヒテンゴフ大尉
 十、オレーク艦長
 フアロトロオルスキイ大尉

長艦イッシ、三十
 尉大フロゼオ

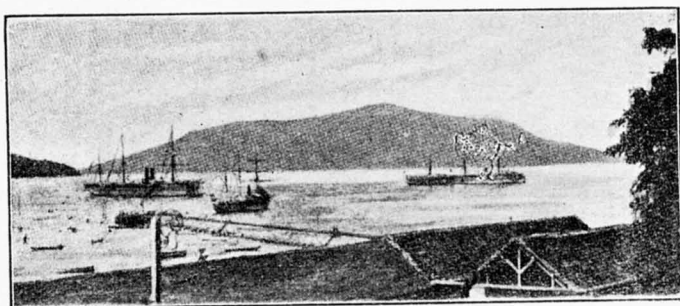
長艦ンシクラバア、四十
 尉大ンシリ

長艦フモヒナ、一十
 尉大フノオデロ

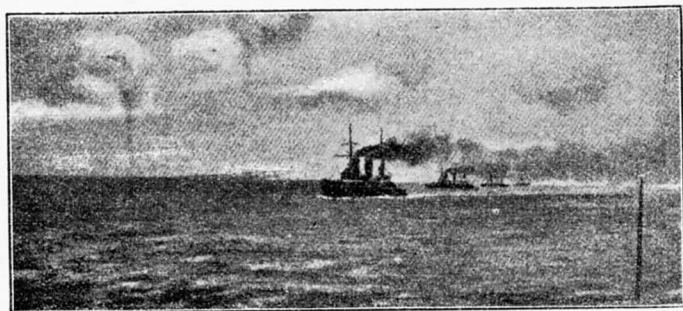
長艦クーレオ、二十
 尉大グンエ



露艦第二大平洋艦隊リパカ港
出帆當時の光景

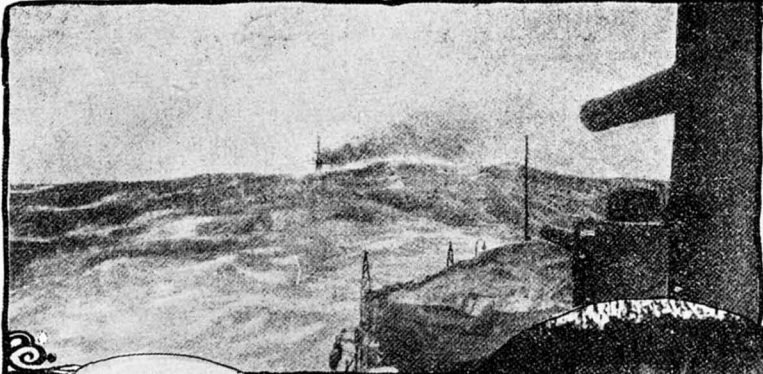


第二大平洋艦隊ダカール
に於て石炭積取の光景



第二大平洋艦隊北大平洋
航行の光景

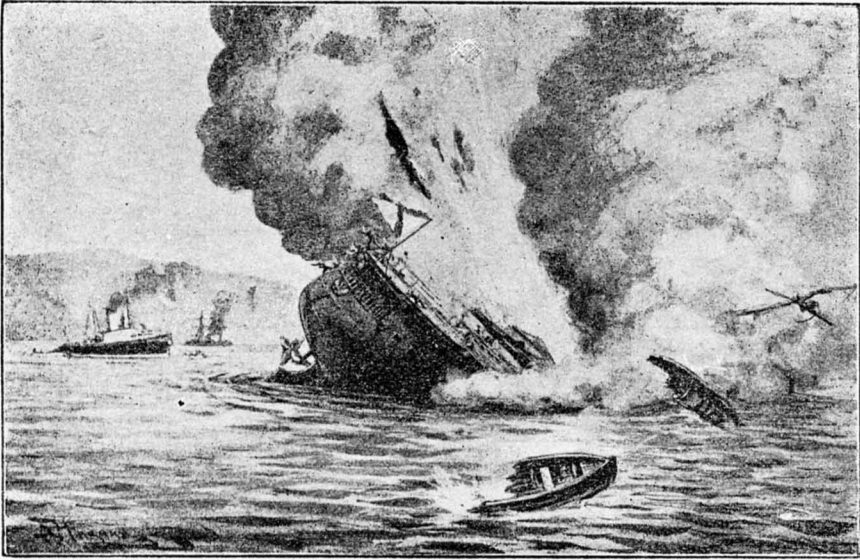
喜望峯廻航中、
暴風艦隊ノ苦心



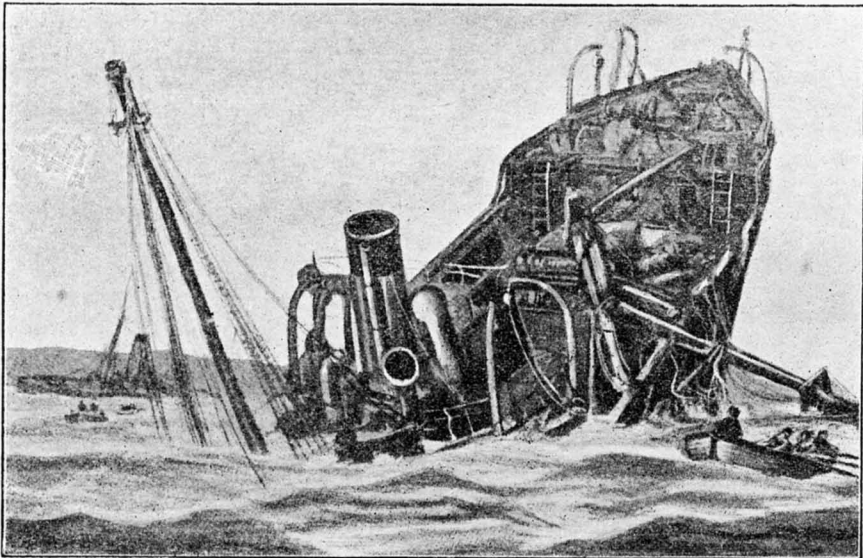
マダガスカル島ノ
土人及貴族



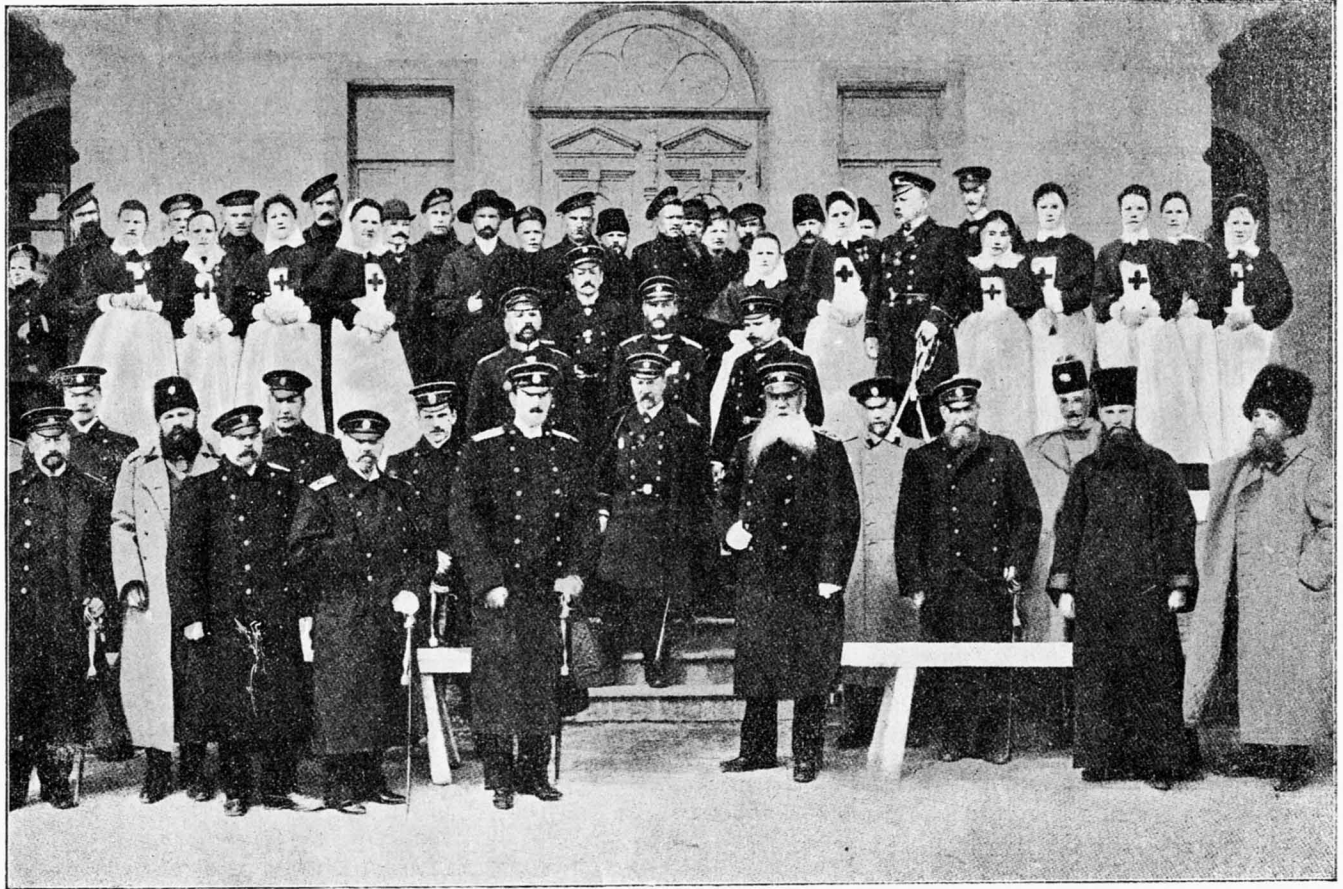
マダガスカル島
第二艦隊ノ錨地



本日大海海戦に於て露艦最期の光景



本日閉塞船旅順口沈没の光景



。他其督提フロカマ公大ルヲキ。官武級高時當議會城籠順旅

緒言

本會の曩に、日露海戦記を刊行したる趣旨は、既に世に認識せらるゝが如く、日露戦役に於ける、我か海軍の偉勳を表彰して、是れを不朽に傳ふると同時に、吾人國民海事志想の涵養に資し、尙當時我か海軍の策源地たり、今は東洋の重鎮たる佐世保軍港に、一大紀念館を設立するに在り、此の故に、當年屠龍搏虎の勇を振はれたる歴戦將校にして、此の編纂を助けられたるもの尠からず、海戦記か一種の特色を有するは畢竟是れか爲耳、是を以て、上梓先つ

天覽の榮を辱ふし、亞で多數の賛成購讀者を得、版を重ねる四、其の部數四萬有餘、本會は我か同胞の斯道に熱心なるを憚はずんば非ず。

然り而して、本會は未だ以て是れに満足するを得ず、何となれば、事に主客の別あり、物に表裏の差あり、日露海戦記に於ける我が軍は即ち其の主にして、敵軍は自ら客たり、故に表面の事實は主客ともに網羅し盡せりと雖も、客の眞想即ち敵艦隊裏面の消息に到ては、之を窺ひ知る能はざればなり、本會の慊焉たりしもの豈望蜀の類ならんや。

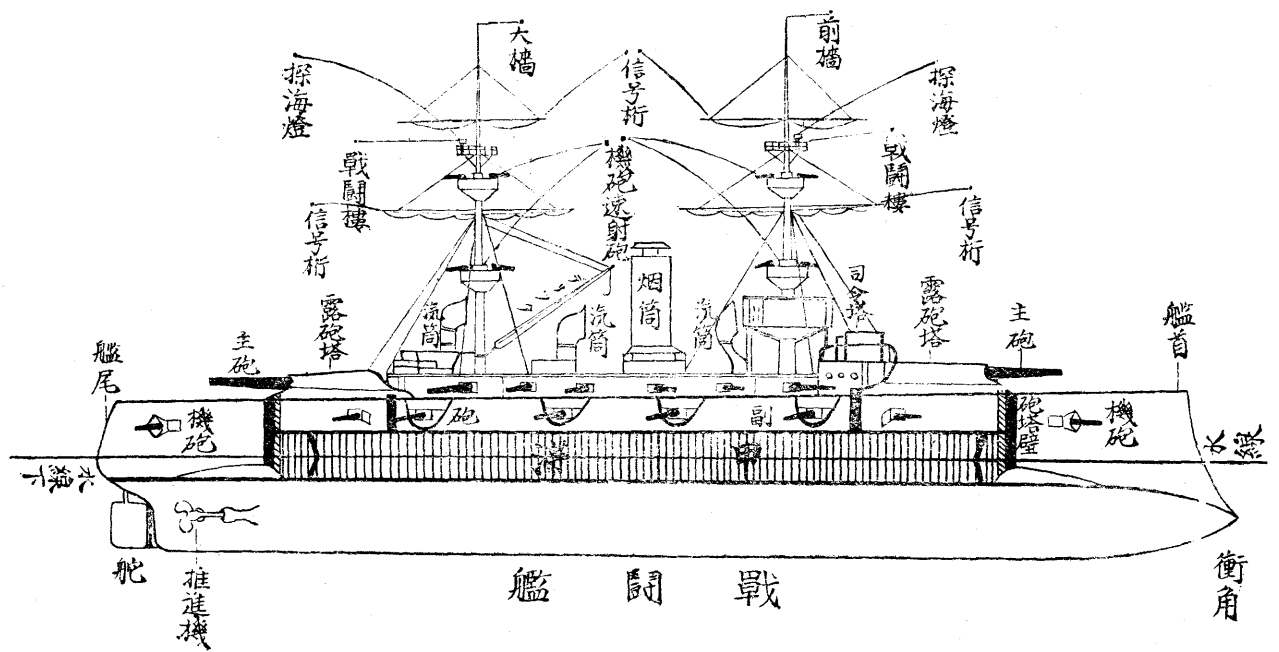
是の時に當り會ま、時事新報に譯載せられたる、露艦隊來航祕録、露艦隊幕僚戦記、露艦隊最期實記の三戦記は、孰れも敵艦隊幕僚の手に成りたるものにて、慘憺たる當時の光景を描寫して餘蘊なく、寔に千古稀有の珍書たり、故に其の記事は滿天下の喝采を以て始終するに到れり、是を以て本會は、本會の希望を時事新報社に齎し、三戦記の出版權譲受の事を交渉せしに、同社は、多數讀者の希望に應せん爲め、將に是れを一巻に收めんとして既に其

の準備に着手の後なりしも、幸に本會の趣旨を賛し、且つ進んで本會の事業を幫助せんとて直に快諾せられたり、是れ即ち本會の此の三戦記を出版するに到りし所以なり。

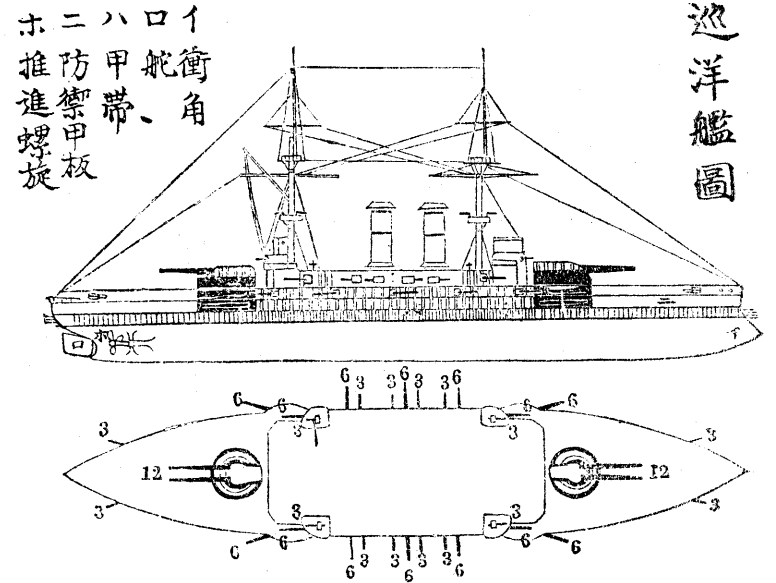
之を要するに、彼の日露海戦記は味方の觀察にして、此の三戦記は敵側の觀察なり、乃ち今や、主客對照、表裏併觀の道を完備して復遺憾なきに到れり、依て以て當年鯨鯢驅逐の跡を尋ね、以て斯道の研鑽に資する所あらは、本會の望焉に過る莫し、若し夫れ行文流暢にして明快なる讀で而して鑿かざるは、畢竟譯者時事新報社の賜なり、爰に、其の來歴を敘し以て觀覽の便に供すと云爾。

明治四十年八月中澁

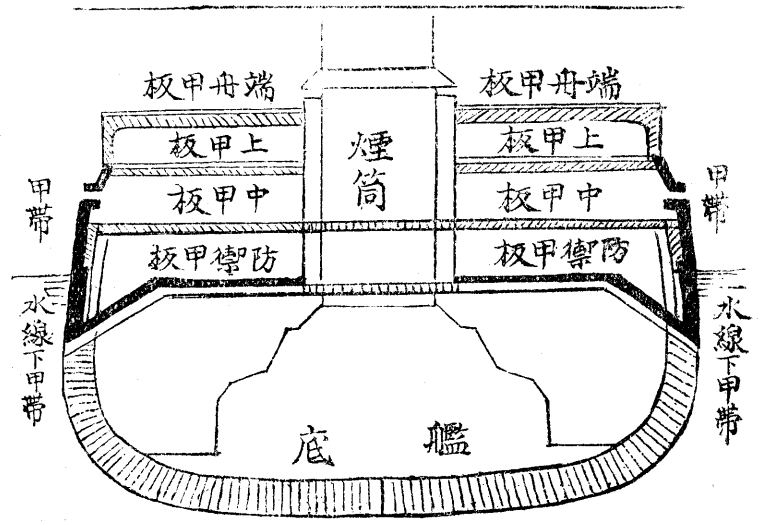
海軍勳功表彰會



巡洋艦圖



12 十二吋主砲 6 六吋主砲 3 三吋速射砲



圖畧断横艦洋巡甲裝

軍艦種類大別

- (戰鬪艦)
- (巡洋艦)
- (海防艦)
- (砲艦)
- (通報艦)
- (水雷母艦)
- (水雷驅逐艦)
- (水雷艇)
- (潛行水雷艇)

は艦隊勢力の中堅にして、攻撃防禦の兩力を供備し、敵艦隊の主力と戦ひ之を撃破するを以て任務とす、其構造は最も堅牢にして艦内の要部は、鋼鉄板又は白銅鋼を以て防禦せられ、攻撃力としては重砲速射中形砲の多數、強堅なる衝角水雷發射管等を備へ速力強大にして壯嚴雄大なる者なり、一等戰鬪艦は壹万噸以上、二等戰鬪艦は壹万噸以下とす

巡洋艦

は裝甲非裝甲の二種あり、裝甲巡洋艦は戰鬪艦と等しく戰鬪に従事すへき構造に成り、非巡洋艦は味方の商船并に運送船を護衛して敵の船舶を捕獲し、又は其航路を妨害し、其他偵察報知の任務を盡す、故に速力強大なるを以て巡洋艦の特色とす、一等巡洋艦は七千噸以上二等巡洋艦は七千噸以下三千五百噸以上、三等巡洋艦は三千五百噸以下とす

海防艦

は戰鬪艦と同じく攻撃防禦の兩力を有し、戰鬪に従事し得ると雖も、戰鬪艦の如く速力大ならず、又喫水淺く炭載量も少なく、爲に進撃には不便なるを以て専ら自國の海岸を防禦するを任務とす、一等海防艦は七千噸以上、二等海防艦は七千噸以下三千五百噸以上、三等海防艦は三千五百噸未満とす

砲艦

は主として港灣の防禦に充つるを以て其艦體の少なると喫水の淺きに比し大なる主砲を有す故に敵の大艦に當り、又は河川に溯りて陸軍の應援をなすを任務とす、一等砲艦は千噸以上、二等砲艦は千噸未満とす

通報艦

は主に二等三等の巡洋艦を以て之に充つるも、戦時は商船を武裝して通報艦となすことあり。は水雷艇の補助艦にして總ての物質を水雷艇に供及するを任務とす

水雷母艦

は水雷艇の大形なる者にして、敵の水雷艇を驅逐破壊して味方の艦隊を防禦し、又進て水雷を發射し敵艦を撃沈するを以て任務とす、通常三百噸乃至四百噸なり

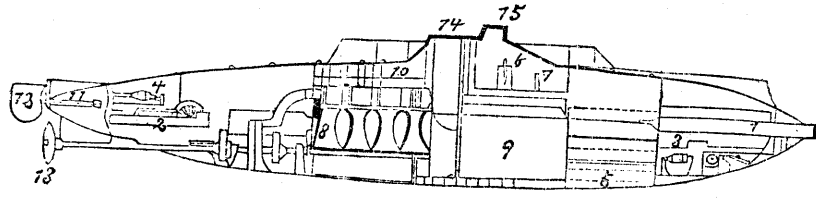
水雷艇

は薄鋼板を以て最も輕快に造られ暗夜又は風雪等の好機に乘し疾驅して敵艦に近づき、水雷を發射し敵艦を轟沈するを以て任務とす一等水雷艇は百二十噸以上、二等は百二十噸以下七十噸迄、三等は七十噸以下二十噸迄、四等は二十噸未満とす

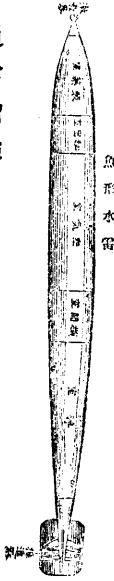
水雷艇

は魚の如き形に造られ内部に自動水雷を備へて海中を潜航し、敵艦に近て水雷を發射し轟沈せしむるを任務とし、機械は電氣力を用ひて運轉せしめ、空氣は氣蓄器に貯へ、腐敗せし空氣は排氣筒にて艇外に排泄し得る仕組となり、最も恐る可きものなり

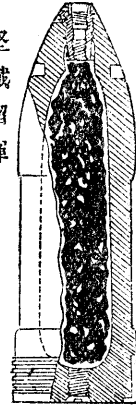
●軍艦は以上の如き目的に依て構造せられ隨て其任務も區別しありと雖も敵艦と交戦の場合は何れも戦闘に従事し得る者と知る可し



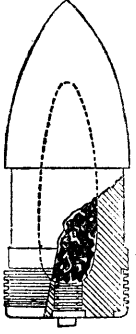
潜水艇内部



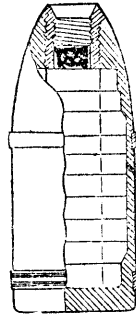
通常榴彈



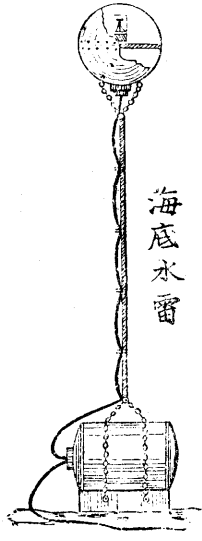
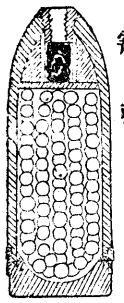
堅鐵榴彈



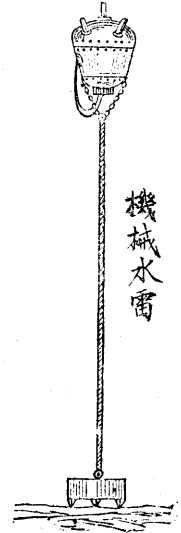
花環榴彈



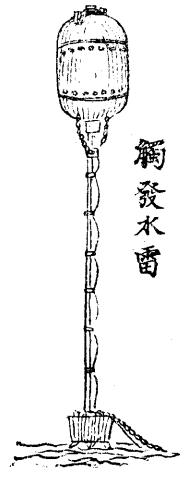
環彈



海底水雷



機械水雷



觸發水雷

水雷の種類及効力

(魚形水雷) (海底水雷) (浮標水雷) (觸發水雷) (機械水雷) (假製水雷)

魚形水雷は攻撃水雷にして其形ち魚の如く軍艦又は水雷艇に装置してある水雷發射管より發射する時は水雷は自ら水中を進行し一定の目的物の衝突するや轟然發して如何なる堅艦と雖も破壊せしむるものなり其他攻撃水雷には漂着水雷外裝水雷牽曳水雷自動水雷等あり然れど魚形水雷の如く効力多大ならず

海底水雷

一名視發水雷とも云ひ海底の甚だ深からざる場所又は潮流の最も強き場所に沈設し敵艦の來るを認めて電氣力を以て始めて爆發せしむるものなり

浮流水雷
觸發水雷

は海底深く潮流弱き所に沈設し之に電線を附け置き艦船通航の察其上部にある電路啓閉器に衝突する時は震動を起し電路を通じて直に發火するの裝置なり

機械水雷

は防禦水雷中効力多大にして陸地を離ること最も遠き場所に沈設し艦内には電路啓閉器を裝置し艦船之に觸るゝ時は忽ち爆發して轟沈せしむるものなり

假製水雷

は臨時應急の場合ひ有合せの物品を用ひて假りに製造したるものなり

砲彈の種類及効力

(通常榴彈) (堅鐵榴彈) (鋼鐵榴彈) (花環榴彈)

(片鐵榴彈) (榴霰彈) (爆裂彈)

通常榴彈

は炸裂力の強大なるものにして非裝甲艦土壘市街等の砲撃に用ふる砲彈なり

堅鐵榴彈
及鋼鐵榴彈

は鋼鐵を以て造られ其頭部は最も強堅にして能く裝甲板を貫き後ち轟然爆發する者にして戰艦及裝甲艦船を砲撃するに用ふる砲彈なり

花環榴彈
及片鐵榴彈

は内部に鉄の小片を積重ね置き發裂して四散するを以て主に艦上甲板水雷艇等を砲撃する砲彈なり

榴霰彈
及霰彈

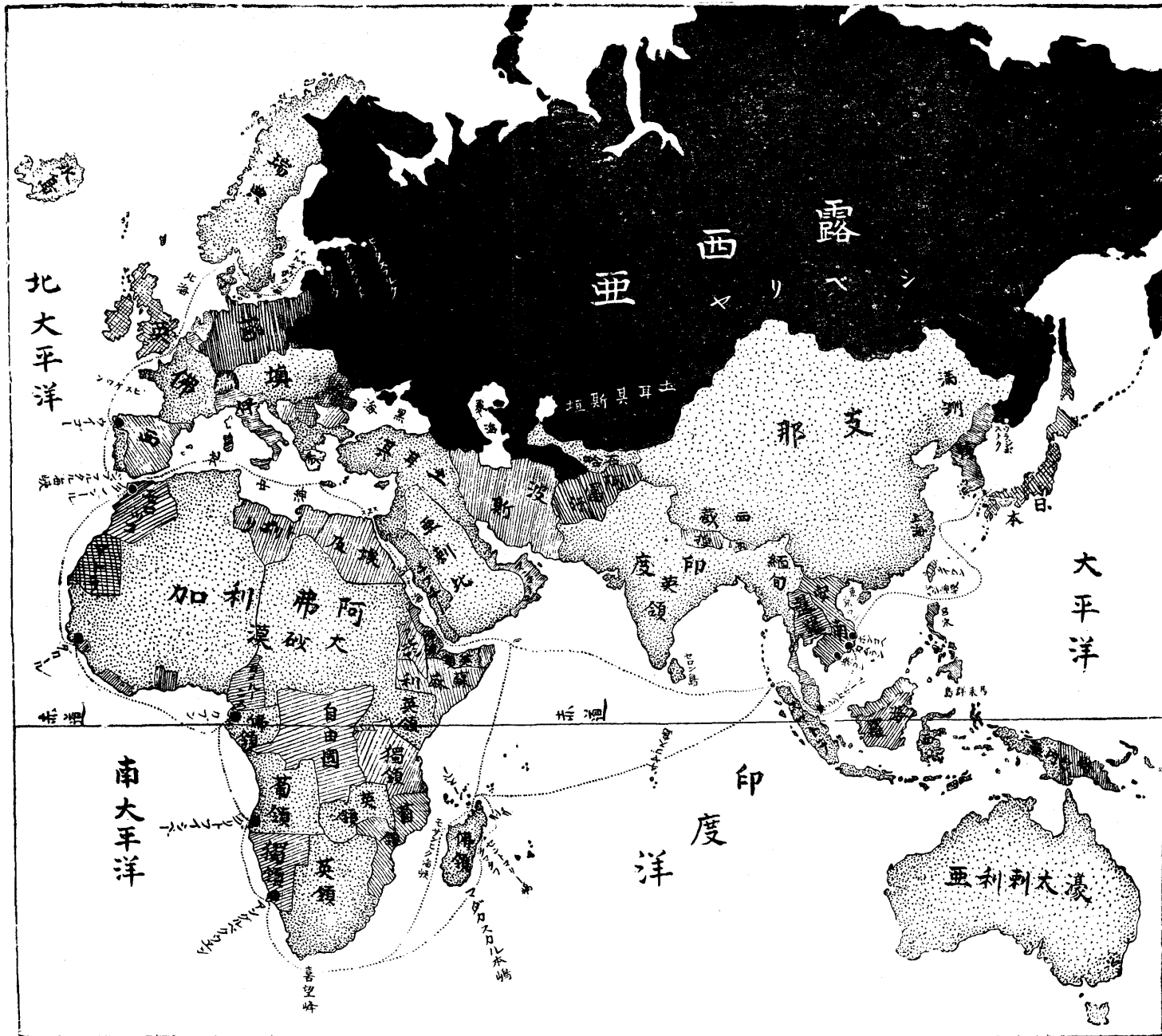
は内部に多數の小丸を詰め置き炸裂して四散す故に近距離にある軍隊又は端舟等を砲撃する砲彈なり

爆裂彈

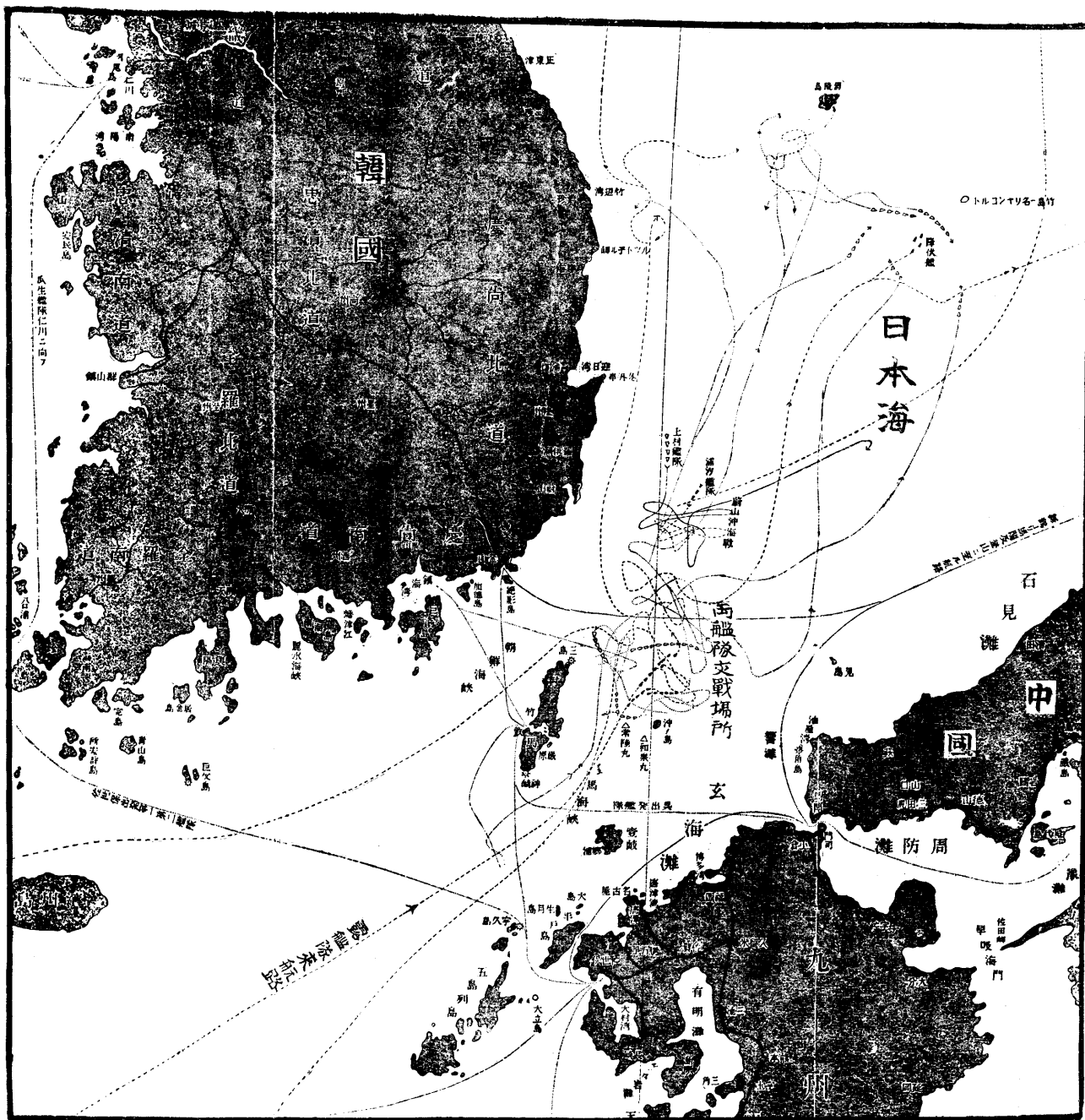
は砲火藥に代ふるに爆發藥を多量に裝填し大破壊力を有するものなり

●砲彈は以上の如き目的にて造られ其内部の構造は實に緻密なるものにして一彈の價二千圓を要するものあり其進行力は殆んと三里に達す軍器の進歩驚くべきものなり

尙詳細の圖解を附しあれば参照す可し

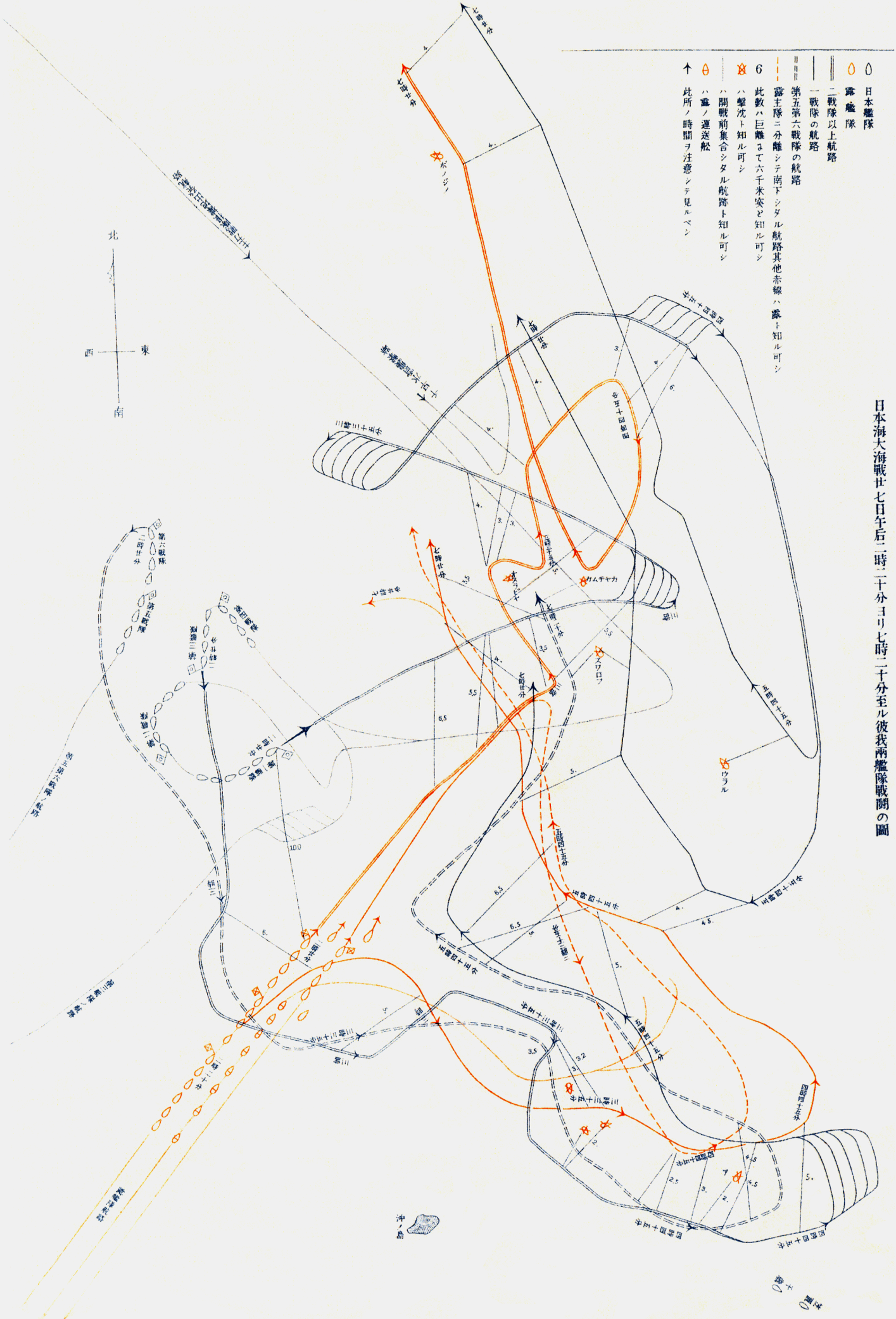


第二第三大平洋艦隊バルチック海より對島海峽迄の全航路を示したる圖



日本海に於ける日露兩艦隊の航路を示したる全圖

日本海大海戦廿七日午後二時二十分ヨリ七時二十分至ル彼我兩艦隊戦闘の圖



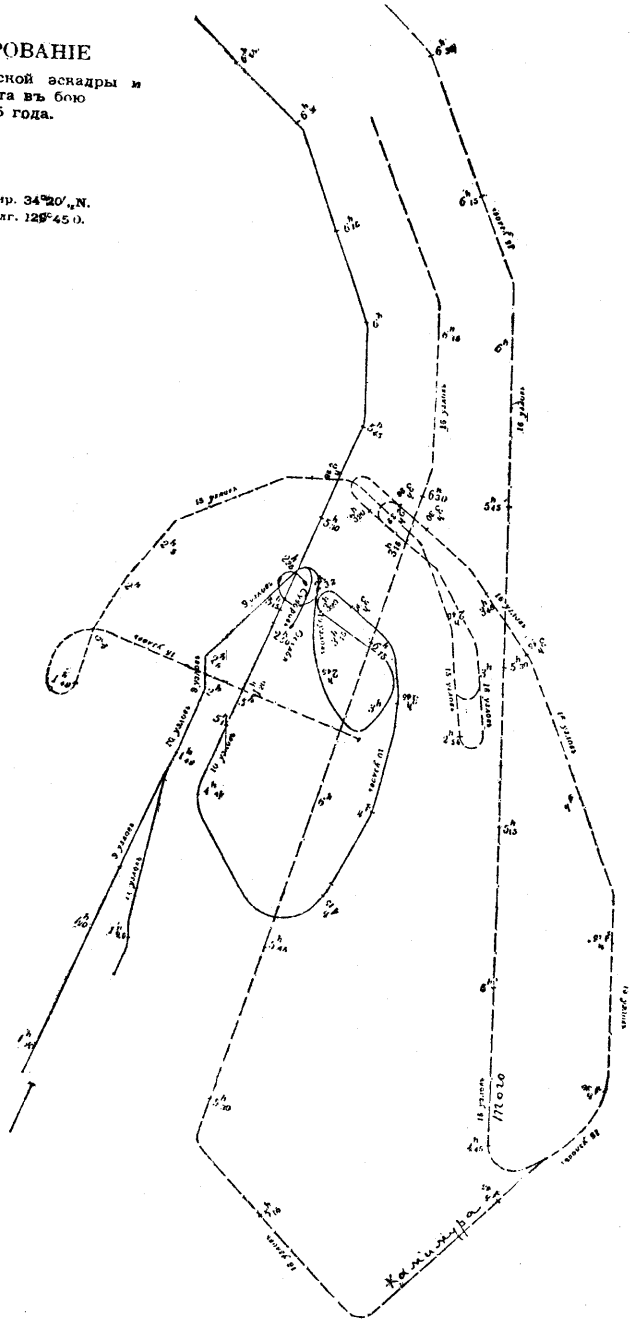
МАНЕВРИРОВАНИЕ

главных сил русской эскадры и
японского флота в бою
14 мая 1905 года.

— русские.
- - японцы.







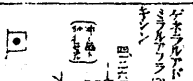



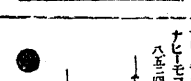
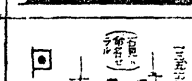
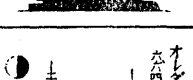
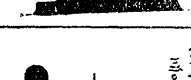
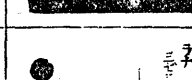




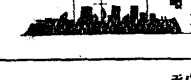
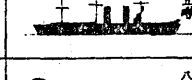

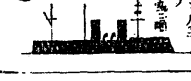

Уч. 49 м. по полушарии | шир. 34°20' N.
| долг. 128°45' 0.

本圖は原書の儘にして我軍に於て作製したる日本海々戦と對照する時は頗る興味ある可し

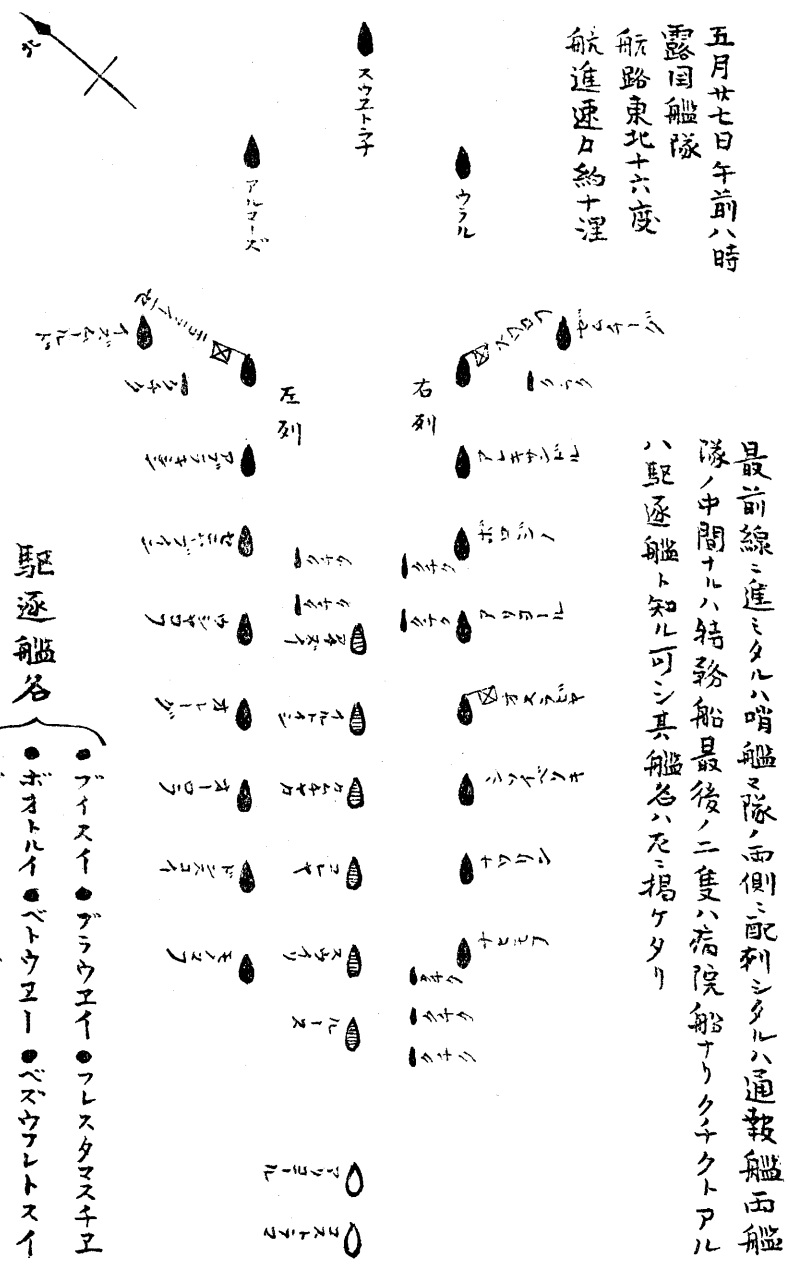


原著日本海々戦圖

露國第二第三艦隊の艦形及艦名

 イノコト 三ツツツ 九三三 三三三	 コト 二二二 二二二	 コト 二二二 二二二
 アト 三三三 三三三	 シソ 三三三 三三三	 イノ 三三三 三三三
 アト 三三三 三三三	 ナカ 三三三 三三三	 ボロ 三三三 三三三
 アト 三三三 三三三	 アト 三三三 三三三	 アト 三三三 三三三
 オレ 三三三 三三三	 イノ 三三三 三三三	 アト 三三三 三三三
 アト 三三三 三三三	 アト 三三三 三三三	 アト 三三三 三三三
 アト 三三三 三三三	 アト 三三三 三三三	 アト 三三三 三三三
 アト 三三三 三三三	 アト 三三三 三三三	 アト 三三三 三三三

上圖ニ現ハセシモノハ
 戦闘艦 八隻
 巡洋艦 十隻
 海防艦 三隻
 尚此外上圖ニナキモノ
 駆逐艦 九隻
 特務船 六隻
 病院船 二隻
 合計三十八隻
 凡例
 ●印ハ 撃沈サレシ者
 ○印ハ 武装解除者
 甲印ハ 捕獲サレシ者



露艦隊最期實記目次

(一)	兩艦隊の邂逅……………	一頁	(一九)	蜿蜒たる兩艦隊……………	四三
(二)	敗戦の根本原因……………	四	(二〇)	旗艦の慘狀……………	四四
(三)	艦列變更の命令……………	七	(二一)	彼我射撃及砲彈の比較……………	四七
(四)	夜間の艦列に就て……………	一〇	(二二)	彼我射撃及砲彈の比較(續き)……………	四九
(五)	偵察の狀況……………	一三	(二三)	戰艦構造の缺點……………	五一
(六)	偵察にも力めず會議をも開かず……………	一四	(二四)	激戦再始の光景……………	五三
(七)	露提督の豫期……………	一六	(二五)	ポロヂノの最期日本水雷艇現出……………	五五
(八)	艦隊編成の狀況……………	一九	(二六)	日本水雷艇活動……………	五七
(九)	頻々信號の變更……………	二三	(二七)	暗中漂蕩の艦隊……………	五九
(一〇)	戰鬥力の分散……………	二四	(二八)	日本艦隊の追撃……………	六一
(一一)	實戦前日の演習……………	二五	(二九)	我艦の絶望……………	六一
(一二)	大海戦前の一夜……………	二七	(三〇)	敗殘艦隊の包圍旗艦投降の信號……………	六五
(一三)	敵艦和泉現はる……………	二九	(三一)	殘艦降伏の情景……………	六七
(一四)	日本艦隊の現出……………	三一	(三二)	提督の降伏談判……………	七〇
(一五)	巡洋艦の出沒……………	三三	(三三)	無限無量の耻辱降將の衷情如何……………	七二
(一六)	出羽艦隊の出現……………	三五	(三四)	日露の戦術比較……………	七五
(一七)	大海戦の開始……………	三六	(三五)	艦隊司令權の真相……………	七七
(一八)	旗艦の苦戦オスラビヤの最期……………	四〇	(三六)	砲員の養成如何……………	七九

(三七)	戰艦構造注意……………	八二
(三八)	露國軍艦の缺陷……………	八四
(三九)	砲員防禦水雷攻撃……………	八五
(四〇)	旗艦の苦戰艦上砲彈の掃射……………	八七
(四一)	旗艦猛火に包まれる……………	八九
(四二)	旗艦の最期……………	九一
(四三)	乗員全滅の戰艦……………	九二
(四四)	勇敢なる艦長……………	九四
(四五)	唯一人の生存者……………	九六
(四六)	備砲悉く破壊……………	九九
(四七)	日本軍艦の義擧……………	一〇一
(四八)	日本水雷艇肉迫……………	一〇三
(四九)	漂蕩十六時間……………	一〇五
(五〇)	殘存二艦の最期……………	一〇七
(五一)	一巡洋艦の最期……………	一〇九
(五二)	モノマフの最期……………	一一一
(五三)	壯烈なる巡洋艦……………	一一三
(五四)	工作船の最期……………	一一五
(五五)	提督と驅逐艦……………	一二七
(五六)	提督投降の決議驅逐艦の擊沈……………	一二八

(五七)	健氣なる驅逐艦……………	一二三
附 錄	日本海の海戰公報……………	一
	露提督の報告……………	二七
	日本海の大戦と名國新聞の評論……………	三三

露艦隊最期實記

原著の序文

對馬海戰は今日に臻るまで尙ほ全世界に於ける難解なる一の謎たるが如き觀あり余は對馬戰に参加したる一人なるが今茲に第二第三兩艦隊が太平洋に於て邂逅したる後の我が艦隊航海の實況と運命的なる事件の光景とを最も詳細に描寫せんと欲す若し此叙事描寫が能く惡運なる一切の秘密を發くの關鍵たるを得ば余は全く自己の勞に對する褒賞を得たる者として是にて満足す可し。

(譯者曰く此の簡單なる小序は筆者が卷頭に記したる序文なるが筆者は對馬海峽戰に参加したる參謀將校の由なるも自ら自國艦隊の缺陷弱點を摘發して敗戰の運命を招きし秘密を暴露せる事なれば其身に後難の襲ひ來らん事を慮りて其名を公にせず)

(一) 兩艦隊の邂逅

一千九百五年五月九日の正午に萬里の波濤を越えて日本と對戦するが爲に太平洋に差遣せられたる第二第三の露國兩艦隊内に起りし歡喜雀躍の狀は實に言筆の得て盡す可らざる者ありき是れ第三艦隊と

の邂逅が殆んど既に絶望せられし際に當りてネボガトフ提督の率ゐ來れる一艦隊が太平洋上に於て其主力なる第二艦隊と茲に合するを得たるなり上長官より下級火夫に至るまで人々皆な元氣恢復して全艦の士氣大に奮ひ各自其任務に當る氣力の盛になれるを自ら感じたり此の日の天候自然も亦此全艦隊の欣喜の情況を一層大ならしむるが如き光景にて碧空一點の雲なく風穩かに海靜かにして眞に得がたきの好天氣なりき我が第二艦隊の司令長官ロジエストウエンスキイ提督は此の日第二艦隊の艦列を東より西に亘れる二箇の梯陣に配列せりネボガトフ提督の枝隊は北方より單梯陣を爲して主力艦隊に向て接近し來り主力艦隊の殿艦に追尾して前二列の艦列と並行して第三線を畫せり艦隊通過の際には各艦互に欣喜安問の聲耳の聳せんばかりに發してウラー(萬歲)の歡聲を交換せり其喜悅と希望の如何に眞摯熱烈なりしかは此の歡呼の聲にて察せられたり。

ネボガトフ提督司令の下に在りし第三艦隊は今日までも第二艦隊に果して合するを得るや否やの苦痛なる疑懼の念に滿され全員怏々として樂まざりしが今彼等は第二艦隊に首尾善く合するを得て此の懊惱より免るゝを得たり然のみならず此の一小枝隊は太平洋上に於て時々刻々に敵の主力艦隊に出會するの疑懼に迫り若し優勢なる日本艦隊に偶然邂逅する如き場合あらんには日本艦隊は何等の損害をも被らずに此の第三艦隊を殲滅す可かりしを以て其第二艦隊に合する今日まで將校となく兵卒となく全員皆な其の心中に斯の如き苦痛なる憂虞を以て充されしが今や全員悉く安心の太息を漏したり。

第二艦隊の方にも其將校等の多くは今日までは未來の運命を大に悲觀して士氣太く沮喪したるも今この太平洋上に於て舳舻相啣みて來航したる第三艦隊と合するを得て士氣大に振ひ今は全艦隊將校の多數者は既に戰鬪の勝算を疑はざるに至れり。將校中にて最も悲觀的見解に陥り居りたる人々さへも今や斯くも威嚴赫々たる我が大艦隊は有爲にして智謀ある指導者か之を指揮したらんには假令その全艦隊の滅亡を賭してなりとも日本の海軍を見事に撃破して之を其の自國の港灣深く蟄伏せしめて一歩も出る能はざらしめ久しく日本海軍の領有に歸し居りたる海上を遂に我が浦鹽巡洋艦隊の領有に歸せしむるは敢て難きに非ざるを信せしめたり。

第二第三艦隊の聯合艦隊の司令長官たるロヂエストウエンスキイ提督は此の兩艦隊の相合したる事を如何に思念したるか同提督か遠征航行に堪へざる艦船を認めて先きに伴航を拒絶したる艦船も第三艦隊に編成せられて來航せり我等は艦橋の上より望見し居りたるにロヂエストウエンスキイ提督は艦梯の邊に出で、ネボガトフ提督を抱くが如くに之を擁して迎へたり、又傳聞する所に依れば既に殆んど邂逅の望み絶えたる際に此の第三艦隊の來援を得たるをロジエストウエンスキイ提督自らも大に悦ばれたりとの事なり、我が第二艦隊は既に屢々佛國政府の通牒を受け幾度か巡洋艦を遣はされて中立海上を退去す可き事を迫られしを以て若しネボガトフ提督にして四十八時間遲着したりしならんには第二艦隊は第三艦隊を待受けずに出帆せざるを得ざりしなり、第三艦隊の來援は何故に喜ばしかりしか大口徑十三門の大砲は大に艦隊の希望を強からしめたるを以てなり、特に日本艦隊は其艦船の速力の優強なるを利用し既に今までの海戰の例にも見ゆる如く彼等は交戰の際に敵艦隊との間に大間隔の距離を選ぶに相違なきを以て大口徑砲を有する第三艦隊に合したるを得たるは大に艦隊の希望を強からしめたるなり。

(二) 敗戦の根本原因

然り第二艦隊に大口徑砲を有する第三艦隊の加はりたるは大なる援助を得たる者に相違なきも是れ此の大口徑砲を巧に發射する者ありて始めて大なる援助の効を奏す可きなり、然るに對馬海戰の結果に徴すれば第三艦隊の諸艦より其の大口徑砲を發射するの拙劣なるロジストウエンスキイ提督の諸艦よりの大砲發射の拙劣なるに毫も異らざる者ありき是れ實に事情の然らしめし所にして寧ろ斯くある可きは當然なりしなり、第二艦隊も第三艦隊も實彈射撃の演習を爲したるは僅に二回のみにて而も充分に實彈を發射せしめられしに非ずして各砲發射の砲彈は非常に制限せられし箇數の射的を許せしに過ぎざりき是洵に止むを得ざる次第にて艦隊は何處にも砲彈の如き軍需品を他に求めるの道を有せざりしなり、斯の如くなるを以て戰爭の際に掌砲長が巧に發射を爲さん事を望むは寧ろ無理なる注文なり、若し彼等掌砲長は六箇月間に各砲より僅々十發乃至十二發の實彈を發射せるに過ぎざりしとせば戰爭の際に如何に經驗に富みたる巧みなる砲員にても必ずや心騒ぎて狼狽せざるを得ざる可し。將に實戰に臨まんとする人員に相應の實驗を與へんと欲せば六箇月間の中には二回位の實彈發射にては何の用をも爲さず日本人の爲したる如くに二十二回或は其以上の演習を爲さしめざる可からず余が日本の水兵より聞きし所に依れば日本艦隊はロゼストウエンスキイ艦隊の來航前に一度戰鬪艦を伴うて外洋の射撃演習に出で種々なる天候の場合に發射を實驗して其後佐世保に歸港し新に軍需品を搭載して再び射撃演習に赴きたり、其の後順次載砲を取換へて我が艦隊の來航せる前には此新に取換へたる砲

より可なりに實彈を發射するを得たりしなり、又彼等日本水兵の言に依れば日本艦隊は此の間に對馬海戰に備ふる爲に各六吋砲より實彈約五百箇を發射せり、若し此の數が幾分か誇大なりとするも左まで大なる懸値に非ざる可し何んとならば彼等日本人が對馬海戰の際に發射したる如く驚く可き精確なる射撃を爲さんが爲には最も多くの實習を要す可きを以てなり。

勿論是れ彼等日本人は其の郷國に於て爲すことなれば甚だ容易にて砲彈の缺乏を感ずる如きは固よりあらざりしなり、然るに我等遠航の途に在る者には甚だ困難なりしなり然し困難は困難に相違なきも亦敢て之を爲し難きには非ざりしなり、若し夫れ此の事の責任を有する者が艦隊差遣の議の決定したる當時より眞面目に此の問題に腐心したらんには此の必要なる事實を充分に認るを得べきを以て充分に戰鬪用品を準備し運送船を以て之をノッソペーに送遣し同地に於て前途に横はれる其の高尙至難なる試験に對し砲員を眞面目に教習準備せしむるを得たるなる可し、我諸艦はマダガスカルに於ても亦航海中にも熟心練習を爲せり但し其の練習は只だ石炭積込みの一事のみにて此石炭積込みの仕事は驚く可き程迅速になりて斯の如き進歩を爲す可しとは最初何人も想像するを得ず、或る船艦の如きは一時間に百三十噸を積込むを得るに至れり。余は決して乗員をして迅速に石炭の積取らしむる此の演習に對して嘲弄を爲さんとする者に非ず余は此の石炭積込みを以て海軍の近世戰爭行動中の重要な要素の一と爲す者なり、左れど我等が萬難を排して日本人の目前に來りしは是れ決して石炭積込みの迅速なる事を競争するが爲には非ざる可し石炭積込みの競争にては日本人は其競争場の決勝點まで達するを得ざる者ある可きは余も信する所なり、我等が日本を目指して來航したるは最も善く精確なる射

撃を爲すを得て日本の海軍を殲滅せんが爲めに非ずや此問題に對して誰よりも直接の關係を有せるは艦隊の長官たるロゼストウエンスキイ提督なるや勿論なり、同提督は何人よりも最も能く我が砲督の不足と砲員の不熟練とを識れるに相違なし同提督は是れ迄で二箇年間も砲術練習部隊の司令官の職に在りし人なれば此の部隊の砲術長は未だ以て完全なる練習を爲せる者に非ずして僅に豫備科を終へたる者に過ぎざるを熟知せる筈なり、如何となれば該部隊に於て演習したる射的距離は三十ケール以上の大距離の射撃を爲さず且つ其の射撃も陸岸に在る不動標的の射的に過ぎずして浮流標的に對しては(風位の)反對航路に向て十二ケールの間隔に於て射的を爲せるのみなるを以てなり、然るに戦争の實驗——尠くとも日本人との戦争の實驗に徴すれば卅ケールの間隔の如きは交戦艦隊が接近し得る最小間隔に過ぎず、八月十一日(露曆の七月廿八日)並に八月十四日(八月一日)其の他對馬海戦の際の如き何れも斯の如くにて對馬海戦の時には僅に先頭に在りし船艦が往々小距離の間隔に於て交戦せる事あるに過ぎざりしならん、

提督たる者は政府に注意を與へて砲員練習の爲に砲彈其他戦闘資料の必要なる事を識らしめ其が爲に運送船の必要なる事を認めしむ可きに非ずや——然し是れ余一箇の私見に過ぎず余は提督を信せんとする者なり左れど若し提督が之を爲したりとするも想ふに左まで熱心に此の事を慮りしには非ざる可し彼の不運なる賭博に金を悉く賭けし如くに露國が極東に差遣せるロゼストウエンスキイ提督の崇拜熱は實に非常なる者にて若し彼が艦隊の爲に鳥の乳を要すと云ひ此の鳥の乳なくんば戦争に赴くを得ずと云へば或は之をも與へらるゝ如くに何事も意のまゝなりしなり、實に艦隊砲員の實地練習の爲

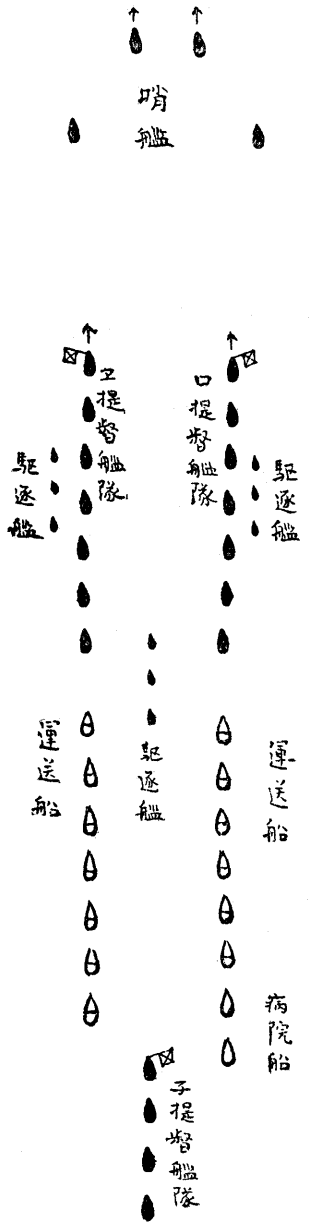
に砲彈を有せずんば其結果は識る可きのみ。

余が斯く永く此の問題に就きて述べし所以のものは我が艦隊の敗戦の最も重大なる原因は疑ひもなく此の砲員練習の未熟と砲彈の缺乏に在りしを以てなり。我が砲員の射撃拙劣なる事實が提督の頭腦に如何に入り居りしやを識るは趣味なき事に非ず而して此の射撃の拙劣なる事を認めながらも近日の中に實戦に臨まんとする者なり、我等がクアペ灣(第二艦隊の寄港地)に於て聞きし所に依れば艦隊司令官ロゼストウエンスキイ提督は非常なる神経質の人にて喜怒哀楽なきを以て部下の諸士官は勿論諸艦長等と雖も提督と談話を交へんとする者甚だ稀れなりとの事なり、或時の如きは同提督は公用を以て訪問し來れる一艦長を引見して提督身は一言も發せず默然として艦長の言ふ所を聞きたる後ち提督は憤然として艦長の言ふ所を拒否し且つ公衆の目前に於て彼を誹謗せりと云へり、ロ提督の斯の如き神経質は或は是れ彼が率ゐ來れる大艦隊が遠からずして全滅せられて再び取り還す事を得ざる運命を免れずとの先天的意識より來れる結果に非ざるか。

(三) 艦列變更の命令

前段にも既に述べたる如くネボガトフ提督の率ゐる枝隊は五月十日の黎明にクアペ灣に遣はされ同日の四時より石炭の急速積込みを始め其の夜は通宵積込みを爲し其の翌日も夜に入るまで引き續き積込みたり、斯くて裝甲海防艦の諸艦は各自六百噸より六百五十噸の石炭を積込みたり。艦内到處殆んど石炭の置場に用ひられざるなく隅より隅まで見ゆる限り皆な石炭にして砲塔の周圍も砲臺も水兵用

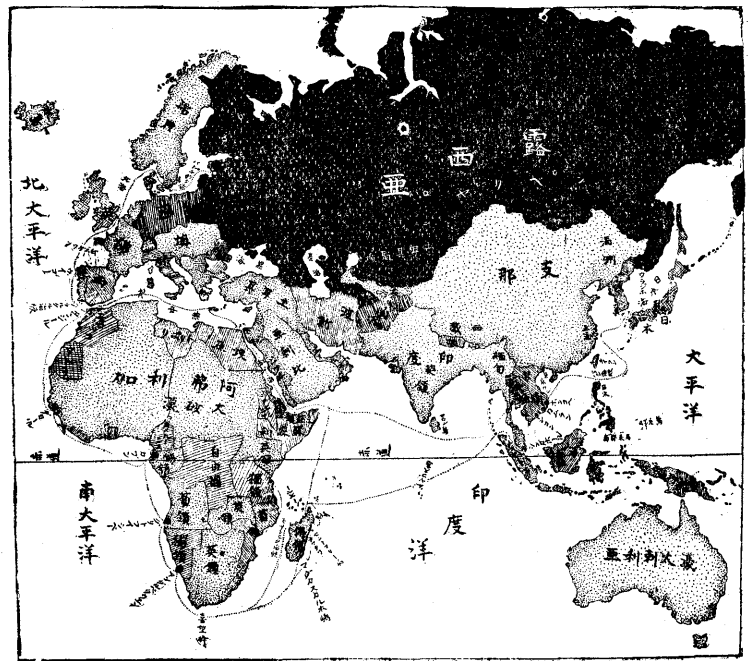
の物品箱その他居住甲板上の艦長の居所までも苟も長官の目に觸れたる空處は悉く皆な石炭を以て滿されざるはなし。此の石炭の積取りと共に第三艦隊運送船より軍艦旗を掲げ居るイルトイシ並にアナドトル等に軍需品の轉載を爲せり、遂に十二日の夜に入りて是等諸般の作業を終り其の翌日十三日の朝に至りて命令あり同日の正午を以て外洋に發向するの準備を爲す可しと左れど後ち又命令ありて出帆は明十四日の拂曉まで延期せられたり。



艦隊司令長官が其四十八隻の艦より成れる此の大艦隊を如何なる艦列を作らしめて統率するか、又同提督は敵の不意の襲撃ありたる時如何に此の大艦隊を防護せんとするかは大に余の趣味を感ずる所なりき。夜に入りて發航の艦列を示せる命令を受けたり全艦隊は二列の大梯陣艦列に配列せしめ左の如き順序なり、右列梯隊はスワロフ、アレキサンダー、ボロチノ、アリヨール、ドチアル、オレーグ、アウロラの諸艦左列梯隊はオスラビヤ、シリイ、ナワリン、ナヒモフ、リオン、ドンスコイ、モノマフの諸艦なり運送船の一隊も日中の船列は同じく二列の梯隊を作り軍艦梯隊の艦列に續かしむ可し、艦隊の前程には三乃至四ヶケールの距離を隔てスウエトラナ並に補助巡洋艦ウラル、グバン、テレグの諸艦より成る所謂偵察枝隊なる者を前進せしむ可し、又梯

艦列變更の命令

第二第三太平洋艦隊リバツより對馬迄全航路



隊の先頭に在る諸艦と垂直線を爲さしめてゼムチユーク並にイズムールド等の第二偵察部隊を配列せしむ可し、最後に艦隊の背面防禦の重鎮としてネボガトフ提督の指揮の下に獨立部隊を爲してニコライ並に三隻の裝甲海防艦は全艦隊の殿艦たり、驅逐艦は何れも運送船の曳船と爲さるを得ずアルマーズには運送船の事務官搭乗し居りしを以て始終運送船の船列中に在るを要す。以上は日中航進の艦列なるが夜間には艦列を左の如き状態に變更せざるを得ざりき、即ち戦艦の梯陣に於ける各艦の間隔を二倍に遠離し且つ速力を減せしめざる可らず、運送船は同じ梯陣航路と同じ速力を持続して戦艦二列梯陣の中間に入らざる可らず、其他は皆な従前の如き航進を爲せり、斯の如くなるを以て夜間も全艦隊は依然として日中の艦列を持続し只た二列を四列と爲して艦列を短縮せしめ運送船を艦隊諸艦の中間に位置せしむるに過ぎざりき。

(四) 夜間の艦列に就て

五月十四日(露曆五月一日)朝六時に灣内を出帆し我が枝隊を灣口附近に於て待ち合せたる艦隊に合し前記の如き日中航隊の陣形を造りたり、時に西北を指して八湊の速力を以て航進せり、夜間には全艦隊何れも艦尾の備砲に裝弾し且つ各艦の區別燈火を掲ぐ可き命令ありたり、我艦隊に於て白鷺といふ綽號を與へられたる病院船アリヨル並にコストロマは皆な燈火を出して艦隊より少しく離れて後に從へり、リバウよりクアベ灣に到着するまで始終燈火を隠して來航せる我等第三艦隊の者には奇怪にも夜間明燈を出して航進する此の事實が如何にも了解するを得ざりき、近く航進艦隊を望見すれば各

艦の燈火は明煌々として恰も遠く電燈裝飾をなしたる一市街を展望するの觀あり、病院船の特に明るき幾多の燈火の如きは遠くより之を望見するを得べく士官等は此の燈火裝飾の狀を洒落れて是れクリスマスノヨルカ(燈火其の他の裝飾を施したる綠樹)なりといへり此のクリスマスノヨルカは遠距離よりして望ましからざる凡ての觀察者の注意を引く事甚だ容易なる可し。

全艦隊航進の日中の順序は充分に便利なるものありき運送船の保護も行届けり、敵艦隊が突然現出する場合に際し我が二列梯陣の各戦艦は充分迅速に其の欲する所の方面に向て單列縦陣の戰團陣形を作るを得可し、又ニコライ並に三隻の裝甲海防艦の擁護の下に在る各運送船は其の時敵艦隊の反對の方向に去を得べく而して此四隻の戦艦は諸運送船の安全なるを見届けて後ち直に艦首を轉じて其の援助の最も必要と認めたる點に對して主力艦隊に合するを得可かりしなり。然るに夜間の艦列編成は何等の卓越せる特點を有せざりき夜間の艦列は前述の如き状態なるを以て運送船は只だ敵の快速力を有する巡洋艦の不意の襲撃より防禦せられしに過ぎず、敵の巡洋艦は斯の如き艦列に對しては暗夜を利用して我に近づき運送船を砲撃して直に全速力を以て遁れ去る如き事を爲すを得ず、然るに我が全艦隊の此の夜間艦列の編成は是れ自ら強て敵の水雷艇の襲撃を招くが如き最も奇怪なる陣形なり、余は既に夜間の艦隊の光景は宛然是れ燈火裝飾を施したる一市街を望見するが如き觀あるを述べたり、艦隊より四ケープル前方に前進せる偵察枝隊の將校等は余に告げていへり曰く四列梯陣の各艦の明燈を前方より遠く望見すれば恰かも三通りの長き街衢を眺むるが如し、左れば敵の水雷艇は前方より全速力を以つて此の街衢の一筋に割り込み其の間を前より後に通り抜けながらその總ての水雷を發射し終り

て一の砲弾を受けずに通過し去ること甚だ容易なり、何となれば斯くの如き場合に際して敵の水雷艇を砲撃するを得可きは只だ我が艦列の殿艦のみにて其れも敵の水雷艇が既に此の反逆的市街（自ら敵に利益を與ふる如くに編成せられたる艦列）を通過し去りたる後ならでは砲撃するを得ざればなり。若しそれ敵の水雷艇が梯陣の中間に割り込みて突入したる際に水雷艇の砲撃を始めんか自艦の射損砲弾は悉く皆な假令直接ならずとも跳躍して他列の自艦に命中す可く忽ら同士打となりて恰かも彼の北海事件の當夜の「アウロラ」の如き始末を免かれざる可し。若し艦隊の偵察任務にして完全に組織せられたらんには固より斯くの如き事件にも遭遇せざる可し、左れど尙ほ詳細に下に記述する如く我が艦隊には偵察任務なるものは絶對的に少しも存せざりしことは余の大いに悲まざるを得ざる大缺陷なり。

（五） 偵察の状況

五月十五日天氣は引續き穩かなり艦隊は正午に北緯十三度五十八分、東經百十二度五十五分に在り大砲射撃の演習ありたり一定距離の實習と遠距離試射等を演習せり、我第三艦隊は此の最後の演習に對して最も眞摯なる注意を拂ひたり且つ斯の如き演習は主力艦隊に合する前にも施行せられたり。

此の日晝飯後にデミトリイドンスコイは無線電信にて海上に於て潜航艇の反射鏡（水中より前方を望見する玻璃窓）に類似せる物を認めたる事を報告せり、左れど之を露骨にいへば我等の取れる如き航路の外洋遙かに斯の如きものゝ有り得可き事を艦隊には一人も信する者なかる可しと想はれたり察するに同艦

は前に進みし近くの軍艦が其の舷側より何物かを投棄したるを反射鏡と見誤りたるに非ざるか、夕飯前にニコライにて發したる砲聲を聞き多少疑懼の念を起さしめたり左れど同艦は直に信號を掲げて不慮の發砲に過ぎざりし事を報じ人々皆な安心せり。

夜に入りて東北五十度の航路を取れり、翌日も何等の出來事無く全く穩かに送れり只だウシヤコフが分外に多く石炭並に淡水を消費したりとて提督は信號を以つて同艦に對して不満の意を表したる一小事件ありしに過ぎざりき、提督は石炭の浪費などよりも大切なる射撃の拙劣と艦隊運動などの如き一切の不満足不完全を諸艦に許容し居りながら今石炭の事に就きて提督の此の行動あるは是れ概して石炭は提督の神經を最も苦しめ居る弱き弦線なる可しと察せられたり、艦隊は正午に北緯十五度四十分の位置に在り東經百十一度三十五分。

五月十七日十一時三十分ロゼストウエンスキイ提督は「明日黎明より全艦隊の石炭積込みを行ふ」との信號を掲げたり、午後一時に所謂偵察枝隊と稱せらるる「スウエテラナ並にウラル」は今夜六時まで艦隊に歸航す可しとの命令を受けて偵察任務に差遣せられたり。今日は甚だ珍らしき日なりき元來巡洋艦が艦隊に附隨する所以のものは専ら是れ偵察任務に當るが爲なり、今日は珍らしくも是等巡洋艦は此の偵察任務を受けたるなり余は茲に斷言す斯の如き事のありしは甚だ容易すぎ事なるも始めより今までに只だ二三回に過ぎずと、敵の根據地に接近して既に十三日此の間に一二隻の巡洋艦を僅々三回位二十哩や三十哩の前程に遣はす位の事は果して是偵務と稱するを得べきか否な斷じて偵察と稱するを得ず、若し艦隊の司令長官の腦中に偶々一二隻の巡洋艦を二十哩や三十哩の前程に差遣するの想

像起りたりとせば是れ想ふに旗艦スワロフより三ヶーブル前方に配列せられたる其の四隻の巡洋艦に與へたる所謂偵察枝隊といふ嚴かなる名目の名分を完うせしむるが爲に是れを爲せるに過ぎざる可し旗艦スワロフと偵察枝隊の間隔は三ヶーブルに過ぎざるを以て旗艦スワロフは偵察枝隊よりも常に速かに前方地平線上に現はるゝ諸事を認め得るなり、是れ旗艦スワロフには各巡洋艦よりも十五倍も多く信號員を搭乗せしむるを以つて巧みなる信號員は皆な悉く旗艦にて航し居るは勿論なりと信ずるを得べきを以てなり。

(六) 偵察にも力めず會議をも開かず

我艦隊にはウラルの如き精巧有力なる無線電信機を設備せるものは勿論の事此の外にも偵察任務に敵せる巡洋艦甚だ多く、クバン、テレク、リオン、ドネプ、スウエトラナ、アルマーズ、ゼムチュグ、イズムールドの如き皆な是れ約廿ノットの快速力を出すべき諸艦なり(但しテレクのみは十七ノット以上を出すを得るや否やは疑はし)就中前の五隻の如きは石炭の貯藏も甚だ豊富にして且つ高き望樓を有するを以て後の四隻と共に有力なる偵察上の羅針となり全艦隊をして敵の接近を遠方より充分に警戒せしむるを得可きかりしなり、然るに絶えて是等の利器を利用せざりしこと前記の如し、

我が艦隊の航進は斯の如き有様なるを以て敵艦隊は何時にても其の好機と認むる時に突然我が艦隊を襲撃して、恰かも對馬海戦に於て遂に此の事ありし如くに我が艦隊をして戦闘陣形を作るの違あらし

めざる不意打を爲すを得べかりしなり。

我が艦隊は正午北緯十八度二分東經百十一度五十五分の海上に在り夜は無事に明けて翌五月十八日の朝五時十五分には北緯十九度三十分東經百十九度四十六分の地點に在り旗艦の信號に依りて機關の運轉を止め汽艇並に脚艇(バルカス)を下して運送船より機走船にて石炭の積込みを始めたり、巡洋艦リオン、ドネプ、クバン、テレクの諸艦は石炭積込中何れも信號を認むるを得べき距離内即ち例に依りて又も二十五哩乃至三十哩の距離内に在る可きを命せられたり。我等思へらく艦隊司令長官は交戦前に於ける最後の艦隊停止なるやも知る可らざる此の停船の好機を利用して各艦長を旗艦に召集して會議を開き彼等に訓示するに前途に横はる海戦に對する提督の籌略を以てし、且つ提督が特に彼等の注意を要すと認むる所のものを訓示し或は提督が臨機に取らんとするを企圖を説示するならんと余はクアベ灣に碇泊中に或は斯の如き會議あらん事を期せり余は又各艦の掌砲長たる將校一同が或は旗艦に召集せられて旗艦の掌砲長より提督の畫策に一致して如何に各艦の備砲を操縦す可きやを訓示せらるゝ事あらんとさへも期待せり、されど第二第三兩艦隊の合したる際に一も斯の如き催なかりき然れども余は豈敢にロゼストウエンスキイ提督が自己の企圖を全く識らしむる事を欲せざる者とは信せざりしが故に余は自然尙は望みを屬して司令官會議は戰爭間際に至りて海上に於て召集せられ各艦長が交戦の際に服膺す可き事柄を提督より訓示せらるゝならんと期待せり、元來一切の海軍戰術は之を要するに提督と其の提督の統率する艦隊とが一心同體となりて活動するに在るを以て提督たる者は必ず各艦長に自己の企圖見解を訓示服膺せしめて各艦長が獨立行動を爲すに當りても其の行動は恰も

提督の分身が各艦に在りて行動するが如くならしめざる可からず、交戦前に各艦長を一度に召集して軍議を開催するの邊なきを以て當時既に斯の如き一致の精神を纏むるを得ざりしとするも兎に角に提督の懐き居る重なる希望と畫策とは必ず之を各艦長に識得せしめざる可からざるに非ずや。

同十八日午後五時に石炭の積込みを終了し信號に従て端艇を掲げ各艦何れも航進艦列を作りてボタン嶋に對し東北七十二度の航路を取れり、艦長會議の開催あらんと之余が想像は遂に行はれざりき、同夜戦闘艦アラキシンは機關を破損せる爲め全艦隊は終夜速力を減じて徐航せり十時頃に眞横に當りて一汽船を認めたりオレーグに之を拿捕す可きを命せられたり拿捕船はオルダミヤと稱する英船なり

(七) 露提督の豫期

翌十九日は陛下の祝祭日にて朝來滿艦節を爲し各艦三十一發の祝砲を發射せり、同日朝八時頃にゼムチューグは他の一汽船を拿捕せり此の船は日本に使用せられたるものなる事を認めたるも直に解放したり、正午艦隊は北緯十九度五十二分東經百二十度五十二分に在り、運送船リオニヤは拿捕船に赴き同船と舷側を繋ぎ合はして同船に石炭を積込む可く又オレーグは同船より直に英人を悉く收容す可きを命せられたり。五時頃に旗艦スワロフの橋頭に信號を掲げ「今夜は特に警戒を要す」と告知せられたり、速力を緩うし徐々航進す夜は全く無事に明けたり五月二十日八時頃にボタン嶋を眞横に望見して東北五十度の航路を取りて太平洋に出でたり、是に於て提督は我が艦隊をして臺灣海峡を通過せしめずとの一事は明かになれり、唯だ殘る所の疑問は我等は日本と大陸との間を通過せんとするか或は南部日本の嶋嶼を迂廻し陸岸を遠く離れて津輕海峡に到り同海峡を通過して浦鹽に突進せんとするか此の一事のみなり。

日本と大陸の間を通過するか又は津輕海峡を通過するか兩者何れも得失あり前者の場合には我が艦隊は是非とも峽隘なる對馬海峡を通過せざる可らざるが同海峡を敵に認められざる様に通過せん事は固より不可能なり、且つ日本の軍港は多くは皆な此の方面に在り而して若し日本艦隊は何處なりとも對馬附近に於て我が艦隊と交戦を爲さんか我等は自己の根據地を距る約六百哩なるに日本艦隊の對馬附近に於ける位置は其の自己の軍港までは呼べは應ふる程なり、津輕海峡の通過は同海峡までは敵の目を避けて達するを得べきを以て一見する所甚だ有利なるが如し、若し同海峡に於て或は同海峡を通過して間もなく戦闘を爲すも我が諸艦に取りて浦鹽迄の刺す所の航程は三百五十哩に過ぎず、又此の津輕海峡に最も近き軍港は二百五十哩を隔つる舞鶴軍港あるのみにて其の他の軍港は何れも遠方なり、津輕海峡に於ける日本水雷艇の襲撃は狹隘なる朝鮮海峡に於けるよりも其の虞れ尠なし寧ろ津輕海峡に於ては敷設水雷の防止を受くる事なかるべし何んとなれば津輕海峡は水尋甚だ深きに加へて潮流急激なるが故に水雷の敷設は不可能なるを以てなり。

之を要するに問題の結着する所は左の一點に在り、即ち我が艦隊の提督は浦鹽到着前に日本艦隊と邂逅する事を期待するや否やの一點なり日本の海軍は我が艦隊に比すれば甚だ優勢なる事は暫く措きても浦鹽到着前に日本艦隊に邂逅せん事は提督の決して望む可からざる所なりしなり、(クラド大佐は第

三艦隊出帆前に充分此の事を記述したるを以て今更日本艦隊は我が艦隊よりも優勢なる事を論證するの必要を認めず。我等浦鹽に到着するを得ば同地に於て我等の來着を待居る三隻の巡洋艦の勢援を受く可べかりしなり且つそれ提督は我が艦隊の備砲射撃術の果して如何なるやを熟知せる事なれば日本人は我等よりも其の射撃拙劣なる可しとは想像せざりしなる可し、而して我等若し浦鹽に到着せば同地に於て砲彈の供給を得且つ射撃の實習をも爲すを得べしとは提督も想像せる所なる可し従て提督は決して浦鹽到着前に日本艦隊に出會する事を望む可きものに非ざりしなり。

朝九時頃に提督はオレーグに對して信號を掲げ「爾はオルタミヤより收容せる英國人をアウロラに移乗せしめず病院船アリヨルに移す可し是れ彼等を浦鹽まで無事に到着せしむるの必要あるが故なり」と命せられたり。正午我が艦隊は北緯二十度四十分東經百二十二度四分に在り此夜無事なりき。

五月廿一日朝七時リオニヤに於て働きたる乗員を收容する爲に機關の運轉を止めて艦隊は停止せり、九時頃にイズムールドは信號を以て一汽船に停船を命じたるも同船は停止せずして艦隊の後方に航せり、後ちクバンは拿捕船に一切の必要品を供給する事を命せられたり是れ拿捕船は何等かの命を受けて艦隊を離れ去らしむ可きを以てなり、艦隊は正午北緯二十二度二十六分東經百二十五度四分に在り航路は東北三十五度を指せり、二時にゼムチユークは十二哩前方を偵察す可きを命せられオレーグは之を掩護す可きを命せられたり、而して五時に旗艦スワロフは信號を掲げ「明日若し好天氣なれば石炭の積込みを爲す」と告示せり夜に入りて天氣は時化始めたり九時頃に北廻歸線を出でたり。

(八) 艦隊編成の狀況

翌五月廿二日は波濤高く風烈しき爲め石炭積込みは延期せられたり、朝七時に航路の方向を西北廿三度の針路に轉じたり、偵察枝隊の諸艦は楔狀陣形を爲して航進す可く又補助巡洋艦テレークは艦隊を離れ或る任務を帯ひて東北に赴く可しと命せられたり、テレークが艦隊を離れ去るに當りて旗艦スワロフは同艦に對し信號を掲げ「爾の安全なる航海を祈る」との別辭を爲せり。

此の日全艦隊の日の中の艦列を變更したり、即ち運送船は日中は従前の通りに戦艦の梯陣の中間に介在し其の殿後には三隻の装甲艦の代りに巡洋艦モノマフ並にドンスコイを配置せられ又戦艦の序列は左の如くに配列せられたり、即ち楔狀陣形を爲したる巡洋艦を前驅となして二列の戦艦梯隊夫に續き其の右列梯隊の前進部隊は第一戦艦隊としてスワロフ、アレキサンダー三世、ポロチノ、オレーグ是に屬し其れに續て第三戦艦隊ニコライ一世、アブラキシン、セニヤウイン、ウシアークフの諸艦配列せり左列梯隊の前進部隊は第二戦艦隊オスラビヤ、シリイベリキイ、ナワリン、ナヒモフの諸艦及びナレーグ、アウロラ、ドネブル、リオン等の巡洋艦續航せり。這般の艦列は従前の日中航進の艦列に比して何等秀越せる點を有せず若し夫れ突然敵艦隊の襲撃を受くる事あるとも斯の如き艦列より急速に戦闘陣形なる梯隊陣形を作るは既に困難なり、又中間に在る各運送船が戦艦の間より出づるは更に一層困難なり何故に我が提督が斯の如き艦列を選択したるやは全く瞭解するを得ざるなり。艦隊は正午に北緯二十五度九分東經百二十六度十四分に在り此處に余は艦隊を分隊に分つ事に就きて一言

せんと欲す通常艦隊を分隊に分つは各分隊に與ふるを得べき別箇の行動を要する場合なり是等分隊の任務を成功せしむる爲に分隊の各艦出來得るだけ同一艦型のものを選定し同一速力と大砲の射程距離の同一なるものを選ばざる可らず。我が艦隊に於て斯の如くに分隊を分ちたるは全く不明なる原因に基けるものなり故に其の各分隊は何れも大砲も速力も皆一致せざる諸艦より編成せられたり、我が艦隊の秘密なる事情に通せざる者より見たらんに前記の第一戦闘艦隊の一枝隊は全く同型の艦種を以て編成せられたる如く想ふ可し、我が艦隊の秘密を知らざる人は海軍年艦を一見して其の實際を誤らざるものと思ふなる可し、然るに是等四隻の戦闘艦の速力は表の上にては何れも皆十七哩の速力を有する者となり居るも實際十七哩の速力を有するはスワロフ、アレキサンダー三世、アリヨールの三艦のものにてポロチノは艦隊が印度支那の沿岸に着して後既に斯の如き速力を有するを得ざるに至れり、斯の如き艦種には戦闘艦オスラビヤを以てポロチノに代へざる可らずオスラビヤは假令是等の諸艦とは装甲及び舷の角度を異にすと雖も備砲の射程は殆ど同一にて速力も亦是等諸艦と伯仲の間に在り。又第二戦闘艦隊の編成如何と云に十八哩の速力を有し且つ遠距離射程の大砲を備ふるオスラビヤの如き戦闘艦が僅に十三哩の速力を有するのみなるシリイヘリキイ並にナワリンや舊式戦闘艦ナヒモフの如き何れもナワリン同様に其備砲も僅に四十五ケープルの射程より遠距離を射撃するを得ざる大砲を有する諸艦と一隊に編成せられたり、次に第三戦闘艦隊に編成せられたる諸艦を見るにニコライの武装は全く其僚艦たる海防艦と一致せず只だ多少一致せる點は其の速力のみなり寧ろ之をナヒモフ及びナワリンの一隊に編成す可きに非ずや。

余は艦隊の分隊について一言したるが斯の如き組織は凡て整然たる組織の艦隊に應用せらる可きものなり、然るに我が艦隊の如き性質の艦隊に之を應用せん事は無用の沙汰にて概して對馬海戦に於ける如くに戦闘に何等の輜略をも講せざる艦隊の如きは之を分隊に分つの必要を有せざるなり。

日中は通常の演習を爲せり、テレクを除くの外他の補助巡洋艦並に拿捕船オルタミヤは艦隊より分離せり夜に入りて風は穩かになれり此の夜、月は十時頃に上る筈なるも曇りて暗夜なりき漸く冷氣加はれり十時に旗艦スワロフは前程に於て探海燈の閃光を認めたりとの信號を爲せり左れど我等は大に注意して視たるも何も認めざりきスワロフの誤りなるか或は我等匆々として之を認めざりしにや何れかなる可し夜は何等航海の安全を妨ぐる出來事もなかりき。

翌五月廿三日には風無く天候穩かなりしかば朝五時に提督は艦隊の航進を止めて石炭の積込みを命じたり、此の石炭積込みは是れ何等の目的何等の意義を有するものなるかとは是れ我等各人の腦裡に起りたる問題なりき、何んとなれば諸艦には装甲海防艦に至るまで假令津輕海峽を迂迴して航するとも浦鹽までは充分なる石炭を有し居るに今突然に石炭積込みの命令ありしが故なり、若し提督は間もなく敵艦隊との交戦を免れずと推斷せる者とせんか然り我等は既に日本に近き海上を航し居る者なれば或は衝突を免れざらん若し果して然りとせば石炭の積込み寧ろ危険なりと云はざる可らず、如何となれば各艦の積載限度の二倍以上も石炭を積込む如きは（アリヨールの積載限度の噸數は一千百噸なるに二千二百噸を積めり）装甲艦の甲帯を水中に沈下せしむるを以て装甲艦を變じて非装甲艦たらしむるの結果を免れず加ふるに四隻の戦闘艦の如きは左なきだに艦體の動搖甚だしきは是等諸艦の弱點なる

に規則外に斯の如き積載を爲すが如きは其の弱點をして益々甚だしからしむるものなればなり、此の石炭積込みに就きて唯一の想像し得べき説明は提督は或は艦隊をして津輕海峽を通過せしめんと決定したるに非ずやとの想像なりき。

(九) 頻々信號の變更

五月廿三日正午スワロフの命令に依りて各運送船に搭乘し居りし武官等を運送船より軍艦に移乗せしめたり、艦隊は北緯二十七度十五分東經百二十五度二十一分に在り、ロゼストウエンスキイ提督より「時々刻々交戦を期待す可し」との命令を受けたり、各驅逐艦は命令に依り正面陣形を爲して夜間は艦隊の前方を航進し其の出會する所の諸船舶を驅逐し又浮流水雷を射撃爆發せしめざる可からず又艦隊に危険の迫れる事を認めし場合には探海燈を四十五度の上方に上げて其の危険を艦隊に報せざる可らざりき。

四時に石炭の積込みを中止せり且つ我等は皆な艦隊の向ふ方向は東なる可しと期したるに艦隊は東に向はずして西に向て航進せり、旗艦に於て斯くも頻々と信號を揚ぐるの多きに依りて是れロゼストウエンスキイ提督の神經的狀態如何を想像せしめたり、即ち提督は三時半より五時まで一時間半の間に「大速力」の信號を除きて種々の信號を五十回も揚げたり、

五月廿四日提督は朝より又も我艦隊の航進配列を變更してニコライを左列梯隊の先頭に置き其に裝甲海防艦並に巡洋艦を續航せしめたり、左列梯隊は従前の通りにてスワロフ、アレキサンダー、ポロチ

ノ、アリヨールより成りオスラヤビヤ、シリイ、ナワリン及びナヒモフ其の後に續航せり各運送船は従前の如くに二列梯隊の中間に入りて航進を續けたり、全くの所をいへば艦隊の配列に何等根本的の變更を行はれたるに非ず此の艦列の變更は五月廿三日フェルゲルザム提督薨去の爲に斯くせられざるを得ずロゼストウエンスキイ提督はフェルゲルザム提督の喪を艦隊に秘したり同提督の死を識れるは唯だ旗艦とオスラヤビヤのみなりき、其の他の艦隊員は司令官の順序にてフェルゲルザム提督の次位に在るネボガトフ提督までも此の事を識らず同提督死去の事を始めて識りたるは戦争後日本に俘虜となりたる後なりき、オスラビヤの橋頭には此の戦闘艦の滅亡する其時まで依然としてフェルゲルザムの提督旗を掲げたり、正午艦隊は北緯二十九度三十七分東經百二十七度七分に在り針路は西北二十三度なり。

午後二時旗艦スワロフは左の如き信號命令を掲げたり「リオン並にドネブルに告ぐ明日黎明を以て運送船は艦隊を離る可きを以て爾は東經百二十二度二十分までは等運送船を護送す可し其の後爾は艦列に入らず運送船と共に航進し敵の巡洋艦を避け之を安然ならしむる事を務む可し」と夜は無事なりき、地平線上に若干のジャンク及び一隻の汽船を認めたり、我等は幸に今までは何人にも認められず航進し來りしと(勿論根據あるに非ず)想ふを得るとするも今は我艦隊の所在は必ず識れ且れるなる可し我等は既に日々數十隻の汽船の往復通行する大航路に甚だ接近せり今我等は實に銳意警戒せざる可らざる時となれり、此の時より睡眠や休息の事を慮り得る者甚だ稀れになれり。

五月廿五日曇天にて南風烈しかりき航路は西北八十度を指せり朝八時北緯三十一度十一分東經百二十

三度に於て運送船は下子フル及びリオニに護送せられて艦隊を離れ其の命令せられたる方向に赴く可きを命せられたり、旗艦スワロフは運送船の別に臨みて信號を掲げ「提督は運送船に對して其の任務に特に満足の意を表す」と告げたり、斯くて運送船は朝八時に艦隊に別れて上海を指して赴きたり。

(十) 戦闘力の分散

旗艦スワロフより運送船を艦隊より分離せしむ可しとの信號ありし時は各人何れも大に安心せり、何となれば今より何時敵艦隊に邂逅するも既に運送船の保護を爲すの必要もなく又之が爲に艦隊の運動を妨げらるゝ事もあらざる可きを以てなり。然るに運送船が艦隊より分離せられて其目的地に送遣せらるゝやロゼストウエンスキイ提督は同日午前九時を以て艦隊の航路を東北七十度即朝鮮海峽の方向に轉じたり、艦隊より分離せられたる運送船は唯其の一部にて他の運送船即ちアナドイリ、イルトイシ、カムチャツカ、コレヤ其他二隻の艁船用汽船ルース並にスウイリの如き何れも艦隊に遣されたるを見て艦隊乗員は何れも之を意外とし大に驚きたり、是れ果して何事を意味せる者ぞ艦隊は斯の如き事情なりしかば艦隊乗員は恰も其の手腕に鐵鎖を縛りて拳闘に遣されし者の如き感を爲せり。或は是れロゼストウエンスキイ提督が戦闘の際に運送船を以て戦争の犠牲に供せんと決心せるものに非ざるか是れ勿論甚だ残酷なり、然し提督自ら爲したる結果に比すれば寧ろ此の方は宜しかりしなり、戦争の際に提督は運送船を防禦するが爲に總ての巡洋艦を艦隊より分離せしめたり、是れに依りて左なきだに劣弱なる我が艦隊をして其の巡洋艦を分離せしめたるが爲に六吋砲を三十二門に百二十ミリメー

トル砲を二十九門に減せしめ海戦戦術の第一義たる戦闘力集中の原理を無視するの行動に出てたるなり我が凡ての巡洋艦は對馬海戦の際に艦隊戦に参加せずして運送船保護の任に當れり而かも彼等巡洋艦は充分運送船を保護するを得ざるは勿論なりき。余は勿論我が艦隊の敗衄を招きたるは唯だ此の戦闘力分散一事にのみ原因する者と断定せんとするに非ず、左れど此の戦闘力の分散は日本人をして確かに我が艦隊撃破の目的を達するに充分容易ならしめたるに相違なし且つそれイルトイシの如きは九連半以上の速力を出すを得ざりしを以て交戦の際の我が全艦隊の速力も亦斯の如くならざるを得ざりしなり。

余は先きに艦長會議も開催せられず又提督が取らんとする企圖籌策を何人にも知らせられざりし事を一言せり、海戦戦術の原理の上よりするも或は艦長會議を開くか或は提督の畫策を各艦長に公示す可きに非ずや、左れど斯の如きは是れロゼストウエンスキイ提督の同意するを得ざる相談にて提督は何等かの意外なる新奇の運動を以て獨り日本人ならず我等をも喫驚せしめんとしたるに非ざるか、海戦前に或は艦長會議を開くか或は提督の籌略を一般に知得せしめざる可らざる戦術上の原理は二二が四の原理にて何人も拒否するを得ざる所なるに噫。

(十一) 實戦前日の演習

我が艦隊は艦長會議の有無などに關係なく兎に角に向ほ前進せり、今偵察枝隊を編成し居るはスウエトラーナ、ウラル、アルマーズの三艦なり其他の運送船は同様の梯隊をなして中間に入りて航進せり

艦隊は五湮の速力にて航し時としては速力を加へて八湮と爲したるも信號に依りて再び速力を減じたり。

天氣は曇天にて南風吹き海上の風力は五點乃至六點なり全艦乗員の神經は非常に興奮せり、三時にスワロフは信號を揚げ「明日黎明より十二湮の速力を出すの準備を爲せ」との命令をなせり、夜は梯隊を爲し居る戦闘艦隊に左列梯隊は青燈右列梯隊は赤燈を殘存して外部の見別燈を覆ふ可きを命せられたり、同夜安眠せる者甚だ稀なり是れ今日までになき日本水雷艇の襲撃ある可き憂ひありしを以てなり、彼等日本艦隊は我が艦隊が如何なる状況を以て何處を航し居るかを識り居るや疑ひなく若し彼等に其の來襲を妨げしものありとせば終日吹き荒みたる生温き南風に因りて起れる海波の大うねり是れなり、夜は約五湮の小速力にて航進せり是れロゼストウエンスキイ提督は何等かの特別なる原因に依りて特更に艦隊をして徐航せしむるものと察せられたり、是れ果して如何なる原因ぞや此の艦隊徐航の原因を判断すへき唯一の推想は此の際提督は浦鹽に在る巡洋艦驅逐艦等に電報を以て何等かの命令を與へ確たる一定時に彼等をして我が艦隊に來援協力せしむるの戰略を講じ居るに非ずやと察せらるゝ一事是れなり、然し後に聞けば何等斯の如き籌略は更に講せられざりしとの事なり左れど我等には不幸にして察知の明なく提督が艦隊を徐航せしめたるは困難なる廿六日を恐れて戦争を神聖なる戴冠式の當日まで延したる者とは想像するを得ざりき。後日判明したる所に依れば若し我が艦隊は廿五日より廿六日の間に日本人が數多の小巡洋艦を以て看視哨を配備せる朝鮮海峡に入れば、我が艦隊は何等の妨礙に遇はずに狹隘なる對馬海峡を通過するを得べかりしなり、如何となれば天候非常の時

化なりしかば偵察の爲に配備せられたる敵の諸船は何れも此の一晝夜の間その哨點を離れて大概馬山浦と察せられし其の根據地に入入せるを以てなり。

唯だ夜明けて翌廿六日に至りて八時十五分に戦闘艦並に偵察枝隊に對して折角待ち設けたる命令は與へられて速力を九湮にする事を命せられたり、然るに此の命令は急駛前進するが爲めの命令に非ずして運送船は船隊を離れて五湮の速力にて航進す可く艦隊は艦隊運動の演習を爲すが爲の命令なりき、是れ第二第三艦隊がクアベ灣に於て合したる以來聯合艦隊にて演じたる始めての而も唯一の演習にて其れも戦争一日前の演習なりき、而して此の演習は各艦長の實驗を得せしむる目的の演習に非ずして只だ是れ敵艦隊との必然の邂逅を明五月廿七日まで延期せしめんが爲の目的に外ならざりき。

(十二) 大海戦前の一夜

五月廿六日正午に艦隊運動の演習を終りて運送船に合したり、艦隊は北緯三十二度廿七分東經百二十六度三十分に在り、十二時十五分戦闘艦ニコライ一世は始めて近くに在りし敵艦を發見して直に信號を揚げ敵は無線電信を以て信號を爲せりとの報告を爲したり。又一時五分に旗艦スワロフは信號を揚げ「敵の偵察艦は我艦隊の煤煙を認めて幾度か互に電信を交換せり」と報せり、次で三十分を経て又旗艦は「今夜數々水雷攻撃のある事を豫期するを要す」との信號を揚げたり。海は益々穩かになれり明日は遂に一舉にして戦争の運命を決す可き敵艦隊との衝突を免れざる事愈々明かになれり、全艦隊の乗員の爲に——全く成功を信せざる者の爲にも此敵艦隊との邂逅は望む所にて皆な其の待遠なるに退屈

し甚だしく神經を興奮して何れも一種の苦痛なる此の期待を果さざる可らざるを思へり、全員何れも精神激發して明日は愈々萬事を決す可しとの満足の心情その顔貌に現はれたり、二時三十分に再び艦隊運動の演習を始め四時半に終りたり。

四時三十分に旗艦スワロフは戦闘準備の信號を爲し又「明日戦闘の場合には戦闘旗を揚ぐると同時に艦飾を行ふ可し」及び「戦闘の際には電信機に熟練なる電信技師を置く可し」等の信號を揚げたり。五時に旗艦スワロフは「電信の符牒に依りて我が艦隊の近傍に七隻の敵艦が互に電信を交換し居る事を明かに知りたり」との信號を爲せり、我が艦隊各船艦の受信機は實に最も明に電信を受せり夕飯前全艦隊は明日全速力を出すの蒸汽を蓄ふ可きを命せられたり。

今夜猛烈なる水雷攻撃を受く可く、明朝は戦闘ある可しとの豫期に因りて諸員何れも奮激せるは勿論各自其部署に注意して其の不備の點なきやを調べたり尙ほ不備の點を修補するに多少の猶豫あるが故ならず、砲彈や木片飛散防禦の爲に通路にあらゆる物を配置せり石炭を入れたる袋麻繩又は鐵の鏈鎖水雷の防禦網等あらゆる物品を利用せり、ロゼストウエンスキイ提督は木製器具類を投棄する事を禁じノツシペー出帆の際にも亦新嘉坡に到りし時も二度も此の事を懸念して禁じたるにも關せず或る艦長等は自ら責任を負ふ可しとて出來得るだけの木製器具類を悉く其の舷側より海中に投棄せり。同夜は(二十六日の夜)士官の多數と水兵とは水雷攻撃のあらん事を豫期して通宵眠らざりき、外部の燈火は又も覆はれたり然し夜間の水雷攻撃に最も危険なりとさへも思はるゝ其の提督の方に向ひたる燈火は依然點火し置く事を命せられたり。

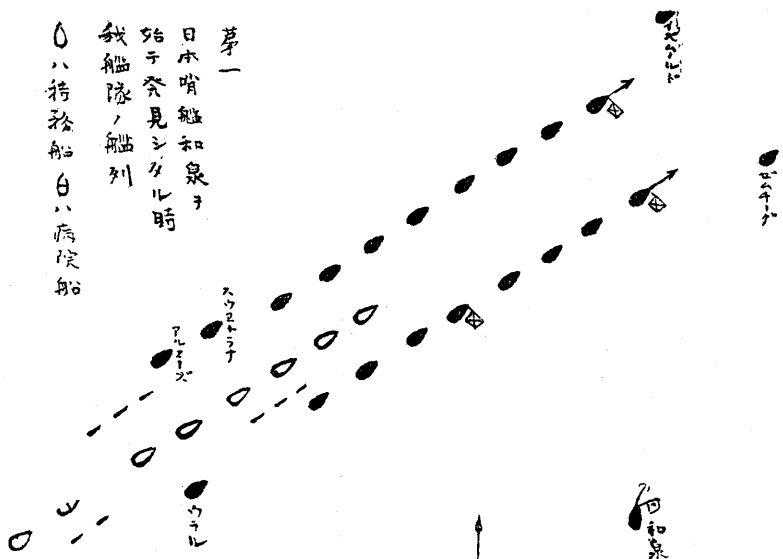
同夜は甚だ陰濕にて肌寒く暗澹として十二時頃に月出でしも遂に明るくならざりき是れ空氣の中に濛霧ありしが故なり、多くの者の爲に最後の一夜たる可き此夜は始終水雷の攻撃ある可きを待ちて皆な假睡もせず不安なる時刻の経過は實に無限に長き様に感せられたり而も終に敵の水雷攻撃なく夜は既に白み始めたり、我等は互に日本人が我等に襲撃を加ふるの機會に乗せざりしを相祝せり然し是れ彼等日本人は戦闘後に我等を殲滅せんとして總ての水雷艇を護り置きしものなりき。

(十三) 敵艦和泉現はる

五月廿七日なる凶日は遂に來れり、其日の朝五時頃に艦隊の前程右方に當りて一商船を認めたり同船は我等を認むるや否や早く逃避し間も無く其の形跡を失へり、是れ甚だ疑はしき汽船なりき我が艦隊にては之を追跡する爲に差遣せられし者なかりき(東郷の報告に據れば此の疑はしき汽船は信濃丸なり)。

此の日は碧空一點の雲なく快晴なりしも空氣中に濛霧ありて日光の力も此の濛霧を消散せざりき、此の濛霧は容易に晴れざりしかば七十ヶーブル以上の遠方は更に望見するを得ざりき、風力約四點の西南の風あり波浪のうねりは三點乃至四點なりき、朝七時艦隊は茲に掲げたる圖の如き艦列を以て航進せり、先是六時に巡洋艦ナヒモフは「右舷の垂直線(眞横)に當りて敵艦を認む」との信號を爲せり是れ實に日本の巡洋艦和泉なりき、無線電信の受信機には始終絶えず敵の電信符號を感受せり、余は日本に俘虜になりたる後に此時の事に就きて實に瞭解に苦しむ奇怪至極なる事情ありし事を知りた

り即ち其の事情を一言すれば左の如し、前夜に我が艦隊の無線電信受信機に甚だ明確に電信符號を感じて日本の偵察艦は全く我等に接近して追跡し居る事甚だ明かなりしかば七百哩も遠方に電信符號を發信し得る世界稀有の最優等電信機を備へ居る我が巡洋艦ウラルは遂に堪へ得ずして海上信號器を以て提督に日本の無線電信を妨害するの許可を請へり、若し夫れ我が艦隊に於て豫め受信機を斷絶し置きて然る後にウラルより發信を始めなば是れに依りて兎に角に假令敵方の電信機を燒毀せしむる迄の事なくも（然し敢て爲し難きに非ざりき）必ず敵の受信機の調和を亂し之を破損せしめて敵をして暫時通信談話を爲すを得ざらしめたるに相違なし、然るにロゼストウエンスキイ提督はウラルの信號に對して同じく海上信號器を以て最も奇怪に堪へざる信號



を爲し「日本の電信を妨害する勿れ」と答たり、是れ實に甚だ奇怪至極なる答へなるを以て余は此の談話に信を置かず是れ單に誣言に過ぎざる可しと思ひ居りしが後に提督の幕僚將校より此事の事實なりしを聞きて更に一驚を喫したり。

日本の提督東郷の報告にある左の一節を讀みて我等は實に慚愧に堪へざるものありき、其の報告に曰く「我が艦隊は敵艦隊より尙ほ數十哩の距離に在りしと雖も我が巡洋艦の報告に依りて我等は敵艦隊の位置運動等を恰も目前に在るが如くに識り得たり」云々。

（十四） 日本艦隊の現出

午前八時頃に旗艦スワロフは所謂偵察枝隊と稱せらるゝ一枝隊に命令を與へて艦隊の背面に出づ可きを命じたり、此の命令に依りて巡洋艦スウェトラーナは運送船と同一航路に出で、續航せりウラルは其の右方にアルマーズは其の左方に位置を取れり。此時敵の巡洋艦和泉は既に我艦隊と並行するに至り艦隊の右方垂直線（右の眞横）に五十五ケープル乃至六十ケープルの間隔を持して航進せり、旗艦スワロフは右列第一並に第二戦闘艦隊に信號して「和泉に對し右舷並に艦尾砲塔の備砲を指向可し」と命せり然し和泉を驅逐する事に就きては何等の處理をも爲さざりき、此時オレーグ及びアウロラを遣はしたらんには此の二艦は和泉よりも甚だ大なる速力を有するを以て當に之を驅逐するを得可かりしのみならず最も迅速に和泉に非常の大損害を與へ或は全く之を撃沈し得たるやも知る可からず、且つ我がオレーグ並にアウロラは敵の主力艦隊の現出する場合には其の快速力を以て本艦隊に歸還する

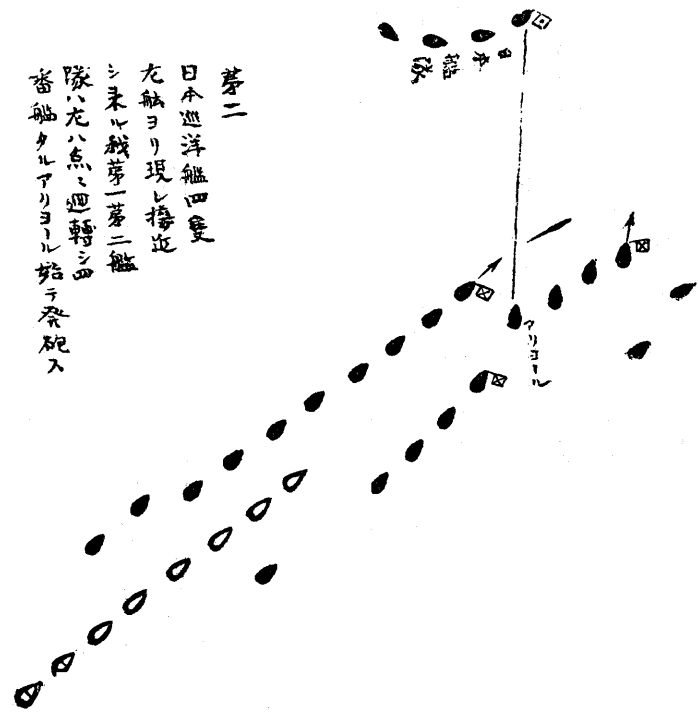
を得べかりしなり。

八時半頃の我艦列は第三圖の如くなりき、右列梯隊第一戰團艦隊並に第二戰團艦隊にして左列梯隊は第三戰團艦隊並に巡洋艦隊之に續げり其中間オスラヤビヤの真横にアナドイリを先頭として運送船を配列しスウエトラーナ、ウラル、アルマスーズの三艦其れに續航しモノマフは此の三艦の最右翼を航進せり。九時四十分には右舷西北の方向に當りて濃霧の中より敵の舊式巡洋艦松嶋、嚴嶋、橋立の三艦並に清國よりの戦利艦なる舊式戦艦鎮遠等現出し六十五ケーブル乃至七十ケーブルを隔て、我が艦隊と並行せる航路を航進せり此時、旗艦スワロフは陣形變更の目的を以て左の如き信號を爲せり即ち「第一第二戰團艦(右列)は十一ノットの速力を持す可し左列梯隊並に各運送船は九ノットを持す可し」と十時に敵の巡

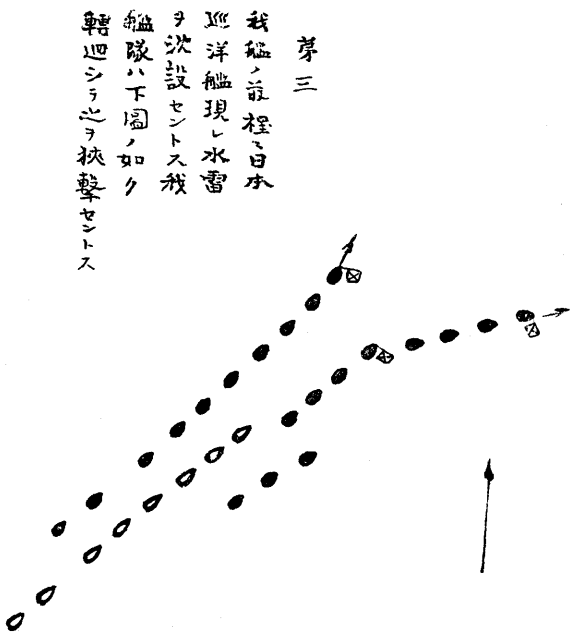
洋艦は順次に左舷に轉回して漸く其の艦影を認むるを得る程遠離して又も我が艦隊と並行の航路を航進せり、十時五十分に提督の信號あり曰く「旗艦スワロフは敵艦和泉に對して十二吋砲の發射を爲さんとす」と是れ想ふに和泉の勇敢なるや右舷の方に約五十ケーブルを隔て、始終悠々航進を續け居る狀が遂に提督の痼癢に障れるものなる可し、然し斯の如き砲撃は甚だ機を得たる者に非ざりき何んとなれ注意は忽ち他の方向に向けられたればなり、此の時左舷の後方より新に敵の一枝隊現はれ我が艦隊に接近する航路を取りて艦隊に追尾して急進し來れり此の敵艦隊の一枝隊が近く進航し來れる時我等は其の編成如何を見分くるを得たり即ち此の一枝隊は敵の快速力を有する二等巡洋艦笠置、千歳、新高、對馬の諸艦なりき、十一時十分には右列梯隊の諸艦は提督の信號に依りて皆な俄に左舷二點の轉回を爲せり是れ斯くの如にして全艦隊は單縦梯隊形を作らんが爲めなりき。

(十五) 巡洋艦の出沒

斯くて敵の巡洋艦笠置、千歳、新高、對馬の諸艦は左方より益々接近し來りて遂に其の我が艦隊に最も接近せるものは三十五ケーブル乃至三十八ケーブルの距離に至れり、是等敵艦は其の武装最粗惡にして殆んど何等の防禦をも有せず而かも彼等の限りなき冒險勇敢に至りては只だ驚くの外なし、我等は皆な「砲火開始」の信號今や與へらると待設たり左れど全く其の命令なかりき、我が砲員が日本の巡洋艦隊に對して左舷の砲口を指向けて命令遅しと燥急るを士官等は心ならずも之を制止せり、我が各艦の掌砲長は此の近距離にして至便なる目標(日本の巡洋艦)に對して其の砲を發射せんと意氣込み何



れも胸躍りて髪膚自から慄然たりき、若しそれ此の時、旗艦スワロフ「砲火開始」の信號を上げ且之を降すと共に一斉射撃を命じ續いて全艦隊各艦の左舷備砲の砲火續發せんか敵艦隊四隻の巡洋艦は須臾にして滅亡するを免れざりしなる可し、我が第一回の一斉射撃にて七十五ミリメートルより十二吋砲に至るまで各種の口径砲より約百五十發の砲彈を兩注するを得ば若し命中彈を其の五パーセント乃至六パーセントとするも確かに數十發の命中彈ありしに相違なし、且つそれ速射砲の如きは敵巡洋艦に通逃の違あらしめず各二三發を連射するを得可かりしなり、敵の巡洋艦は此の第一回の我が猛射に依りて非常の損害を被むり終に快速力を以て遁逃するを得ざるに至る可は甚だ明かなるを以て其の時我が艦隊は僅か五分乃至十分間にして是に最後の引導を



渡すを得べかりしなり、若し又是に依りて何等特別の効果をを得る能はざるにせよ兎に角に日本は是が爲に若干の快速偵察艦を失ふ可く、我が艦隊は又此の第一着の成功に依りて大に艦隊の士氣を振はしむるを得べかりしなり。然るに實際の事情は實に左の如くなりき即ち、我等は砲員の爆急るを制止しながら十一時二十分まで旗艦の信號を待居りたり此の時、戦艦アリオールは笠置に對して不意に六吋砲を發射せり此の第一發の砲聲を耳にするや砲員の意氣は最早制止するを得ず第二戦艦隊並に其れに續航せる各艦は敵艦に對して亂射を始めたり發砲は約三十發にして、其の中若干の命中彈あるを認めたり砲火の開かるゝや否や旗艦スワロフは直に信號を以て「砲彈を徒費する勿れ」と命じ發砲は忽ち停止せられたり。

敵の巡洋艦は我が第一回の發砲にて各艦忽ち左舷轉回を爲し且つ若干の應射を爲しながら倏忽六十ヶ一ブルの間隔に離れ去りて又も我が艦隊と並行の航路を取れり巡洋艦松嶋、嚴嶋、橋立戦艦鎮遠より編成せられたる敵の他の一枝隊は十一時三十分順次左舷轉回を爲せしが是等の諸艦は遂に其の艦影を失へり、又右方の真横を航進せる日本の巡洋艦和泉は砲撃停止前に益々右方に赴き遂に濃霧の間に其の艦影を沒したり。

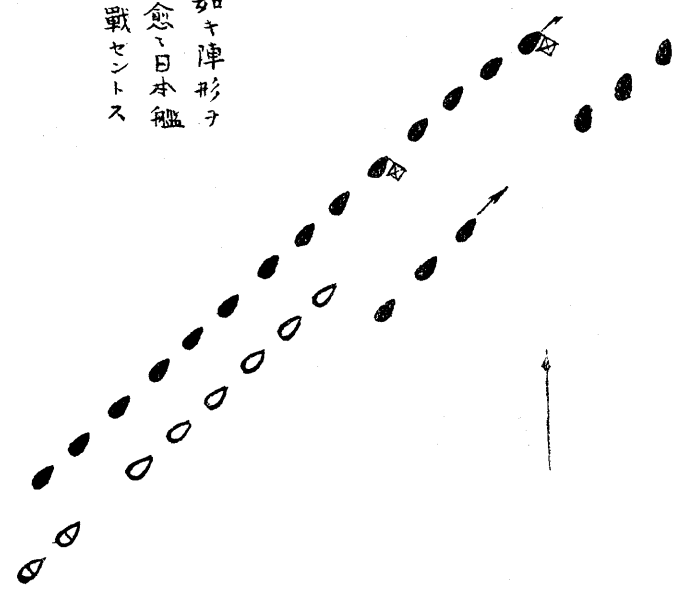
(十六) 出羽艦隊の出現

十一時三十分旗艦スワロフの信號に曰く「速力八漕を持す可し」と又一信號あり曰く「各員交代にて食事爲すの時間あり」と此日食慾を有して安然として食事したる者甚だ尠なく皆な何れも日本艦隊の

主力今や現はるゝかと其れのみを待ちたり。
十一時五十五分頃に左舷の眞横に當りて日本
の二等巡洋艦千代田、浪速の兩艦は數隻の驅
逐艦を率ゐて現はれ七十ケープルの間隔を持
して我が艦隊と並行せる航路を取りて進航せ
り。

正午我が提督の命令に依りて艦隊は東北二十
三度の方向を取りて航進せり、間もなく十分
間を経て日本艦隊の出羽枝隊（是れ我等の砲
撃を加へたる枝隊）現はれ全速力を以て我が
航路の前程五十ケープルの我が航路を横切り
て通過せり、我が艦隊は速力を増して九哩と
爲せり對馬嶋は我が艦隊の所在地點を距るこ
と遠からざるも濃霧の爲に望見するを得ざり
き。十二時二十五分に旗艦スワロフは「第一並
に第二戦闘艦隊は十一哩の速力を持す可しと
の信號を爲せり、後ち第二戦闘艦隊は速力を

身四
下圖ノ如キ陣形ヲ
造リテ愈々日本艦
隊ト決戦セントス



弛むる事を命せられ第一戦闘艦隊は順次に右舷八點の轉回を爲す可きを命せられたり。此の信號命令
を實行するに當りて一の混雜（こんざつ）を演出せり、ボロチノは信號を誤り解したるにや急激（きうげき）に轉回を始めた
然し間もなく其の誤りを覺りて自己の占む可き位置に就きたり、第一戦闘艦隊（即ち右列梯隊の先鋒）
は左列梯隊（即ち第三戦闘艦隊並に巡洋艦隊）より約十五ケープルを隔つる點に到りて順次に左舷一杯
に轉回せり斯の如くにして自ら右列梯隊を作りたり。又同時刻に一隻の帆を上げたるジャンク南方に
航進して我が左列梯隊の前程を横切りたり、左列梯隊の先頭に在るオスラビヤ並に其れに續航せる諸
艦はジャンクが艦隊の前程を横断したる地點を順次に迂迴（うゑい）せり、是れ該ジャンクが或は其の附近に浮
流水雷を投じたるやの憂なき能はざるを以て其の危險（きげん）を避けしなり。

十二時三十五分に出羽提督の率ゐる日本巡洋艦隊の一隊は右方より我が艦隊の前程を通過して正面陣
形を作り右方よりの方面に依りて航進（かうしん）を續けたり。我が無線電信の示す所に依れば日本の諸艦は斷え
ず互に暗號電信を交換せり、且つ其主力艦隊は既に我等に接近し來れるが如し是れ出羽の巡洋艦が必
ず其の主力艦隊に通信せるに相違なく我が艦隊最近の失敗行動（ボロチノの混雜）に乗せんとて躍進（やくしん）し
來れるものと察せられたり。

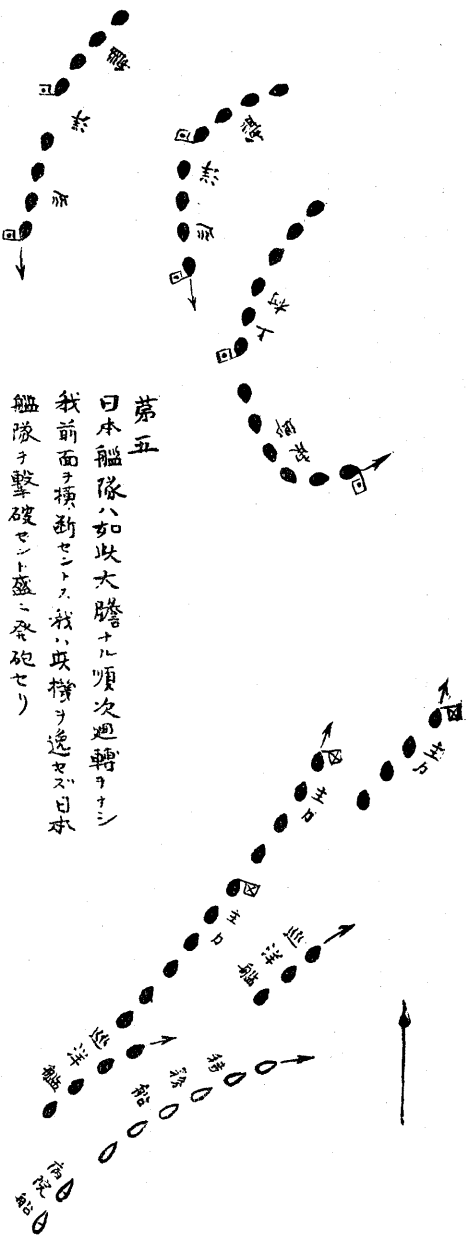
一時十五分にシロイウエリキイより信號あり曰く「東方に當りて六隻の船舶を認む」と一時二十分に旗
艦スワロフの信號に「速力九哩を持す可し」と此の時我が艦隊の前程を通過せる出羽提督の快走巡洋艦
隊は諸艦一齊に右舷轉回を爲せり、我が第一戦闘艦隊は戦闘艦オスラビヤの率ゆる左列梯隊の右方十
五ケープルの地點に在り右列梯隊の殿艦アリヨールは其の眞横に在りたり、ゼムチユーク、イズムル

一ド並に驅逐艦の一枝隊は梯隊を爲してアリヨールの右列梯隊に續航せり。

（十七） 大海戰の開始

一時二十五分 艦首右舷の彼方に當りて蜿蜒たる長蛇の如き日本の主力艦隊は突如として濛霧の間より現出せり、此の敵主力艦隊は梯隊を爲して約十六哩の速力を以て我が艦隊の航路の前程を横斷して航進し來れり、一時三十分旗艦スワロフより信號あり曰く「第一戰團艦隊は十一哩の速力を持す可しと又續て信號あり「第二戰團艦隊は第一戰團艦隊の梯隊に入る可し」と是れと共に第一戰團艦隊は左列の梯隊線に近づくが爲めに順次に左舷四點の轉回を始めたたり、オスラビヤ並に其れに續く左舷梯隊の戰團艦は速力を弛め順次に右舷の方に寄りて航進せり、是れ斯の如くにして右列の第一戰團艦隊と一列梯隊の戰團陣形を作らんが爲めなり。第二戰團艦隊の先頭に在りしオスラビヤは猶第一戰團艦隊の殿艦たるアリヨールの眞横に在りし時（即ち未だ戰團陣形を作るの遑なく）旗艦スワロフは敵艦隊の先頭となりて航進せる戰團艦三笠に對し始めて砲火を開きたり時に一時五十分なりき、暫時にして日本艦隊は我に對して應射を爲す是に於て兩艦隊の全線に亘れる猛烈なる戰團は開始せられたり、巡洋艦隊と共に在りし各運送船並に第二驅逐艦隊其他病院船等は敵主力艦隊の出現せる時右方に避けしめたり。

日本艦隊の艦列は左の如くなりき戰團艦三笠、敷島、富士、朝日、装甲巡洋艦春日、日進等を先鋒と爲し少しく離れて装甲巡洋艦出雲、磐手、淺間、常磐、八雲、吾妻の諸艦相續き我が前程を横切りて



五十五ケーブル乃至六十ケーブルの間隔を持し我が艦隊と反對航路を取りて猛進し來れり、而して敵の先頭艦三笠が我が旗艦スワロフの垂直線に至りし時既にスワロフは砲火を開きしが三笠並に其れに續航せる日本の全艦隊は順次に左舷轉回を爲し我が艦隊に接近する東北の航路を取りて航進しスワロフ並にオスラビヤに向て特に其砲火を集中せり。日本艦隊が我が全艦隊の砲火の下に此の最後の轉回を爲して順次其の反對航路に向て逆航せるは最も上出來の運動なりと言はざるを得ず、日本艦隊が斯の如き運動を爲したるは是れ疑ひもなく我が艦隊の先鋒に對して便宜の位置を制せんが爲めなりき左れど日本艦隊は此の轉回を爲すの際に一直線となりしかば全艦隊が全く轉回せざる間は發砲するを得

ざりしを以て此の回轉は日本艦隊の爲に最も不利なる運動なりしなり、然し此の不便にも關せず日本艦隊は其の速力の大に超越せるものあるを以て（我が速力の約二倍）左方遙に我が射程外に回轉して此の運動を爲し既に我が艦隊と並行の航路を取りて我が艦隊の先鋒諸艦に對し再び有利の位置を占むるを得たり、二時五十分旗艦スワロフは右舷二點の回轉を爲せりオレーグ並にアウロラの二艦は艦隊に續航し居りしがドンスコイより「敵の巡洋艦我が運送船に接近せん」との信號ありしかば主力艦隊を離れて運送船の方に急駛せり、日本艦隊は其の快速力を利して我が艦隊の少しく前方に當りて左舷の方向より我れに對せり、故に旗艦スワロフは日本艦隊戦線の四番艦と眞横に相對せり、又日本巡洋艦の殿艦はニコライ一世と殊んど相對せり、日本艦隊は斯の如き位置に在りしを以て我が艦隊の先鋒諸艦に對して其の全力を集中するを得しかば彼等の爲めに現然たる有利の地位を占められたり、只だ日本艦隊は其の一部の備砲を以て我が殘餘の諸艦を砲撃せるがのみにて其の最も猛烈を極むる兇惡なる砲火は我が提督の坐乗せるものと察せられたるスワロフ並にオスビヤの二艦に集中せられたり旗艦スワロフに最も接近せる日本軍艦の間隔は約三十ヶケールなりき。

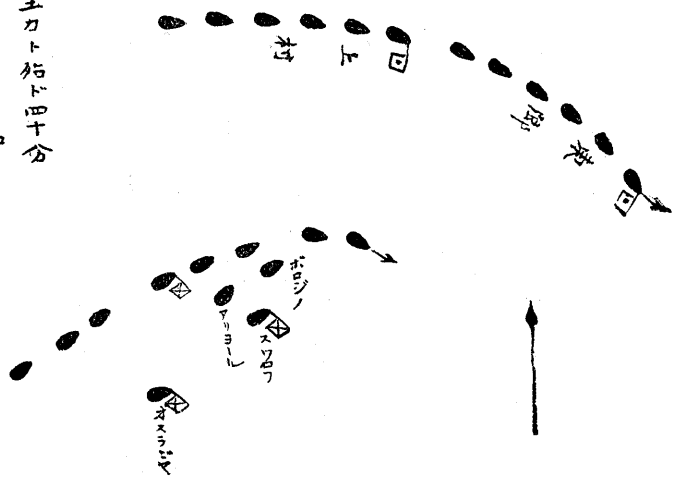
（十八） 旗艦の苦戦オスラビヤの最期

二時十分 旗艦スワロフは左舷二點の回轉を爲して以前の東北二十三度の針路を取りたり、敵艦との間隔は益々接近し且つ旗艦スワロフは既に畏怖す可き損害を受け同船並にオスラビヤの艦上に大火災のあるを認めたり、特にオスラビヤは既に艦首の砲塔を破壊せられ中樑を折られ艦首を甚だしく破壊せられし爲め艦首を水中に沈下して左舷に傾斜せり、二時廿分に旗艦スワロフは遂に其の地獄的の悪火に堪へざるものゝ如く右舷四點の回轉を爲せり然るに此の時恰かも敵の砲弾は旗艦に命中して舵機の汽管を切斷せり而して同艦は右舷に傾きながら徐航して戦線外に出でたり。この時オスラビヤは艦首の砲塔を爆破せられ艦首は散々に崩壊せられ煙突は篩の如く射貫かれ且つ火災起りて全艦黒煙に包まれながら左舷に約十五度の傾斜を爲して列外に出でたり、オスラビヤは其の艦首を既に錨索の孔まで沈下したるも尙ほ戦鬪を續け發砲を爲しなから艦の傾斜を直さんと努めたるも遂に傾斜は益々甚だしくなれり、アレキサンダー三世は今旗艦スワロフに代りて艦隊の先頭と爲り右舷四點の回轉を爲して艦隊を指導せり、日本艦隊はアレキスター三世に對して重に其の全線の砲火を集中せり日本艦隊は最初に約二十八ヶケールの間隔を以て我が航路の前程を横切りしが後に我が艦隊の順次にアレキスター三世に従ひて回轉を爲すや又も我が左舷の方より我が航路と並行せる航路を取りたり、二時二十五分頃ポロチノも亦列外に出で我が艦隊の先鋒各艦の位置は益々不利に陥りたり、ポロチノ、オスラビヤ並にアリヨールの三艦が同時に艦列外に出で、一直線に並列せしかば日本艦隊は此の三艦の集團に向て其の砲火を集中せり二時三十分ポロチノは再びアレキサンダー三世の梯陣に加はりたり、アレキサンダー三世は非常なる損害を受け殆んど全艦猛火に包まれて暫時列外に出でたるも迅速に之を恢復してポロチノの梯陣に加はりたり、二時四十分ポロチノは艦隊の先頭に在りしが同艦は恐る可き大火災に罹りたるを認めたり、此の時よりシリイベリキイ其の他の諸艦も非常に敵の砲弾を受くるに至れり。我が艦隊は約百二十サーゼン（一サーゼンは七尺四分強）を隔て、オスラビヤの傍はらを

通過せしにオスラビヤは機關の運轉を止め全く左舷に傾き艦尾を上に掲げて艦首は全く水中に沈みたり、余はオスラビヤ滅亡の光景を生涯忘る能はざる可し、同艦は刻一刻横に傾きしが數百の乗員は既に救助を得る道なく或は衣服を脱して裸體になり或は半ば裸體と爲りて横になりたる右舷の上にと急ぎたり、將に滅亡せんとする彼等の群集頭上には日本の砲彈容赦なく落下して炸裂せり、我等が同艦と真横に並びたる時オスラビヤは既に右舷の艦側をキールまで水中より露出し艦側の鐵板は日光を浴びて恰も海中の大怪魚の水に濡れたる鱗を観るが如くなりき、右舷に集合せる人々は俄かに恰も命令せられたる如くに下より此艦腹の鱗(鐵板)の上へと急ぎ或者は立たんとして足を滑らして顛倒し或者は頭を倒さまにして落ち又は頭足と腹背の別なく踏み倒

幕六

我艦ハ敵ノ主カト右ト四十分
間激戦ノ後下圖如ク四艦共ニ
多大ノ損害ヲ受テニ戦線外ニ
出ス日本艦隊ハ其時我前線ヲ模索ス

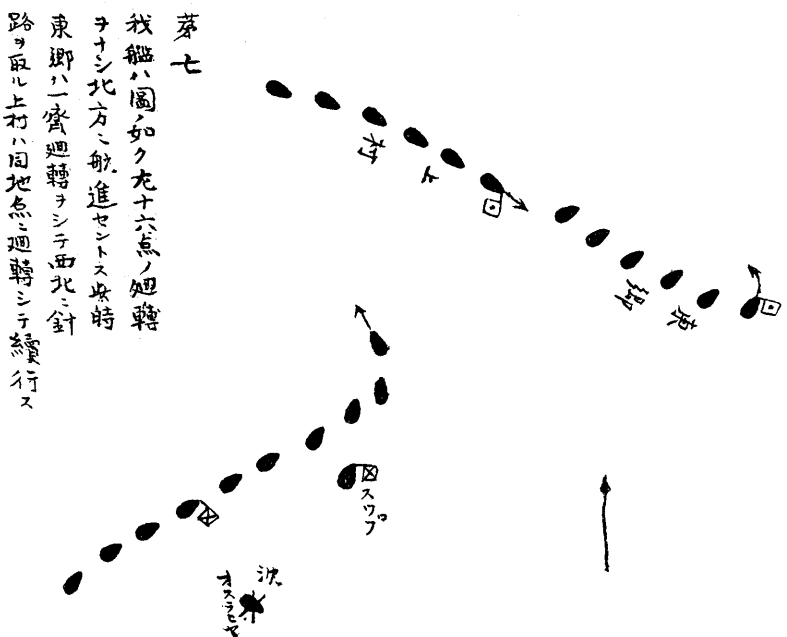


さるゝもありたり彼等の多くはキールの横に衝き當り負傷して海中に落ちたり、沈没艦の近傍の海上は沈溺者其處此處に浮沈して言筆の盡す可らざる情景を現はし或は救助を呼ぶ者或は互に身體に取り附きて共に溺死するなど慘憺たる状態に名状す可らざりき、敵の砲彈は始終この沈溺者の頭上に飛來して爆發せり斯くて瞬時にして戦闘艦オスラビヤの艦影は海中に消え失せたり余は思はず時計に眼を轉じたるに實に二時四十五分なりき、此處に驅逐艦ファイヌイ、フラウイ、アイストルイの三艦來りて雨霰の如く落下する敵彈の下に在りて尙ほ救助し得らるゝ者を引揚げたり。

(十九) 蜿蜒たる兩艦隊

ボロチノは東方に航路を取りて我が艦隊を導きたり、然るに日本艦隊は我が艦隊を左舷艦首の方より壓迫して我を追撃し我が艦隊の先鋒諸艦を威迫し我が航路の前程を横断せんと欲して少しく右舷に轉じたり。ボロチノは此の状況を見て此の上尙ほ右舷南方に向ふの不利なるを認め且つ日本艦隊の梯陣後續の諸艦に大なる損害を興ふるを得べきを認めて俄に左舷八點の廻轉を爲して航路方針を北に轉じたり、他の諸艦も亦梯陣を爲してボロチノに従へり是に於て戦闘は暫時の間右舷の方に移りたり。日本艦隊は我が此の運動を認むるや否や彼の装甲艦は何れも二時五十五分に一齊急速に右舷十六點の廻轉を爲せり而して日進を先頭と爲して我が航路の前程を横切るが如くにして既に反對の方向に赴きたり、敵の巡洋艦は其の戦闘艦の廻轉を爲したる地點に達するや同じく戦闘艦と同様なる運動を爲して戦闘艦と梯隊を作りたり。

其の時ボロチノは再び右舷に廻轉して以前の航路を取り且つアレキサンター三世はボロチノに代りて先頭の位置を占めたり、斯くて敵艦隊は互に左舷を以て戦線の中央より二十八ケープルの間隔に反對航路を取りて遠離せり故に我が艦隊一部は諸艦にては沈黙し居りたる小口徑砲の砲員は敵艦の益々接近し來れるを待ちたり、然るに敵艦隊は敢て接近せず我が艦隊の戦線を通過するや再び一齊急速に反對航路の方に右舷十六點の廻轉を爲し約四十ケープルの間隔を以て我を追撃しながら再び我が艦隊と並行の航路を取りて航進せり、敵の装甲巡洋艦の諸艦も同様の廻轉を爲し暫時濛氣の爲に其の艦影を逸せり、同巡洋艦隊は後ち我が艦隊の右方に轉じ我が後續艦の後方遠く航走せる者の如し如何となれば此の装甲巡洋艦隊は若干時を經過して我が艦隊の右方



より現出せるを以てなり。我が艦隊は最初東方に向ひたるも敵艦隊と反對航路を取りて航進せる時益々右舷に轉じ斯くて東南四分の一に轉したり、然るに三時十五分に俄然我がスワロフの在るを認めたりスワロフは舵機の汽管を修理しながら艦隊に追尾し艦隊が上記の如き迂回曲線の運動を爲し居る間に益々東方に航走し來れるスワロフが敵の戦艦と我が艦隊の中間に在るを認めしかば我が艦隊はスワロフ掩護の目的を以て再び左舷に廻轉し殆んど東北に向て直に同艦の方に赴きたり、然るにスワロフ掩護は其の目的を達するを得ずアレキサンター三世はスワロフより十五ケープルを隔て同艦を左舷の方に遣して三時二十分に又も艦隊を右方に導きたり、敵の各戦艦は既に非常の傷痕を受け居るスワロフに向て其の砲火の一部を注ぎ同艦は後部の煙突並に中橋を全く折られ前橋は僅に其の半ばを存するに過す非常の火災に罹り居れり。

(二十一) 旗艦の慘狀

我が艦隊は漸次右舷に廻轉し敵の戦艦に對して左舷備砲を以て戦ひながら約五分間を經過せり、敵艦隊は其の速力の速きに乘じて再び我が前程に位置を占め左舷より我が先鋒の諸艦を壓迫せり、三時卅分頃には我が艦隊の諸艦は何れも多少の損害を受けざるは無く多くは火災の起れるを認めたり、此の時我等は濛霧と漠々たる砲煙の爲に日本の戦艦を見失ひて左舷の戦艦は中止せり左れど此時、右舷の方より日本一等巡洋艦の枝隊濛霧を排し突如として現出し艦尾の方より我を追撃し來りて今や其の二等巡洋艦の枝隊と合して我が巡洋艦並に運送船に迫らんとする者なり、左れば今は忽ち右舷の方

に戦闘開始せられて砲聲は海天を震動し濛々たる砲煙海を覆ひて戦闘最も激烈を極めたり、我等は三時四十五分にウラルの側らを通過せりウラルは艦首を甚だしく沈下して左の信號を掲げたり曰く一我は貫通孔を受け之を閉塞するを得ず乗員を救助す」と此の時、我が諸友艦は特に猛烈なる敵の砲撃を被り敵弾は事實的に敵の如くに戦闘艦の週邊に落下して海水を搏ち弾片を四方に飛散せしめ水柱高く奔騰して偉觀壯絶を極めたり、余はウラルを少々離れてスウェトラーナ並に汽船スウイリの在るを認めたり彼等は端艇を下すの準備を爲し居る者の如し我等は運送船の側らを通過し尙ほ十分間殆んど南方に航路を取り右舷にて戦ひながら同一航路を進み後ちに左舷に(東方に)廻轉せり、四時頃に左舷に當りて又も日本の戦闘艦隊現出して我が艦隊と並行せる航路を取り同じく我が艦隊の左舷に向ひて來進せる日本の一等裝甲巡洋艦隊も亦敵戦闘艦隊の梯隊に加はりしかば戦闘は忽ち我が左舷に移りたり双龍滄溟を搏て玉を争ふ如き敵味方の兩艦隊は互の間隔三十ケール位なりしも往往二十八ケール位に接近せり。

四時半頃に我が艦隊の前程右舷の方に當りて火災の爲に燃焼し居る戦闘艦スワロフの骸骨を認め同艦の方に寄りて進みたり既に煙突を失ひマストを挫折せられ上甲板の代りに僅かの碎片を遺せる旗艦スワロフの慘状は之を骸骨と名附くるの外他に名状するの言を知らず、艦内よりは黒煙渦巻き騰り全艦の砲門並に無數の弾孔よりは紅蓮の如き火舌を噴出せり而も尙ほ其快速力を失はず恰も神話の火焰船の如くに我艦隊に向ふて驀進し來り今一度艦隊に加はらんとしたる如くなりしも其の目的を達するを得ず只右方より左方に航走し去りたるに過ぎざりき。我が艦隊は斷えず左舷備砲を以て戦闘を續け再

び右舷に轉じ又漸次に東南の航路を取り後ち南に轉じたり、四時四十五分頃左舷の前方に在りたる敵艦隊は海上濛氣の深くなりし爲めと砲煙の漠々たりし爲めに辛うじて其の艦影を望見し得たりしが暫時にして全く其の影を失へり是に於て我が艦隊は順次に西南に廻轉し更に轉じて北に向ひ斯くて又も我等の目指す航路東北に向はんとせり。(指圖参照)

日本艦隊は我等を濛氣の爲に見失ひ我が艦隊は南方に逸走せるものと想像したるものゝ如く只南に向けて快走せり、斯くて日本艦隊は南方に六哩を進みし時其の誤りを悟りしか戦闘艦隊は又も我等を追撃して我が浦鹽航進の航路を遮断するの目的を以て北方に廻轉せり。惟ふに日本艦隊が此の廻轉を爲したるは我が艦隊より隱岐嶋を望見したるを以て或は此時同嶋より我が艦隊の所在を無線電信を以て日本艦隊に通信したるの結果なりしなる可し、暫時戦闘は休止せるを以て此の機を利用して我が各艦に於ては累々たる死傷者を收容し且つ出來得るだけ破壊毀損せられたる機關並に備砲等の修理を爲せり。

(二十一) 彼我射撃及び砲彈の比較

斯くの如く日露兩艦隊は濛霧の爲に互に其の踪跡を見失ひて一時戦争は中止せり、余も亦此の戦争の中止を利用して我が艦隊の射撃が日本艦隊の射撃に比して何故に其の効力斯く尠かりしやを説明す可し、此の時我が艦隊に於て全く戦闘力を失ひたる者二艦あり其の他の諸艦は何れも著しき損害を受け且火災を起さざるはなかりき然るに日本の艦隊にて多少現然たる損害を受けたるは只だ淺間艦なる

可しと想はる此一巡洋艦は暫時傾斜せるを認めたるも忽ち之を恢復せり。
 大海戦開始の際に日本艦隊が我が艦隊に邂逅したるは我は陣形變更の混雜を來したる際なりき、此の時日本艦隊の砲火は我が梯隊の先鋒たるスワロフ並にオスラビヤに集中せられたり、後ち日本艦隊は其の速力の優越なるを利用して始終我が艦隊と並行の航路を持し其の全艦隊が常に我が先頭艦と對角するの位置を占め斯の如くにして其の全戦闘力を我が艦隊の先鋒部隊に集中せり、我艦隊の先頭艦は勿論敵の砲火に對して有効なる應射を爲し得たるに相違なしされど我艦隊の中央部隊特に殿後に在る諸艦の如きは敵艦隊を隔る甚だ遠かりしを以て其の射撃の効力は甚だ尠く日本艦隊の先鋒たる戦闘艦に對しては其の効力全く皆無なりき、我が艦隊の射砲任務訓令に左の如き一項あり曰はく戦争開始の際にスワロフは日本艦隊の第頭艦に對して第一着の射撃を爲して敵艦隊との間隔を示す可し他の諸艦はスワロフの爲す所に従ひ其の指揮を受けて砲火を開く可しと然るに實際尠しも斯の如き事は行れず旗艦が自ら第一着に此の訓令を遵守せざるの例を示して各艦何れも勝手次第に放縦なる射撃を爲せり。日本艦隊の全部隊は既に我が先頭艦の前程右舷の彼方に在りし時旗艦スワロフは「先頭艦を砲撃す可し」との意味の略符信處を揚げたり是れ實に交戦中の前後唯だ一回の信號にて能く此の信號を解し得たるものはスワロフに接近して後續せる二三艦に過ぎず他の諸艦の如きは更に此の信號を解せざりき然し之を解せざるも亦何等の害をも生ぜざりき如何となれば能く射撃し得る者は此信號の有無に關せず日本の旗艦たる戦闘艦に對して射撃せり、又我が梯隊の後續諸艦は何れも日本の先頭艦を隔つる甚だ遠かりしを以て各艦何れも各自別箇の目的を擇ばざるを得ざりしを以てなり。

日本の艦船を射撃するは甚だ困難なりき我が砲弾は海中に落下するも炸裂せず甚だ悲む可き事には我が砲弾は敵艦の舷側に命中してさへも炸裂せざるものさへもありたり、跳躍放射の際に（軍艦を飛越して海中に落ちたる時）僅に低き水柱を揚ぐるのみ具つ海戦當日の如き灰色の日（濛氣の爲め）には不着弾は約三十五ケープルの距離に於ては明かに之を見るを得ず飛越弾や命中弾に至りては殆んど全く之を認むるを得ざりき。

日本艦隊は甚だ鋭敏なる信管を有する二種類の砲弾を發射せり其の信管甚だ鋭敏なるを以て敵の砲弾は海中に落下するや忽ち炸裂して煙を交へたる萬丈の水柱を揚ぐるなり、日本の砲弾が飛來して一度その舷側に觸るゝや恐る可き炸裂を爲し其の大口徑砲弾に至りては實に水雷の爆發と同様なる効力を奏し巨大なる貫通孔を生ずるなり。日本艦隊より發射せる一種の砲弾は其の爆發するや多量の黒煙を發し他の一種の砲弾は下瀬火薬を以て裝填せられしものなる可く其の炸裂するや黒驛色の煙を發せり。

（二十二） 彼我射撃及び砲彈の比較（續き）

日本艦隊は戦争の際に其の艦色を暗灰色に塗りたり斯の如き艦色なりかば海戦當日の如き濃霧の深き日には三十五ケープルも隔れば模糊として水天の間に之れを認むるを得ざる事ありたり、又我が諸艦に設備しある照準鏡は甚だ精巧なる構造なるも海霧陰濕の天候には濛氣の爲に其の鏡面に水蒸氣の凝結を生じて朦朧となり敵艦と地平線と殆んど區別し難く我が砲員照準士は數々敵艦を見失へる如

き事あり、我が諸艦に備へたる照準鏡の事に就きて尙ほ一言せざる可らざる者あり我が諸艦設備の照準鏡は到底精確なる照準を得る能はざると者と斷言せざる可らず、如何となれば實地射撃の場合に數發を發射すれば照準鏡は忽ち其の位置を變じて照準に歪ひを來せり些少なりとも照準鏡に位置の歪ひを來さんか射撃の精確を得る能はざるや勿論なり。

我が艦隊の諸艦は艦體を黒色に塗り煙突を黄色に塗り艦船の彩色は海戰當日の如き灰色の水天と其の色全く別なるを以て遠く之を望見するを得て照準を容易ならしめ大に日本艦隊をして其の射撃に利を得せしめたるに相違なし、且つそれ我が艦隊は敵艦隊の壓迫その他の原因にて始終不定形線を書きて右往左往に廻轉せし爲め我等は殆んど直線の航路に在りて發砲したる事なく多くは循環しながら發射せり、是れ實に至難にして又不正確なる射撃なり加之我等をして尙ほ射撃に一層の困難を加へしめたる事情あり即ち我が艦隊は交戦の際に約五分間も同一速度を以て航走したる事なく或は先頭艦が列外に出る爲め或は航路廻轉の爲に屢々大廻轉を爲し又は速度を大に減じ甚だしきに至りては全機關を止めざるを得ざる如き事さへもありたり、敵艦隊は能く學理に適へる始終約十六ノットの速度を以て航進せしかば其の照準を定むるの便宜なるは到底我が艦隊の一分間毎に其の速度を變更する如きものに非ざりしなり。又我が艦隊の諸艦には屢々火災起りしかば燃焼する艦船の黒煙が風に靡きて我が艦隊の傍側の海面を覆ひ之が爲めに我が射撃を妨礙せられし事少なからざりき。然るに日本艦隊の諸艦には火災の起りし狀況更に見えず想ふに我が砲彈は炸裂するも左まで猛烈なる燃焼力を有せざるものゝ如し、日本の艦船には我が諸艦と同様に木製の箇所もあるに相違なきは勿論なるも我が砲彈の爆發は

之を燃焼せざるなり。

日本の砲彈は我が砲彈に比して其の形狀甚だ長きを以て我が砲彈より多量の爆發藥を裝填せられあるは勿論にて其の炸裂するや無數の彈片となり其の彈片は皆な忽ち炸裂の時に烈火の如くに灼熱せられ其の碎片の觸るゝ所一物として發火燃焼せざるはなし、茲に一例を舉示すれば日本艦隊の大口徑砲の砲彈我が砲塔に當りて炸裂し其の碎片飛びて上甲板を通過して之を焼き三枚の鋼鐵の隔板と書棚とを貫きて士官私室に落ち其の碎片は其の通過せる各部にも亦た私室内にも何れも火を發して火災を起せり、日本の砲彈の碎片は斯の如く何れも炎々たる烈火の如くに灼熱せるを以て我が諸艦にては唯り吊床の類のみならず塗りたるペンキさへも火焰を上げて燃焼せり。戰争後余は或る時日本の砲彈と露國の砲彈の各種の碎片を比較するの機會を得たる事あり、露國砲彈の碎片は即ち光澤のある表面を有する鋼鐵の普通の碎片なるも日本砲彈の碎片は一旦灼熱せしめて鍛鍊せるものとなりざるを認めたり。

(二十三) 戰艦構造の缺點

我が艦隊の艦船操縦の事に關しては余は茲に尙ほ一言せざる可からざる者あり、艦船操縦の樞機は悉く其の艦の司令塔内に集中せられ艦體の運動は勿論苟も全艦活動の樞機は恰も人身の諸神經が腦の中樞に集中せらるゝ如き機關なれば實に是れ全體の最樞要部なり、從て司令塔は操砲操舵の首腦たる艦長——即ち其の人物の存否は戰局全般の上にも影響なき能はざる人物の爲に特に設けある場所なれば艦内にては其の防禦最も堅固ならざる可からざる場所なり、然るに我が艦隊諸艦の司令塔の構造は果

して如何ぞや我が諸艦の司令塔は唯り舊式なるのみならず其の最新式なる諸艦に於ても其の構造實に粗漏極れる者なり、司令塔は殆んど無防禦の状態にて四方に鼠の自由に入出入する如き間隙を有するを以て若し敵彈一度飛來して司令塔の附近に命中せんか炸裂砲彈の無數の碎片は其の間隙より司令塔内に飛散するを免れず、斯の如き構造なるを以て司令塔は全く何等の防禦を有せずといふも謬言にあらざるなり、敵艦が其の猛烈なる砲火を集中せる我が艦隊の諸艦に於て其の司令塔に入りたる人の運命を見るに司令塔内に入り居る者は忽ち死傷して更に新に更代せしむれば又直に死傷の運命を免れざりしといふ状態なりき。余は尙ほ備砲の事に就きて一言す可き者あるを忘却せり、即ち我が艦隊の四隻の新式戦闘艦の備砲中の下部の七十五ミリメートル砲は其の砲門何れも喫水線に接近し且つ艦は過度の積載を爲し居るが爲に其の砲門は益々降下して水面に近づけり、是等戦艦に在りし一士官の言に依れば海戦の當日は波浪高かりしを以て海水砲門に奔騰して爲に射撃を中止せざるを得ざる事ありたりといへり、(クラド大佐の言明に依れば砲門が餘りに低く喫水線に近きが爲に彼の北海漁船砲撃の夜に海波砲門を襲ひて發砲の刹那に海水砲口に入りし爲め其の砲は忽ち破裂せりといへり)斯く砲門の低下し居るの一事は唯り射撃を困難ならしめたるのみならずアレキサンダー三世並にポロチノの顛覆を速かならしめたるの一原因も亦此處に在りといはざる可からず。余は我が艦隊諸艦の缺點と不十分なる點に就きて斯く縷述し讀者をして倦厭に堪へざらしめたるを謝せざるを得ず左れど余が此の問題に就きて詳述したる所以は他にあらず、我が諸艦の不十分なる缺點は餘りに明白にして此の缺點を指摘するは將來に對して一の警戒を爲す者なれば寧ろ余の義務なりと信する者なり。

（二十四） 激戦再始の光景

日本艦隊が其の艦影を濃霧の裡に没するや我が艦隊は再び艦列を整へて直線となり東北四分の一の方向に轉じて目指す航路を取りて航進せり左れど休戦の時刻は暫時にて僅に四十五分内外に過ぎりき、五時半に日本の戦闘艦隊は再び右舷後方より現出して我艦隊と並行せる航路を取りて急駛我等を追撃し始めたり、日本の戦闘艦隊は暫くして猛烈なる砲火を開き我等も亦右舷の備砲を以て是に應射せり日本艦隊は又も其の砲火を専ら我が先鋒諸艦に集中せしかばアレキサンダー三世、ポロチノ並にアリヨールの三艦は特に苦戦に陥りたり、六時頃に至りアレキサンダー三世は左舷に非常に傾斜しながら艦列を出でたり艦内には大火災起り艦首は殆んで崩壊せられ且つ左舷艦首に直径廿尺餘の貫通孔を生じたり、同艦は瞬時にしてオスラビヤと其の運命を同うす可しと想はれしが其の傾斜を復して漸次艦體を真直にしセニヤウインの後列に加はりて戦闘を續けたり。六時頃の戦闘は日露兩艦隊の間隔四十四ケール乃至二十八ケールの距離を以て交戦せり、然し日本艦隊は隔機或は其の艦隊の速力を減じ或は大に速力を加へて我が艦隊を追撃し此の第二回目の交戦には最初の如くに我が航路の前程を横断せんとする如き運動を爲さざりき、六時卅分頃にアレキサンダー三世は再び甚しく左舷に傾斜し且つ「神難に遇ふ」との信號を揚げ又海上信號塔を以てセニヤウインに同様の信號を傳へながら左方の艦列外に出でしが忽ちキールを上にして鋭然顛覆せり、アレキサンダー三世の顛覆は如何にも急激突然の事なりしかば上甲板に在りし乗員は悉く戦闘艦の下に覆没せられキールの上に辛うじて攀登りたる

者僅に十六名に過ぎざりき、此時又も五分間程砲聲鎮まり戦争は暫時中止せり蓋し濃霧の爲に互に艦影を見失ひたるが故なるべし。此の第二回目の戦闘の時に我が諸艦が屢々列外に出で且つ數々其位置を轉せしかば艦列は多少變更せり、即ちアレキサンダー三世沈没の際の艦列は左の如くなりきポロチノを先頭となしてアリヨール、ニコライ、アブラキシン、セニヤウイン、ウシヤコフ、ナワーリン、シリイ、ナヒモフの諸艦一列梯陣を爲して續行せり、我が艦隊は右舷備砲を以て戦ひながら漸次益々左舷の方に轉じ斯くてアレキサンダー三世滅亡の時に我が艦隊の航路は又も對馬嶋の方を指せり、六時三十分頃に艦列の第三位にありしニコライ一世（ネボカトフ提督坐乗）は順次に左の二回の信號を揚げたり曰く「我に續航すべし」曰く「東北二十三度の航路」と此第二の信號はアレキサンダー三世滅亡の後暫時戦闘の止みたる其瞬間に與へられたる信號なりき。日露兩艦隊は再び接近して並進の航路を取りながら我は右舷備砲を以て最も猛烈なる戦闘を爲せり、ニコライ一世が最後の信號を揚げて後五分間を経て驅逐艦ベズウフノチヌイは左舷の方より艦隊に接近し來りニコライ一世の近傍に航進して艦上より音聲を以て「ロゼストウエンスキイ提督は同驅逐艦に移乘し浦鹽に航走する事を命せられたり艦隊の指揮をネボカトフ提督に托す」と此時我巡洋艦と運送船とは遠く左舷の後方に在りたり。信號を受けたる後我等は再び目指す航路を取らんと目的にて右舷に轉じたり、左れど我等は此の上に向は右舷北方に廻轉するを得ざりき是れ敵艦隊は始終我等を左舷に壓迫し其水雷艇隊が我が艦隊を待設け居る方面に我等を追ひ込めんとせるが故なり。

（二十五）ポロチノの最期日本水雷艇現出

日露の兩艦隊は依然として戦闘を續け何時果つ可しとも見えざりき、然るに夕陽既に低く地平線上に傾きしも恰も太陽は其處に停りしが如くに落日容易に没せず我か艦隊の人々は怨めし氣に夕日を眺め皆同じ思ひに沈みて早く日暮れて夜となり安息を得たきに此の夕日何故に没することの斯く遅きやを歎ち時刻は限りなく長きが如くに感じたり、我が艦隊は右舷を以て敵と戦ひ落陽を左舷にしたるに日本艦隊は左舷を以て我に對し左舷眞向に落日を受けし事なれば落陣砲員を眩目せしめて射撃を困難ならしめ爲に戦闘を幾分か早く終らしめたるべし。

七時十分頃敵の大口徑砲彈空を切て飛來し我が戦闘艦ポロチノの船尾砲塔近く喫水線に命中せり、我々乗艦よりも其敵彈の炸裂する耳を聳せんばかりの二回の爆聲を聞きしが間もなく敵彈の命中せる反對の左舷喫水線の邊より火焰の噴出するを望見せり、其の後ポロチノは右舷の方に走り出で尙ほ六時砲の砲塔より數發の射撃を爲せしが間もなく右舷に傾斜せるよと見る間に俄然キールを上にして顛覆せり、ポロチノの顛覆は如何にも迅速なりしも同艦のキールの上に兎に角に水兵十二人急ぎ乗りたるを認めたり彼等は我等が同艦の傍側を通過せる時に手を以て塵き救助を求めたり、顛覆せるポロチノの艦底は久しく水上に浮き揚り居りしかば我等は暫く之を望見するを得たり。此の時我艦隊の前程右舷並に左舷の両方より突然に日本の水雷艇隊現出せり、我が艦隊は之を遊撃して左舷の砲火を開きて是に復れり是れ我が右舷の備砲は此の時尙ほ敵戦闘艦隊に向て最後の射撃を爲し居りしが故なり、七

時十五分に至り日本艦隊は「悉く一齋に」又日進と春日とは順次に右舷に廻轉して戰場を離れ濃霧の裏に隠れたり。日本艦隊が見えずなりし時我等は皆な太息をつきて安心せり、日は暮れ夜の幕は海上を覆ひつ此の恐怖すべき日より我等に休息と安堵とを與へて我等を救はんとする此の夕夜を心中に感謝せり、人々皆な喜色に満されて今しも地平線上に落んとする夕日を眺めながら早く早く日の暮れん事を祈りたり、彼等が斯くも待焦がれし此の夜は實に彼等に安息を與へたり——然り彼等に永久の安息を與へたり。

日本艦隊が戰場を退きたるは既に其の爲す可き任を終て去りしなり、即ち日本艦隊は其の水雷艇隊が我等を待設け居りたる場處に我が艦隊を導き來りたれば今は既に用無きを以て戰場を退きしなり、此の日日本艦隊が我等を離れ去りて其の艦影を没すると同時にニコライ一世(ネボカトフ提督(坐乗))は左舷に廻轉して船尾の方に當り我巡洋艦ウラヂミル、モノマフの遠く見ゆる西南の方へと逆進せり、ウラヂミル、モノマフの近傍に一隻の我が大運送船の在るを認め又同一方向に當りて海霧の間に髣髴として若干の艦影あるを望見せしは我が他の運送船なる可しと察せられたり、ニコライ一世は其前程を航進せるアリヨールと一列になり他の諸艦は之に續きたり、我が艦隊が斯の如き運動を爲したるは思ふに二様の目的ありしなり、第一に此の運動に依りて敵を迷はし我が砲撃に依りて前方に航走し前程に於て更に我等を襲撃せんが爲めに全く日の暮るゝを待居れるに相違なき日本水雷艇隊の攻撃を避けんが爲めなりき、又第二には我が巡洋艦の接近し來るを認めしかば彼等に我が主力艦隊に合する事を得せしめんが爲めなりき。

(二十六) 日本水雷艇活動

我が巡洋艦イズムールドは三十分を経て我が艦隊に合したり我が艦隊は七時五十分西に向て航進し居れり、モノマフ、ドンスコイ並にスウエトラーナの三艦は實に非常に後れ巡洋艦オレーグ、アウロラ、ゼムチュエーグの諸艦は何處にか消え失せたり、是等の諸艦は何れも海上に望見するを得ざりき或人々は是等の諸艦は只だ非常に後れしに過ぎざれば間もなく來り合す可しと云ひ、或は我等に先んじて浦鹽に向ふ航路に在る可しと云ひ、或は彼等の勇敢なる諸友艦も旗艦スワロワ並にアレキサンダー三世、ボロチノ等と同様に不幸なる運命に遭遇せるものならんと云へり、然し後に至りて是等の豫想は何れも誤れる事を識りたり即ち其の將官旗をオレーグに揚げ居りしエンクウイスト提督は彼が自ら認めて最良の策なりと想ふ所の道を選び日本の水雷艇に邂逅する事を欲せず自ら率ある枝隊に南方に廻轉する事を命じ安然として中立港に向て航進せり、然り其中立港には敵の水雷艇も無ければ浮流水雷もなく更に何等の危険あるなく萬事靜穩にして安然なり。

八時後に日は全く暮れて暗夜となれりニコライ一世より三ヶールを隔て、左舷の眞横に航し來れる巡洋艦イズムールドを辛うじて認め得たる程の暗夜なりき、八時十五分ニコライ一世は再び艦首を東北二十三度に轉じて先に受けたる命令を確に實行して艦隊の殘艦を眞直に浦鹽への航路に導きたり。然るに我が敗殘の諸艦が(浦鹽の航路を指して)廻轉するや否や間もなく敵の水雷艇の襲撃は始りたり、我が艦隊の諸艦は何れも探海燈を以て海面を探照し(アリヨールは探海燈を照さず)暗中を航進

したるが故に水雷艇の攻撃を免れたり、必死となりて大小各種の口徑砲並に機關砲を最初は右舷より後には左右の兩舷より日本の水雷艇に猛射せり、彼等日本の水雷艇は何れも決死の勢を以て我が艦隊に肉迫して其の水雷を發射し又凡ての小口徑の備砲を猛射せり、又彼等日本水雷艇の乗員は假令發射水雷の命中を誤るも我が上甲板若くは艦橋に在る者を殪し多少なりとも損害を與へんとて彼等は其携ふる所の小銃をも發射せり、我が諸艦より日本水雷艇に浴せたる兇惡なる砲火に頓着なく彼等は悠然自若として三ケール乃至五ケールの間隔まで進み來りて其の水雷を發射せり、我が砲火に堪へずして後退するが如きは甚だ稀なりき、左れど我が諸艦より雨霰の如くに注ぎたる砲彈は決して其の効なきに非ざりき何んとなれば水雷發射が數々その正鵠を誤れるは我が砲彈が其の照準機の擔任者不安ならしめ多數の水雷をして其目標を誤らしめたるを以てなり、日本水雷艇の猛烈を極めたる水雷攻撃は六時より八時まで續きたり彼等は特に其の水雷を我が後續の諸艦に向て發射せり、是れ後續諸艦は始終探海燈を照らし居りたるも先鋒に在るニコライ一世並にアフラキシン等は最初の攻撃の後には探海燈を閉ぢて探照を爲さざりしを以てなり、間もなくセニヤウインも之に習ふて探照を止めたり故に是等の諸艦は水雷の損害を免れたり、日本の水雷艇は全速力を以て我が先鋒の諸艦の邊にも襲ひ來りて一再ならず我が艦を認めて水雷を發射せしも何れも命中せざりき、是れニコライ一世が僅に艦尾の一燈を殘せるの外に何等の燈火をも有せざりしが故なり此の暗夜に水雷攻撃をせられんが爲に或は俄然その舵を轉じて他艦の左側に向け來る事もあれば又列外に逸出する如き事もありて艦の操縦に非常の困難を感じたり。

（二十七） 暗中漂蕩の艦隊

同夜九時三十分頃探海燈の探照に依りて我が艦隊の艦列の順序を見るを得たりしが其の艦列は左の如くなりき、ニコライ一世を先頭としてアリヨール其の後に續き又少しく四ケール程を隔てアフラキシン其の次にセニヤウイン同艦より五ケールを隔てウシアコフ、ナヒモフ、シライ、ナワリーン等續航し又ニコライ一世の眞横に巡洋艦イズムールド航進せり、日本水雷艇の攻撃は十時頃に至り大に減じ左舷の方よりは全く止みたり、茲に余は我等を襲撃して我が先鋒艦に水雷を發射したるも其の命中を誤りたる一水雷艇の事に就きて一言せざる可らざるものあり、此の敵の一水雷艇は我が艦隊に最も接近し數十尺前まで襲來せしに我先鋒艦の發射したる一砲彈その水雷艇の蒸汽罐に命中したりと見え我が後續艦より探海燈を以て望見したる時は同艇は全く蒸汽を漏洩して進航を停めたり、同艇の甲板上に一士官の直立し居るを認めたるが思ふに其の艇長なる可し其の士官は將に沈没せんとする艦艇の甲板上に自若として起立し其の最後の運命を待てり、其の時同艇の中央に我が艦隊の大口徑砲の砲彈命中して水雷艇は中央より切斷せられ艀部を上にして煙々たる探海燈の射せしめる明るき海波の間に消え失せたり、若し數十名の人命を損する斯の如き場合にも壯觀と云ふ語を用ひらる可くんば此日本の水雷艇沈没の光景は實に壯觀極れる光景なりき。

十一時敵の水雷艇隊は最後の襲撃を爲せり且つ探海燈の光にて見れば我が後續の戰團艦は非常に後れたり此の後も探海燈の光射は三十分間全く閉されたり、十二時頃にニコライ一世の艦列に在りしはア

リヨール、セニヤウインの二隻にて遠く離てアフラキシシン一隻進航し來るを見のみにて他の諸艦は海上暗くして見るを得ざりき。是に於て吾人は我が先頭たる旗艦ニコライ一世の行動に就きて注意せざる可らざる事あり、是より先八時頃にニコライ一世は全速力を出し終夜その速力を持続せり是れネボカトフ提督は其の後續艦は果して旗艦に續得ざるや否やは更に頓着せざるに非ざりしか旗艦ニコライ一世の持したる平均速力十二浬乃至十三浬は是れ我が艦隊に取りては實に強速力なり、ネボカトフ提督はウシアコフの如き全く斯の如き速力を出すを得ざる事を識り且つナヒモフ、シリイ、ナワーリン等の諸艦の如きもニコライ一世より速力僅に強きに過ぎざるに戰鬪の際敵の砲弾にて非常の損害を受け到底前記の如き速力を以てニコライ一世に續航するを得ざるに至れる事はネボカトフ提督の充分識れる所に相違なし、元來艦隊砲戰の終りし時は尙ほ充分明るく信號するに敢て難きに非ず艦隊の殘艦に對して信號を以て諸艦は如何程の最強速力を出し得るやを問ひ其れに従て諸艦を指導す可きなり。探海燈にて後續諸艦の後れし事が明かに識れたるにも拘はらず何等の方策も講せられずニコライ一世は依然として其の全速力を以て航進せり、或は余を難じて云ふ者あらん諸艦の後れたるは水雷を受けしが爲なりと左れど余は其の反對に諸艦の中にはニコライ一世に續くを得ずして後れたるが故に水雷を受けたりと云ふを得べしナワーリン、シリイの如き是れなり。若しそれニコライ一世の速力が尙ほ一浬強かりしならんにはセニヤウイン並にアフラキシシンの兩艦はニコライ一世に後るゝは現然たれば却てこの兩艦は翌朝旗艦と耻辱を同ふする如き事を免れしなる可し。

日本海々上寂寥となり二時に月出でたり茲に航進し居るは僅々の船艦に過ぎざるも兎に角に是等の殘艦を以て浦鹽に到着するを得べしとの希望出でたり、此の希望は左の一事を想ふに附けて愈々固くなり即ち日本人は昨日の戰鬪の際に其の砲彈を發射し盡したるに相違なきを以て彼等は何處かの軍港に於て其の補給を爲さざる可らざる可し、日本艦隊は戰鬪の時我れに比して殆んど二倍も多く射撃したるに我が艦隊にては例せば余が乗艦に於ては速射砲の砲彈は五分間の戰鬪に堪ふるだけ大口徑砲彈は十五分間の戰鬪を續くるだけを餘したるに過ぎざりき、日本人はまさかに石炭庫の裏に第二回の戰鬪の爲に其の砲彈を藏するの卓見あるべしとは吾人の全く豫想せざりし所なりしに余は俘虜と爲りたる後此の事を日本の士官等より聞き知りたり、只少しく吾人の不安を感じだるは提督は我が艦隊を浦鹽まで導くに直線航路は汽船の往復頻繁なるが故に迂回航路を経て導かんとする者なるか或は日本人は我等を追撃して此の航路を遮斷するに非すやとの憂ひ是れなり。兎に角に日本海は我等が如き航路を撰ぶも可なりに廣きを以て日本人が我等を追ひ來りて殘艦を尋ぬるに困難なるに相違なし故に我等は多少時間を徒費して五月の氣候に屢々ある濛霧に乗じて我等の安全を圖るに若かず。

（二十八） 日本艦隊の追撃

我等の救ひの望みは益々確かになれり、四時半頃東天白みて朝敵將に靜かなる海波を照さんとせり五時に夜は全く明けて朝風涼しく征衣を吹けり、我等此の清らかなる海上を眺むれば一晝夜前に威風堂々として勇氣凜然卅六の長旒を海風に塵かして對馬海峡に突進したる大艦隊は夢の如く消えて僅に五隻の友艦海上に残れるを觀るのみ殘艦にはニコライ一世を先頭にして其に續くは敵の爲に痛傷を負ひ

殆んど不具になれるアリヨールなり同艦と一列になりてセニヤウイン續航し其後より遠く後れてアフ
ラキシシ續きニコライ一世の眞横に巡洋艦イズムールド航進せり。此の敗殘の一小艦隊は戦闘上既に
何等の力を有せずニコライ一世の砲力は實に三十五ゲールより遠距離を射撃するを得ず加之同艦の
喫水線には數箇の敵彈貫通孔を受け居れり、偶然にも同一艦型の姉妹戦闘艦と運命を同うする事
を免れたるアリヨールは無數の敵彈貫通孔を受け大砲は大部分を破壊せられ唯二三の備砲は修理を加
へて尙ほ發射を爲すべきのみ、外にセニヤウイン並にアフラキシシの十吋砲の殘れるあるも是等の備
砲は既に製造所より之を受取りし時その不完全なる事を認められしものなるに廿七日の激戦にて是等
備砲の有するだけの壽命は既に盡したり、廿八日の朝に至りて是等の大砲を見れば砲の状態は何れも
其の砲身に異状を來して各十發以上は到底發射するを得べくも見えざりき、又戦闘艦アフラキシシ甲
帯鐵匾は敵彈の爲めと自艦射撃の震動の爲に壞弛して艦内に浸水せり、余は海防艦の百二十ミリメー
トル砲八門と又イズムールドの同砲八門の如きは戦闘上殆んど効力を有せざるものなれば是等の備砲
を眼中に置かざるなり。

黎明五時艦橋に立ちて四望すれば地平線上一點の雲なく敵も味方も一隻の艦影を見ず我等は緩速力
を以て徐航せり、然るに五時十五分に至りて地平線に數條の煤煙を望見せり始め右舷の方に現はれ後
ち左舷の方にも亦艦尾の方にも現出せり、間もなく艦尾の方の煤煙の處に幽かながらも髣髴として何
船にや船影を認むるを得たり次で左舷の殆んど眞横に當りて數隻の船の煤煙現出せり。六時より七時
までは是等船舶の何船なるやを見定むるを得ざりき、但し敵か味方かは不明なるも商船に非ずして軍

艦なる事だけは明かなりき、凡ての人々の眼、望遠鏡、双眼鏡は彼方に向へり或者は明かにナヒモフ
を望見すと言ひ或者は後方よりウシアコフ來航すと斷言し或者は我が殘餘の諸艦が敵艦と交戦するが
如く見ゆと説き終に彼等は砲聲聞ゆともいへり、只だ僅の人のみ是れ味方に非して敵艦なりといひ實
際敵艦なるも最初は何人も敵艦なりとの言に耳を假さざりき、朝七時半に至りて接近し來れる艦影は
既に敵艦と知られ其の艦型の見定めらるゝに至りても猶後方より來航する艦船は味方の船なりと言ふ
者すらありたり、彼等が目前に現はれたる船艦が願くは敵艦ならざれと祈る心の切なりしが爲に現在
敵艦を見ながらも自ら幻覺を來せるなり。時にニコライ一世は信號命令を下してイズムールドを偵察
に派遣せりイズムールドは六十ヶール程後方に逆進して引返し來り「是れ敵艦なり」と復命せり、我
が艦員を迷はしめたるは多くの事情あるに由る即ち松嶋の艦型なる日本の二等巡洋艦の煙突は恰も我
が艦隊の煙突の如くに黄色に見えたり、此の着色は敵が我等を迷はしむる爲に斯く塗り代へたるにや
又は是等巡洋艦は昨朝も斯の如き色の煙突を有したるを我等は海霧の爲に認めざりしにや此の事は判
明せざれども兎に角に敵艦の此の煙突は我等多くの者を迷ひ誤らしめたり。

(二十九) 我艦の絶望

七時十五分頃、旗艦ニコライ一世より「大砲は精確を有するや」と信號あり次で各艦より返答の信號あ
りて後ち更に十五分を経て旗艦は「戦闘準備」の信號を掲げたり、此の信號に依りて我が枝隊の各艦に
は戦闘警報の喇叭鳴り各員その部署に就き戦闘の用意を爲せり、七時五十分頃に「諸艦左舷四點の一

齊廻轉」との旗艦ニコライ一世の信號に依りて我が艦隊は敵の巡洋艦隊の航路前程を横切る航路を取りたり、此の時敵の巡洋艦隊は約百ケーブルを隔て、我が左舷真横の少しく後方に在りたり且つ敵の巡洋艦隊は左の諸艦より成れり松嶋、巖嶋、橋立並に戦闘艦鎮遠その外遠く後れて二等巡洋艦二隻なり。日本の巡洋艦は我が此の廻轉運動を認むるや否や忽ち左舷に廻轉して全速力を以て航走せり、勿論これ戦闘を避くるが爲めなるに相違なし日本艦隊は我等に比して左まで速力大ならずと雖も兎に角に彼我の間隔は忽ち遠くなれり、我等は到底日本の巡洋艦に追及するを得ざる事を認め十分間を経て提督の信號に依りて我等は又も以前の航路に復して航進せり、斯の如くにして我等は左舷に轉じて既に先きより我が艦隊の左舷前方に認め居りたる數條の煤煙の上れる方に航進せり、今我等は此の煤煙は甚だ遠距離に在る多數の軍艦の煤煙なる事を確め得たり但し其の艦型如何は尙未だ確むるを得ざりき、是等の諸艦は前程左舷の方より漸次に接近し來れり又我が艦隊の後方よりも敵の一艦隊現出せり午前九時に至りて我等は到底遁逃の道なく只だ死を決するの一事あるのみなる事全く明かになり我等は此の死をして出來得るだけ高價のものならしむ可きのみとなれり、半時間を経て敵艦の諸艦型をも明かにするを得るに至れり即ち我等の目前に今現出せる敵艦隊は是れ敵の主力艦隊にて戦闘艦並に巡洋艦を以て成れる一隊なり、此の敵艦隊は是れ昨者終日我等と戦ひ我等の最良の戦艦と幾多の戦友を失はしめたる敵の艦隊たり彼等艦隊は全部再擧して來進し彼等は昨日の激戦に些の損害をも受けざる者の如し。我が艦の諸員の顔には何れも決死の狀顯然たりき何となれば我等は他に遁るゝの道を有せず又之を知らざるを以て多くの者は直に其の心に死を決して却て全く冷静に平然として此の死の運命を期待せり、斯の如き場合には既に何者も決死者の自若たる決意を亂し若しくは破るを得ざる事を認めたり、左れど昨日の激戦にて我等の能く識れる此の敵艦隊が何等の損害をも受けず再び全艦隊擧て目前に現出せるを發見して我等は皆な心中非常の憂憤怨懣の感なき能はざりき、我等は日本の主力艦隊に些の損害をも加ふる能はざりしを今目前に見て我等が昨日迄何事かを成さんとて努力したる奮勵も又或は傷き或は死し幾多の戦艦幾千の人命を犠牲に供したる我等の一切の苦心苦痛も全く水泡に歸し去りたる事を感じたり、實に我等は今死に臨みて我等の死は尙ほ我が祖國に取りて多少の利益なきに非ざる事を確信し是に慰めを得て喜んで死せんと決心を爲せり、我が祖國は我等に大なる望みを屬し我等の死は到底その望を滿たすに足らざるも而も我等各人は皆な勇を振ひて各自の本分を盡し些少たりとも何事かを成すを得べしと決心せり我等の目前に些の損害をも受けざる敵主力艦隊の艦艙舳艦相啣み再擧し來れるを觀て我等の先きの幻覺は忽ち消えて我等の間に最も剛膽なる者さへも周圍の光景に失望し皆絶望的の冷静を有するに至れり。

(三十) 敗殘艦隊の包圍旗艦投降の信號

此の時イズムールドは再び偵察を爲す可きを命せられたり是れ想ふにニコライ一世は日本の主力艦隊を認むると遅かりしが故なる可し、イズムールドは約十ケーブル程進航して直に右舷の方に廻航し來れり同艦は諸人が既に自ら目堵せる事實を確め得たるに過ぎざるべし、日本の主戦艦隊は裝甲巡洋艦隊を背後に従へ我を邀撃するの航路を取りて徐々と我が艦隊に接近し來り九時五十分には日本艦隊は

約一百ケーブルの距離に在りて單縦陣の艦列を爲して航進し來れり、我が敗殘の一枝隊は今や日本の主力艦隊の外に北よりも西よりも亦南よりも敵の各種艦型の諸艦に包圍せられたり、是れ我が艦隊は日本の二十七隻を算する水雷艇並に驅逐艦の外なる全艦隊に包圍せられしものなり。日本の諸艦隊は其の主力艦隊が我等に接近するに従て其の包圍の環線を漸次に緊縮し其が後方に在りし一枝隊は既に左方に廻轉せり、是に於て我が艦隊の爲に唯一の退路として残り居りたる東方の一面も今は敵の爲に遮斷せられたり、我が艦隊には噭唳として戦闘用意の號音は響き亘れり間もなく決せらるべき此の戦闘の結果如何は我等凡ての者に既に現然たりき。

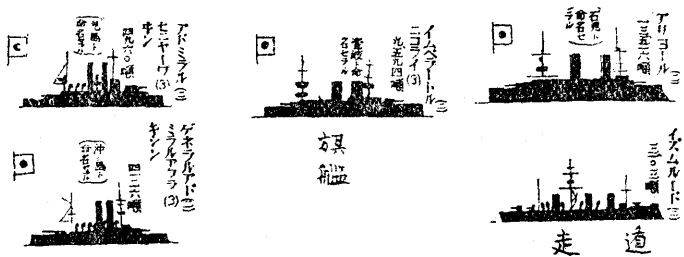
午前十時日本の主戦闘艦は俄に右舷四點の廻轉を爲して急駛我が艦隊に接近し來れり敵の諸戦闘艦が既に六十ケーブルの距離に來進せる時ニコライ一世は戦闘旗と艦尾旗とを降せり此の旗艦の行動は如何にも奇怪なる行動なりしも我が諸艦は何れもニコライ一世の行動に従て旗艦の爲せし如く爲せり、諸艦の多くの士官等には是れが抑も降伏なる可しとは全く解せられざりしなり、航海中に艦旗を降下するが如きは屢々にて敢て珍らしき事にあらざるも今敵前に於て斯の如き行動を爲すは如何にも怪訝に堪えざりき、斯の如きは疲倦惛憊の極に陥りたる神經衰弱者などの爲す可き事なり而も實際に斯の如き事を爲したるなり、左れど我が艦隊の諸人は降伏を爲す可しとの念慮より如何に遠かりしやを示すに足るものありたり、日本艦隊は急遽進航し來り五十五ケーブルを隔たりて我が艦隊に向て一齊に砲火を開始せり其の後ち彼等は梯陣を爲して砲撃を續けながら我が艦隊と並行の航路を取れり、我が諸艦は刻一刻とニコライ一世が第一發の砲火を開かば其れに續て左舷の砲火を開かんものと思ひて之

を待ちたるもニコライ一世は遂に砲火を開かずして同艦は一信號を揚げたり、我等は此の信號を以て最初自艦の爆沈を意味するものなる可しと思ひたり然るに其の信號を注視すれば此の信號は萬國信號なり、是れに依りて戦闘旗を引き下げたる理由今は明かになりたるも此の萬國信號は何を意味するにや是れ萬國信號簿を開くまでもなくXIIIの三信號旗は「投降す商議を爲すを望む」の意を示せり、嗚呼我等は皆な更に慘惡なる運命をこそ期待したれ斯の如き事のあるを豫期せざりき。

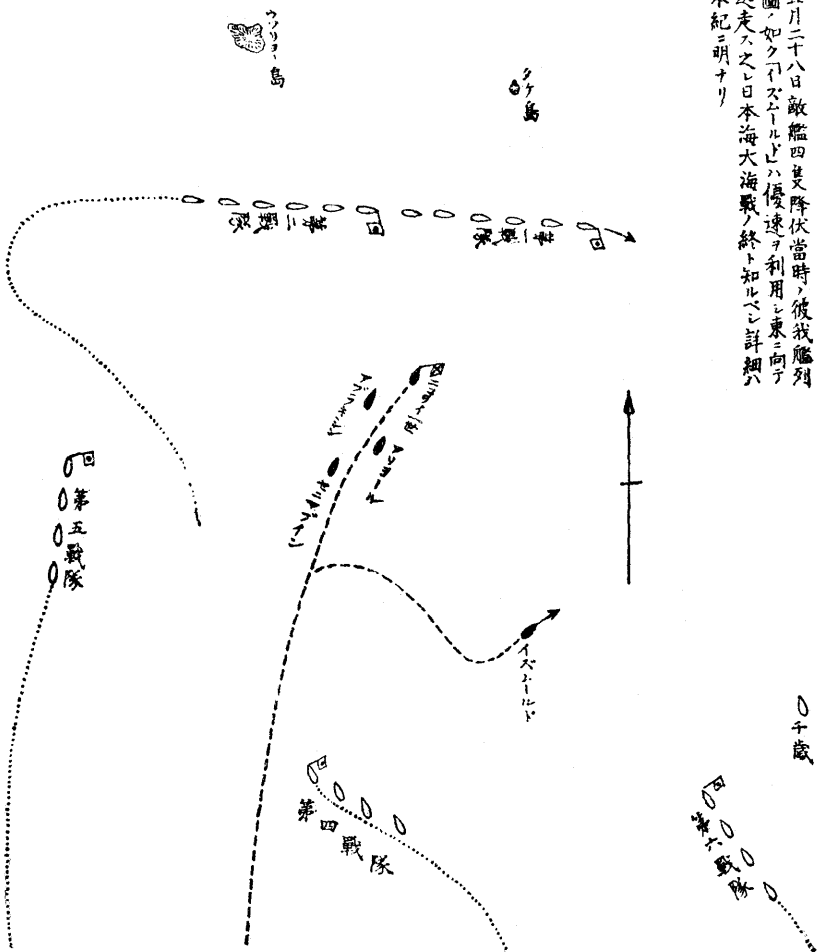
(三十一) 殘艦降伏の情景

旗艦ニコライ一世は降伏信號旗を揚げられし時我等の船艦の上に起れる情況は實に言筆を以て盡す所にあらず、或者は茫然として起立したるまゝ一言も發せず或者は此の絶望的の打撃をうけて艦橋の上に倒れ小兒の如く慟哭する者あり或者は尙は膽力を持って艦長に向ひ或は詰問し或は勸告して信號を揚ぐ可らず命令に従ふ可らずと主張し或は自ら爆沈す可しといひ或はキングストンを開く可しといひ又は進みて戦闘を開始す可しと言へり、艦長は諸人の願望要求を手を以て制しながら答へて曰く降伏を爲すの不可なるは我等も能く是を解せり左れど此の信號命令は苟も是れ我が提督の命令なり我等艦長たる者此の命令を奉せずんば敵はニコライ一世を砲撃すべし云々と、此の争論の間に兎に角に信號旗は翻へり船橋の上の争論は是れ日本艦隊の砲彈の飛來する下に演ぜられたる悲劇なり、日本艦隊は我が旗艦に降伏旗を掲げて後ち尙は五分間程砲撃を續けたり。イツムールドの橋頭には既に同様の信號翻り居りしが同艦は俄に氣附きし如くに其の信號旗を引き下ると同時に全速力を出して敵艦の見え

ざる唯一の遁路なる東方を指して驀然航走せり、日本艦隊はイツムールドの遁逃を認むるや二隻の巡洋艦は艦隊を離れてイツムールドを追撃せり左れど同艦の速力は敵巡洋艦の速力よりも優強なりしかば忽ちにして地平線より隠れたり、信號は既に掲げられ又是に對する各艦の答信號も掲げられ今は一般乗員皆信號の意を解せり艦長に迫りて其命令を奉ずる勿れと勸告したる士官等の或者は全く絶望して周囲の出来事には更に頓着せざるに至れる者も多かりき、凡て是等の事は是れ僅に二三分間に出でし事なり其後殆んど機械的に先づニコライ一世自ら日本の國旗を揚げ續て諸艦も同様に日章旗を掲げたり、是に於て日本艦隊は其の砲撃を中止して徐々と我れ等に接近し來れり。我が將校中尙ほ幾分のイナーダーの閃光を心中に遺留し得たる者は此の際如何に自ら處す可かりしを水兵中より忠勇なる快男兒を糾合して一揆騒擾を企て船艦を占領して之を爆沈し得ざりしに非ざる可し左れど元來規律と服従とを以て律せられたる士官中には斯の如き決意に賛成して一揆を企つる者ある可しと思はれざりき又密かに自ら謀りて其の企圖を何人にも告げずに秘密に戦闘艦を自爆沈没せしめて之を豫期せざる全艦員を滅亡せしむるの決心を懷きし者もあらざりき、若し當時何事を爲すも既に遅しとの思念に惱殺せられざりしならんには或は此の事行はれざりしにも非ざる可し此の降伏の當時降旗と日章旗とが我が艦の橋頭高く掲げられしは、是れ實に我等の如何ともす可からざる耻辱が我等の頭上に落下せるものなる事を皆な信じたる時なりしなり、左ればこそ此の時何等の企圖を爲す者もなかりしなれ余は確信す否な獨り余のみならず戦闘に参加して降伏艦に在らざりし他の士官等も皆な余の如く確信せしなる可し、即ち若しニコライ一世、アリヨール、セニヤウイン、アフラキシン乗組の百二十名の士官



五月二十八日敵艦四隻降伏當時、彼我艦列圖、如クイツムールドハ極速ヲ利用シ東向テ逃走ス之レ日本海大戦ノ終ト知ルベシ詳細ハ本紀ニ明ナリ



の代りに艦隊の他の諸艦の百二十名の士官をして同一境遇にあらしめたりと假定するも此の場合には全く同一の處理に出るより外他に施すの策なかる可き確信する者なり、左れど艦長の行動に關しては同一に言ふを得ざる者あり如何となれば假令一人たりとも艦長中に提督の命令を奉せず返答信號を爲さずして或は自艦を爆沈するか或は戦闘を開始する者ありしならんには他の艦長も亦必ず其れに激勵せられて同一行動に出でたるやも識る可らざるを以てなり。

(三十二) 提督の降伏談判

朝十時二十分頃遂に降伏は行はれ十一時頃我がネボカトフ提督は日本艦隊の旗艦に赴きたり、此の間に我が諸艦にては急ぎて地圖其の他の秘密書類を焼棄し又は備砲の要部を破壊せり。此の時ネボカトフ提督の取り得べき策は尙は一にして足らざりき提督は時機を計りてキングストンを開く事を命じ一艦にても日本に渡さざるの策を取り置きて其の艦の沈没せんとする際に艦員救助を日本艦隊に謀る事をも得たるに非ずや、況んや此の艦員救助はネボカトフ提督投降の唯一の理由なりしに於てをや日本人も其の義侠と人道とを全世界に示さんと希望より沈溺者救助に同意したるや疑ひなし。若し我が提督ネボカトフは日本の旗艦に赴くの途中に於て一千八百八八年に時の我提督セニャウインが我が諸艦を英人の保護に附したる有名なる歴史を懐想したりしならんには、我信號は敢て無條件の降伏を意味したるに非ずして「商議を爲さん事を望む」の意なりしを以て日本人に對して我が諸艦の爲めに最も有利なる條件を收得するを得可かりしなり況んや其の商議の際にネボカトフは若し提供せる條件の

入れられずんば我諸艦は提督の歸艦を待たずに一定の時間を経過せば直に砲火を開き且つキングストンを開きて諸艦を沈没せしめて日本人に渡さず兎に角に自艦に大破壊を行ふ可しとの事を提言せば必ず我に取りて最も有利なる條件を所得したるに相違なし。我等最多数の士官は此の降伏を以て無限の耻辱と爲し寧ろ絶望的の戦闘こそ望むなり若し士官等に宣誓の上に露國に歸還し得る事と俘虜となる場合には帶劍を許すの一條件を除かんか日本の旗艦に赴きたるネボカトフ提督は全く何事をも協商せざるも同様なりき、且つそれ折角收め得たる此の二條件さへも後には全く空文に歸せられたり即ち宣誓の上にて歸國を許すとの條件は我が露國政府の爲に否認せられ我が政府は降伏の將校等に宣誓歸國の事を禁止せり、次に俘虜となる場合には帶劍を許すとの一條は日本の履行せざりしが爲に空文に歸せられたり此の外にネボカトフ提督は今一箇條俘虜待遇の事を申出たるに却て侮辱せられ日本が俘虜を優待するは勿論の事なりと言はれたり、兎に角に此の談判が結了するや否や我が露帝國の軍艦の甲板上に整然と武装せる日本兵は肅々として乗艦せり次で我が各艦長は提督の許に召集せられ間もなく露帝國の海軍々人なる我等は敵の俘虜として日本の船艦に移乗せしめられたり。

我等敗残の一艦隊は一度は北緯卅六度五十六分東經百卅一度四十六分に近きダゼント島(嶋嶺)附近迄航進せり同嶋より浦鹽迄は僅に約三百哩を殘せるに過ぎざりき、我等は此の遠洋航海に不適當なる装甲海防艦を艤して既に一萬五千哩を東航し而も是等の諸艦を以て勁敵に衝り既に百餘年來人々の未だ見聞せる事無き程の大激戦に参加して凡ての困難を経たり左れど纔に残れる此の最後の三百哩の航程を達するを得ざりしは實に我等の運命なりき、且つそれ我等は我等の凡ての奮勵凡ての忍耐の賞典

の代りに運命は我等に終生忘るゝ能はざる一大耻辱を與へたり噫天運なる哉。

(三十三) 無限無量の耻辱降將の衷情如何

我が艦隊の將校が俘虜となりたる後にネボガトフ提督に向ひて提督をして投降の舉に出でしめたるは如何なる動機より茲に至れるやを問ひたる際同提督は是に答へて左の如くいへり、曰く昨日の激戦に於て我等の悉くの不利敗衄を見且つ此の上優勢なる敵と戦ふも到底敵に對して有効なる損害を與ふるを得ざるを認め投降せざれば遂に何等の利益も爲さずに滅亡するを免れざる二千人の生命を救ふは余が義務なりと確信したるが故なり、云々と余は我が提督の此の言の眞實なるを疑はず且つ余は提督が投降を敢て爲したるは決して自己の怯懦より爲したるにあらざるを信ず、如何となればネボガトフ提督は既に老齡病軀の人にて必ず老提督自らも餘命久しからざるを知り且つ身に責任重き要職を帯びながら斯の如き耻辱なる投降を爲したる爲に社會に其名譽を汚損し非難攻撃を被ふるを免れざる可きは老提督自ら認めたる所なる可きを以てなり、之を五月二十七日の戦闘に徴するもネボガトフ提督は決して自己の身命の安全のみを慮れる人に非ざりし事明かなり左れど我等の聞かん事を欲する問題は左の一點に在り曰く、斯の如き場合に我が提督の如くに大膽なるは寧ろ是れ其の時の境遇不相應の大膽に非ずや我提督は多數乗員の生命を救ふと同時に我が海軍の名譽をも救ふ事を得ざりしか、との問題これなり。左れど自ら確信する所を以てすれば我が提督は決して我が海軍の名譽を全うするを得ざりしには非ざりしなり、日本艦隊が我等に對して砲火を開く十五分前に敵の諸艦隊は既に我等を四方

より包圍し我等は今や如何なる敵と相對せざる可からざるやは既に全く明かになれり若し我が提督は既に斷然交戦するの決心なかりしならんには此の時信號を掲げて諸艦を沈没せしむ可きに非ずや、而して日本人は射程距離内に來航するや彼等は海上に浮沈漂漾し居る我等を認むるは敢て難きに非ざるを以て必ず之を救助するに相達なし、ネボガトフ提督はかの惡運なる信號を揚げたる際にて此の信號の代りに艦船自爆の命令を下し得ざりしには非ず、此時沈没せしむるとも優に過半の人員を救助するを得たるなる可し救助の方法は救助帶救命環吊床その他種々の浮流に堪ふる器物を以てせば其の方法決して尠なからざりしなり多くの人員は沈没艦の浮流器物に縋りて漂ふを得可く其の後の問題は日本人が彼等を救助し呉るゝや否やの一事にあり我が提督は此の事に關して其の一例を自らリーリツクの沈没に就きて見出すを得べしリーリツク沈没の時には日本人は能く其の敵兵を救助せり今我等の沈没の際には彼等之を救助せざる可しとは提督も想像するの根據を有せざるに非ずや、勿論我が若干船艦の沈没の際せばスワロフ、ナワリン、スウエテラナ、カムチアツカ其の他驅逐艦ブレイチヌイ等の沈没の際には日本人は其の沈溺者に救助を與へざりき左れど是等の場合には敵も我が諸艦が悉く沈没するものとは認めず一艦を撃沈せしめて更に他艦の攻撃に参加援助を與へざる可らざるを以て救助を與ふるを得ざりしは勿論の事と思はざる可らず、左れどネボガトフ提督は敢て未だ是等の事情を識れるにも非ざれば之を以て自己の判斷を定むる根據とは爲すを得ざりしなり若し諸艦を沈没せしむれば最初には必ず數十名の溺死者を出し第二回目にはその二倍或は三倍の溺死者を出す可きは勿論なり、彼等は我海軍の軍艦旗の名譽を全うするが爲め死す可く我が四隻の船艦中には耻辱なる投降より

も寧ろ死を重んずる者決して尠ならず且つ此の數十名の人々の死亡は之を前日の戦闘に於ける敵千人の犠牲に比すれば是れ何等の意味を有する者ぞ、斯の如き言辭は多少殘酷に聞ゆるやも知れざれども而も戦争そのものが既に甚だ殘酷なるものなれば戦争の問題を論ずるに當りては須らく事柄を人間の生命といふ思想より離して人間を以て一の數と視做して計算せざるべからず。我が提督は餘りに甚だ大膽なりしに非ざるか且つそれ旗艦の艦長その他多くの幕僚と評議し種々意見の提供と相談とを受けて然る後に投降を爲す可しと決意し斯くて提督は此の投降を欲せざる者をして既に策の施す所なき様に萬事を成立せしめたるなり。

既に前にも述べたる如く投降の數分間前に提督は「戦闘準備」の信號を揚げて先づ我等をして我等如何になるとも兎に角に戦はざる可らずと諸人をして信せしめたり、此の時既に各士官は各々自己の部署に散在したるを以て投降の信號あるも各艦の士官等は至急に評議を爲す事も得ざりしなり只だ返答に過ぎざりき、我等は困急し且つ斯の如き不意の事に遭遇せるも尙未だ其の精神を自失せしむるには至らざりき、旗艦の橋頭に既に投降信號旗の懸へされて後にニコライ一世の艦上に各士官の會議を催されたり而も此會議に加はりたる者は士官の半數にも満たざりき、殊に此評議の際に投降に反対したる者もありしかば提督は之を制して彼等に向ひ「萬事余自ら責任を負ふ可し」云々と告げて彼等を慰撫し且つ司令長官の權威を以て彼等を沈黙せしめたり。

斯くて日本艦隊が砲撃を止めたる後は我等皆な戦艦を敵に渡すも敢て耻と爲すに足らずとするも我が露帝國の軍艦の橋頭に投降旗と日章旗とを併せ懸すは實に無限の大耻辱なるを感じ皆な絶望して敢て艦長に抗争せんとする者もあらずりき。

(三十四) 日露の戦術比較

對馬海峡大海戦の結果を攷ふるに日本艦隊は我が艦隊に比すれば其の射撃の的確にして優秀なりし事を示し、且つ日本艦隊が能く海戦々術の重要原理を確守したるは此原理を全く無視したる我が露國艦隊を撃滅したる所以なる事を證せり、日本艦隊は偵察任務も亦最も完美に行はれしかば我が艦隊が黃海に入りたる當初より我が艦隊各艦の一舉一動は悉く敵の識る所となれり、次で我が艦隊の朝鮮海峡に接近するや敵の巡洋艦は我が艦隊の傍側に現はれたるも我が司令長官は之を驅逐し之を妨礙するの必要なしとせるものゝ如し、日本の主力艦隊は此の巡洋艦の無線電信に依りて我が艦隊の編成位置陣形並に一分時毎に我が艦隊の運動如何を一々報告に依りて之を識り得たりしなり日本巡洋艦の偵察任務の狀況斯の如くなりしかば日本艦隊は「敵の不意を突撃する」の原理に應じ我等の最も不利なる機會に乗じて最も巧に我が艦隊を激撃するを得たりしなり、即ち日本艦隊は我が艦隊が戦闘に最も不利なる陣形——二列梯陣を將に變改せんとする刹那に其の機を逸せず突進し來りて我を要撃せり然るに我が艦隊にては前に述べたる戦争の經過に之を徴するも偵察任務に最も適したる船艦乏しからざりしに關せず如何なる理由にや何等の偵察をも爲さざりき、我等は常に敵の不意を撃ちて彼等を驚かさざりしのみならず日本艦隊は何處に在りて如何なる戦闘力を有するやを全く識らざりき且つそれ余は前に

も述べたる如く日本の偵察艦が我等の事情を通信するを我等は恰も故意に之を妨げざりしが如き感なき能はざるものありき。

日本艦隊は交戦中始終その砲火を我が艦隊の先頭艦に集中せんことを努め且つ自らは我が艦隊の後續諸艦の砲火が日本艦隊の先鋒諸艦に容易に達し得ざるの間隔を持って交戦せり、日本艦隊の速力は非常に優勢なるを以て斯の如き運動を爲すは彼に取りて左まで難事に非ざりしは勿論なり而して日本艦隊は此の戦闘力集中の原理應用を戦闘の始めより終極まで能く守持し且つ當日の海霧のある天氣の許す限り我が艦隊より遠離して二十五ケーブル以内には接近せざる様にして最も巧妙なる運動を爲せり。然るに翻て我が艦隊を見れば其の戦闘力は戦闘開始の時より既に分散せられ巡洋艦は何れも運送船擁護の任に當りしを以て艦隊戦に加はるを得ざりき、又戦闘力を分散せる我が艦隊は全艦隊を統率する先頭艦が始終敵の反方向に轉じて先頭艦に對する敵の砲火集中を避けん事を努めたるも敵は其の高速力を利用して我が先頭艦に對して忽ち以前と同様なる至利の位置を占め我が艦隊は始終敵の壓迫を受けたり、只だ一度戦闘の際に二時五十五分頃旗艦スワロフに代りて艦隊を率ゐたる戦闘艦ポロチノが敵艦隊の方に向て左舷に廻轉し他の諸艦も亦ポロチノに従て左舷に轉じ全戦闘力を日本艦隊の後續諸艦に集中して之を威迫せんと試みたる快事ありき、然るに日本艦隊は之を避る爲に先づ主戦艦廻轉し續て其の巡洋艦隊も共に一齊廻轉を爲して又も我が航路の前程を横斷するの方向を取れり、此の時日本艦隊は戦闘艦ポロチノの行動憎しと思ひけんポロチノに向て猛烈なる砲火を浴せたるにポロチノは其の兇惡なる砲火に耐へ得ずして敵の主戦艦隊より廻避せんと欲して反對の航路に向ひ再び右舷に廻轉し後ち又殆んど反對の航路を取れり我が諸他の艦艇も亦ポロチノに従て航路を轉じ斯の如くにして我等は二十四ケーブルの間隔を持って敵艦隊より逃避せり。

(三十五) 艦隊司令權の真相

若しそれポロチノが最初に決行したる運動は臨機に應へる甚だ良好なる運動なりしを以て同艦は其の儘航進して航路を轉ずる事なかりしならんには、日本艦隊は全艦隊一齊廻轉を爲すも彼の高速力を以てするとも到底我が前程を横斷壓迫するの位置を持つるを得ざる可きや明かなり我が艦隊は日本艦と衝突せんとする如き航路を取りて驀進せんか若干時の後には日本艦隊と僅々數ケーブルを隔るに過ぎざる間隔に接近するを得べかりしなり、若し斯の如き事態に至らんか日本艦隊は忽ち其の特長とする點を全く失ひ其に反して裝甲防禦不充分にして又遠距離射撃に適せざる小口径砲を多く有する我が諸艦は忽ち有利至便の位置を占むるを得べかりしなり、加之斯の如き近距離に於て敵艦に對して破壊的の砲撃を逞うするを得べきのみならず我が諸艦は更に進みて敵の艦隊の中に突入して敵艦と相混するを得可きを以て弱勢なる我に取りては日本の諸艦よりも幾多至便の好機會を捕捉し得たるやも知る可らず、之を要するに此の大海戦に當りては我の取る可き戦術は凡ての機會と敵艦隊の凡ての失策に乗じて出來得る丈敵艦隊に接近接觸する航路を取る可かりしなり。余は又茲に戦闘の結果の上に必ず大關係を有したるに相違なかりし一事件を記憶せざるを得ざる者あり其の事件とは他なし彼の上海沖に於て最後の石炭積取りを爲したる時に我が艦隊司令長官は豫め命令を與へて左の事を警告せり曰く、

戦闘の際に艦隊の先頭艦たるスワロフが艦列外に出でざるを得ざる事ある場合には艦列順序に依りてスワロフの次に列する艦は艦隊の統率に任じ且つ艦隊の行動を指揮す可し其の艦が列外に出る時は順位の艦その統率指麾の任に當る可し、と然るに我が各艦の司令塔は船艦の操縦を司る爲に中に入り居る士官を擁護するよりも寧ろ彼等を死傷せしむるに適せる如くに構造せられあるを以て戦艦の指麾に任ずる司令官並に士官等の死傷甚だ迅速に相次ぐを免れざりき、故に敵艦隊より砲火の集中を受け砲彈雨注の下に在りて戦艦を指麾する先頭艦の司令権は順次甲より乙に乙より丙に轉々移るを免れざりしを以て戦闘開始後暫時にして先頭艦を指揮し従て後續全艦隊を指導する司令権は遂に經驗に乏しき若年の少尉候補生若くは機關士候補生などの手に轉移して斯の如き者が大艦隊を司令する如き奇怪事あるを免れざりき。

日本艦隊は又各艦相互の援助といふ戰術原理を忘却せざりき左れば我が巡洋艦の擁護の下に在る我が運送船が日本の小巡洋艦に攻撃せらるゝを以て彼等日本人は我等が運送船の方に轉せんとするを認むるや忽ち彼等は裝甲巡洋艦の一隊を分遣して其の二等巡洋艦に戮力せしめ彼等に接近せる我が艦隊に對して一致の行動を爲せり。然るに我が艦隊にては全く此に反對なりき廿七日の夜に殘存艦隊の先頭に在りしニコライ一世も敵の水雷攻撃を受けたる際にネボガトフ提督は各艦相互援助の戰術原理を全く無視して之を守らざりき、斯の如くなるを以て我が諸他の友艦が前日の戦闘にて損害を受けて到底ニコライ一世に續くを得ざるにニコライ一世は其に頓着なく高速力を出して疾驅せしがば他艦は漸次ニコライ一世に後れ單獨になりて敵の猛烈なる水雷攻撃に遭遇せしかば遂に水雷の爲に艦體を破られ

或は進航を止められ或は水雷艇の犠牲となり遂には間もなくして數隻の敵連合船艦の包圍する所となりて撃沈せられたり、斯の如くして第一着にシリイ、ペリキイ、ナワリン其の運命に陥り次でウシヤーコフも亦同様の運命に遭遇せり唯ナヒモフのみは未だ諸他の友艦と同列に在るの際に接近し來れる敵の水雷艇を見誤りて自艦隊の驅逐艦なりと想ひし爲に遂に水雷の命を受けて艦體を破られたるなり。

（三十六） 砲員の養成如何

我が艦隊の射撃の拙劣と戦闘開始前及び戦闘の際の無智なる行動と其他の誤謬缺陷等は皆な是れ共に我等をして此の恐るべき殄滅に陥らしめたるものにして是れ我等に取りては辛酷なる教訓なり、左れど將來に對して何等かの利益を與ふ可き一切の經驗と教訓中此の對馬海戦程我等に取りて大なる經驗と教訓とを與ふるものは非ざる可し、余は既に前段にも論述したるが如く海戦の戰術の原理の動かす可らざる所以と其の原理が如何に戦闘の結果に重大なる關係を有するものなるかは特に對馬海戦に於て余に幾多の問題を解決するの光明を與へたる者あるを以て余は茲に其の重要なるものを論述するの義務あるを認むるなり。

第一に最も重要なものは言ふまでもなく射撃問題なり、平素最も實戦に近き幾多の境遇と事情の下に實驗を得せしむるの目的を以て人物養成に全力を注ぎ以て卓越せる砲員を養成し待たる艦隊に非ずんば將來の海戦に成功を期するを得ざる可し、若し海軍に於て勤勞と資力とを措まずに強く精確なる

照準を定むるを得る砲員を養ひ各員能く自己の管掌する備砲の性質如何に精通せば是れ海戦に於ける勝算の半ばは既に保證せられたる者なり。

我が露國に於ける砲員養成と其の就職の状況とを見るに其の練習も在職も少しも連續せざるものあり砲術の教育を得る爲に射砲練習隊に入學する者は更に實戦に近き間隔の射的を實習せず又その學校に於ては高速力を以て航走する船艦備砲の中口径大砲の大砲の射撃を更に教習せられず、其の學校にて學ぶ所は現今の船艦には既に備へ居らざる舊式大砲の射的は屢々教習せられ斯くて射砲練習隊の教育を終るや直に現今の新式大砲を有する軍艦に就職を命ぜらるゝなり、而して新式戰艦若くは新式巡洋艦等の乗組を命ぜられて多少の時日を送り後ち又屢々アチャ、子ドヨンメニヤの如き舊式軍艦に轉乘せらるゝ如き事ありて後には大砲の射撃を爲さざるを以て前に學び得たる砲術も半ば忘却するに至るなり後ち其の砲員が又も乗組艦を變更せられて更に大砲の射的を爲さざる如き船艦より新式軍艦に轉乘せしめられて内海若しくは外國の航海を命ぜらるゝ如き事あれば殆んど退職の期に近づきて再び先きに練習し得たる砲術を想ひ起すなり、斯くて其の砲員が豫備役に入れば砲術の智識を已れと共に郷里村落に持ち行くも其の砲術は彼の爲に何の用にも立たず彼の機關を専門にせる機關兵の如きは退役後に却て生活上に大なる利益を得るに反して砲術を學びし者は一生の不運となるなり、左れば乗組變更——例せばスラワよりベレワエ子ツに轉乘しトリヨフ、アクスウヤテリよりペンデラクリヤに又は十二吋砲を有する軍艦より舊式の四フント砲或は三連式機關砲などを備ふる軍艦に轉乘せしめられて遂に往々二年も三年も砲員が全く射的を爲さずに過ぐる如き事あらんか充分教育せられたる

も其の技倆を失ふに至る可し砲員の在職は通例何時も斯の如き有様なり、射砲練習隊卒業後に或軍艦の備砲管掌の職に就きて在役中始終その備砲に職に當らしめらるゝ者は甚だ少數にて斯の如き事は軍艦が海外派遣を命ぜられたる場合に往々あるに過ぎざる而已若し或大砲の砲員中に技倆拔群照準も射撃も秀越せる理想的の砲員ありとするも軍艦に於ける職務の位置は彼をして永く自己の特に長じたる照準士などの職に在る事を許さず或は豫備役に編入せらるゝか或は學術優等なれば下士掌砲手に任せられ斯くて其の者は下士教官の職を取るに至るを以て爾後少しも照準などの事に自ら任せざるに至るなり。

砲員養成に當りて最も眞摯なる注意を拂はざる可らざる一事は其の砲員たる可き者をして實地に實戦に近き事情條件の下に實習を得せしめ自艦並に目標たる敵艦の間隔と速力とを精確に測定する事を學ばしめ砲員をして大間隔と高速力の間精確に射撃せしむるの技倆を養成せしむ可きと是れなり、且つそれ砲員が實戦の際に射撃す可き新式砲の射的を實習せしむる爲に備砲中の何れか一を選択せしめて専ら其の砲に就きて教習を積ましめ其の砲に對する専門的の技倆を有せしめ其教習を終りたる後も同一式の砲に當らしめて在役中は専ら其の砲を擔當せしむ可し、若し其の備砲を何等かの必要に應じて他艦に移す事ある場合には其の砲員も亦出來得可くんば其の砲と共に他艦に移乗せしむ可し、各砲員は毎歲必ず出來得べくんば自己の擔當する備砲の射的を爲さしめざる可らず若し其の軍艦が航海を爲さずんば兎に角に同一口径砲を以て射的を爲さしめざる可らず除隊になる可き砲員中に若し技倆優れたる者あれば特に大口徑砲の照準兵は必ず再役せしめて其の者の擔當し來れる備砲を續て擔任せし

む可し其の砲員を再役せしむる爲には勿論俸給の増額或は下士昇進等の特待法を設け兎に角に其の備砲の許に砲員を止むる事を圖らざる可らず。斯く論せば論者或は曰はん是れ莫大なる經費を要する事なりと然し經費云々の考慮は我等全く之を排けざる可らず大砲は是れ實に一の機械なり何人にも効用著しき機械を所有する時其の機械の供給し得るだけの利益を得んと欲せば其所有者は年々其の機械の修理その他の爲に相當の經費を支出せざる可らざるは是れ何人も承知する所の事ならずや。

(三十七) 戦艦構造注意

海軍人物の養成に論及したる序に尙ほ余は一事の茲に記憶せざる可らざる者あり、我が海軍士官等は海軍の事を論ずる學者が屢々忠告するにも關せず彼等は海軍艦に乗りて航海し居りても其の大軍艦を操縦する事に就きては更に一も學ぶ所あらざるなり、彼等が若し大軍艦操縦の事を教習せりとせば其は甚だ稀有なる偶然の場合に過ぎざる可し我等は決して斯の如きを以て満足す可きに非ず彼の「マカロ」提督は其の著「戦争の記念」に戦術を論ずるに當りても海軍士官をして軍艦操縦に習熟せしむるの最も必要なる所以を論述せり、然るに我が海軍にては此の事に就きて何等の方針をも立てず我が海軍の船艦に於ては士官に對して何等系統的に組織したる軍艦操縦の教育を未だ曾て與へざるなり。左れば彼の對馬海戦の際に最も多く敵弾を受けたる我戰艦にては其の艦長は忽ちに死傷して戦艦操縦の指揮權は順次その次位の將校に與へられ其の將校は假令戦艦操縦の教育ある者にも勿論艦長たるの技倆を有する者は甚稀なり、此の場合に當りて既に記述したる如くロゼストウエンスキイ提督の命令に依

りて艦長が死傷して順次に下位の士官が指揮權を有するに至れば戦艦操縦に相當の教育なき者が獨り自艦を操縦するのみならず其れに續航する全艦隊までも指麾する次第なり。

次に余は戦闘材料の事に就きて一言す可し余自ら親しく觀察し且つ他艦の將校に質して茲に最も注意す可き一事を明かにせり、即ち我が戦艦の装甲防禦の箇所には一箇所も敵弾の貫通を受けしものなかりき是れに依りて砲弾は装甲に勝つを得ざるの近世の學理を再び立證したる事是れなり。既に前にも記述したるが如く日本の砲弾は其の炸烈して猛威を逞うするや無數の弾片を四邊に飛散して我が備砲を破壊若くは割裂し且つ常に幾多の死傷を出せり、其の恐る可き威力は忽ち大火災を起す事これなり故に戦闘を目的とする現今の戦艦には唯木造端艇及び諸般の木製部分のみならず以前は敵弾防禦の用に供せられたる吊床の類の如きも忽ち燃焼するを以て何等か他の不燃料物を以て是に代へざる可らず或は又是等不燃料物は戦闘開始前に敵弾の達せざる防禦甲板の下に是等の物を藏さる可らず。

今後戦艦を塗るには出來得るだけ何等かの不燃料物資を選びて塗色せざる可らず(斯の如き不燃料塗色を坊間に得る事決して難からず)且つ不燃料塗色を新に用ゆるに當り舊來塗りある下地を充分に剝落せざる可らず然らざれば從來の厚く塗り固められたる油料の塗色は容易に燃焼して火災蔓延の原因となる可し又日本の砲弾は其の猛烈炸烈するや非常の瓦斯を發するを以て若し敵弾が閉塞せられある場所にて炸烈せんか其處に在る者はその瓦斯の爲に忽ち窒息するを免れず、故に戦闘中に閉塞せられある乗員の居處や砲臺内の如き場處には必ず強き電氣の旋風器を設備せざる可らず、次に將來の造船上大に注意す可きは吃水線より遙か上方に在る砲臺並に甲板の排水溝の構造を完全にして防火の際に

艦内に注ぎたる水が此の排水溝に流れ集る量甚だ多量なるを以て其の水量が充分完全に此の排水溝より流れ去りて其處に溜滞せざる様に構造せざる可らず多くの我が或戦艦の如きは此の排水溝の完全ならざりし爲めに火防の爲に艦内に灌注したる水が一方に溜滞して戦艦轉覆の原因を來し遂に戦艦を滅亡せしめたりと云へり。

（三十八） 露國軍艦の缺陷

余は是れより戦艦の武装に就きて一言せざる可らず先づ第一に我等の注意を要するは測遠器の据付是れなり、我が諸艦の測遠器は戦闘の際に自艦の射砲の震動と敵彈炸裂の震響等に依りて屢々その位置を歪せたり故に其の結果同じ目標に對する間隔の測定が二箇所の測遠器の示す所互に相違して一方が四十八ケーブルを示せるに他の一方は僅に三十ケーブルを示せる如き事ありたり、且つそれ現今船艦に應用せらるゝストルド氏式バルロ式其他の測遠器は實戦の場合に必要とする大間隔を測定するには精確を缺くものあり又是等測遠器は何れも無防禦の所に露出して据附けあるを以て今回の戦闘に於て遭遇せる如く敵彈の集中を受くる戦艦に在りては忽ち敵彈碎片の爲めに破壊せられて既に開戦一時間後には効力を有する測遠器は一基も存せざりき。斯の如き事情なるを以て測遠器の据附けある場處より戦闘の際に音聲電話喇叭等を以て測定の距離を各部の備砲に傳達するは甚だ困難にて時としては全く傳達を爲し得ざる事さへなきに非ず故に測遠器の形を多少變更してなりとも各部の砲塔に一箇宛測遠器を据附くる能はざるかとの考なき能はず、且つ各砲塔に測遠器を据附くるに當りても砲塔の内

部に据附けて測遠器の柱脚をして砲塔と平直ならしめ測遠器は砲塔の傍側より少しく出で居る様に爲さば如何にや、若し測遠器を斯の如く据附けなば此の測遠器は目標に對して砲塔と始終平直の位置に在り又厚き鋼鐵の防禦の中に在り且つ長き柱脚を有するを以て甚だ正確に距離を測定するを得べし又各砲毎に其の正確なる測定を其の場に於て爲すを得る等の幾多の特別なる利益あるに相違なし。

我砲艦並に照準の事に就きては前にも既に論述せり左れど尙は爰に一言せざる可らざる者あり即ち我露國に於て現今用ひ居る砲彈並に信管裝藥は全く根本的に之を一變せざる可らず、又照準鏡は其の器械を改良完全にして發砲の震響の爲に大砲に對する其の位置を變せざる様にせざる可らず、尙大砲の事に關して一言を加へざる可らず、戦闘の際に砲塔内に豫備の爲に砲彈を積み置く如きは非常に危険なり敵彈命中の際に其の破裂彈片が窓より侵入して我が砲彈を爆裂せしめ或は砲塔内に全砲員を悉く粉碎し或は特に大口徑砲を破裂し砲塔全部を爆破崩壊するが如き事あり我がスワロフの艦尾の十二吋砲塔は全く斯の運命に遭遇せり、又アリオルに於ても若干の六吋砲塔に在りし砲員は敵彈の碎片が我が豫備砲彈を破裂せしめたる爲に燒死せる者ありき。

（三十九） 砲員防禦——水雷攻撃

我が各艦の司令塔の妄慮極れる構造と其より生じたる結果に就きては既に再三論じたれば此の問題に關しては別に改めて論ずるの必要を認めず、砲盾問題に關しては對馬海戦に徴すれば各備砲の防禦盾は最も緊要なるものなる事を證明せられたり日本の砲彈飛來して我が備砲の附近に於て炸裂するも飛

散する其の彈子は我が備砲の防禦盾を貫通せざりしかば盾の中に在りし砲員に損害尠なく曝露せる處に在りし者には最も多く死傷者を出せり。

之を戦争の経過に徴するに我が艦隊にては戦闘の始めより終りまで一度も信號を爲さざりき是れ敢て信號を爲すの必要なかりしが故に非ずして信號を爲すを得ざりしなり、戦艦が指揮命令の信號を爲すを得ずとは甚だ奇怪なるが如くなるも其の事情を告白すれば左の如くなりき、戦闘始りて間もなく我が艦隊の各艦は何れも敵彈の爲に信號旗の揚索を悉く切斷せられたり且つ最も猛烈に敵彈の集中を被りたる旗艦に於ては艦橋の上に在りし信號士は敵彈の爲に艦橋の上より悉く射掃せられて信號を爲し得る者なかりしなり。

斯の如くなるを以て將來の造船は何等かの方法を講じて信號士を防禦保護せざる可らず、是れが爲には浦鹽巡洋艦隊の將校等の考案なる司令塔構造（司令塔の横の方に防禦せられたる信號士の居處を設くる設計か）の設計は最も便利なるべしと思はる又信號法の事に就きては長き繩索にて信號を揚げ或は司令塔その他の最も能く防禦せられある場處より傳へらる、橋上の海上信號器を以てする信號法を一層進歩發達せしむる事に深く注意せざる可らず、

五月二十七日より同二十八日に亘る夜間の水雷攻撃に依りて余は水雷防禦に就きては全く左の事を確信するに至れり、即ち若し航進艦隊が敵の水雷攻撃に遭遇せる場合には非常止むを得ざる場合の外は決して探海燈を開く可らず或は全く探海燈を照す可らず唯だ水雷艇を砲撃する場合に於て之を確むる爲に探照す可きのみ、若し水雷攻撃を受くる戦艦が探海燈を以て水雷を探照するも纔に二三隻を照す

を得るのみにて其探海燈が偶々戦艦の所在を知らしむる媒介となりて他の多くの水雷艇を自艦に集中し諸方より蝟集し來る敵水雷艇は密に充分近距離の間隔に來て甚だ明確なる目標（戦艦）に對して水雷を發射するを得べし若し戦艦の方に何等の燈光も無からんには水雷艇は蝟集し來るを得ざるは勿論、非常の近距離に來るに非ずんば襲撃す可き戦艦を見出すを得ざる可し、又水雷艇は非常の高速力を以て航走する故水雷を發射するの遑なく通過し去る事もある可く或は其の緩急を失して水雷を發射し全く其の命中を誤る事も多々ある可し。

（四十） 旗艦の苦戦艦上砲彈の掃射

余は俘虜となりて憂き月日を日本に送りしこと半歳この間に同じく俘虜となれる我が艦隊の諸士官並に水兵等に就きて五月廿七日同廿八日の對馬海戦の際に他の諸艦の遭遇せる戦闘の状況を詳にするを得たり、對馬海戦の際に沈没せる諸艦の遭遇せる事情を記するは又多少の趣味なき業に非ざるを以て是等沈没諸艦の運命に關する幾多の材料を集め得たるを幸ひに少しく之を記述す可し此の事を記述するに余は各艦の艦列に在りし順序に應じて先づ最先頭に在りし我が戦艦の運命より其苦戦沈没の状況を記述す可し。

我が旗艦クニヤージスワロフは海軍大佐イグナチウス艦長たり旗艦は一時五十分に日本艦隊の先頭に在る戦艦三笠に對して卅二ケールの間隔を以て始めて六吋砲の第一發を發射し是れに依りて我が艦隊に戦闘開始の信號を與へたり此の時、日本艦隊は左舷廻轉を爲して我が艦隊と並行の航路を取れ

り我が艦隊は此の時二列梯陣より一列梯陣に其の陣形を變更しつゝありたり日本艦隊の諸艦は廻轉の際に一直線の艦列（即ち日本艦隊は露國艦隊に對して暫時眞向きになりて兩艦隊は丁字形を爲す）を爲したるも首尾よく廻轉して先づ三笠其れに續て他の諸艦も順次に砲火を開きたり、日本艦隊が應射を始めたるは我が旗艦スワロフが始めて砲火を開きて二分間を経たる後なりき日本艦隊は重に其の砲火を我が旗艦スワロフ其他の先鋒艦に集中せり日本艦隊の砲弾は最初若干の不着弾と次で若干の飛越弾ありし後は殆ど一發も漏なく我が先鋒艦に雨霰の如くに命中せり、旗艦スワロフに命中したる最初の敵艦は司令塔の近傍に轟然炸裂して司令塔の後方に居りたる信號技士コノトロフ其他多數の信號兵と傳令卒とを斃したり、次で一彈爆裂して巨大なる弾片は司令塔内に飛び來りて内に在りし二人の士官を斃せり其後ち同じく司令塔内に在りし海軍大尉オルナト並に海軍掌砲大尉ウラデミールスキイ等相次で負傷し何れも繃帶所に收容せられたり掌砲長に代りて旗艦の掌砲手その位置に立ちて操砲の命令を爲せり、スワロフより僅々約二十三ケープルの間隔に在りし最も近き日本の諸艦はスワロフに對して最も猛烈なる砲彈の集團を浴せスワロフは何等防禦の道なく事實的に艦上は敵彈の掃射を受け右にも左にも敵彈炸裂して火舌を吐き黒煙漠々たる中より灼熱して閃々たる火光を發する砲彈の碎片は四邊に飛び司令塔の内に在りし者さへ直立し居るを得ざる光景なりき、何れも躊躇して司令塔の窓より侵入する弾片の危険を免れ敵彈の附近に來たる瞬間を窺ふては其の頭を隠せり。

二時五十分に暫時右舷二點半の廻轉を爲せり此の時司令塔に在りし旗艦掌砲大佐ベルセネフは其の頭部に敵彈の碎片を被りて戰死せり、掌砲大尉ウラジミールスキイ繃帶所より來りて是に代りて指揮せり

左方の測遠器は敵彈の爲に破壊せられたれば右方の測遠器を以て是れに代へたり左れど間もなくして此の右方の測遠器までも弾片の爲に破壊せられたり。司令塔砲塔並に前部隆起甲板上に飛來して炸裂する敵彈は殆んど瞬時も止む時なく艦内の其處此處には既に火災起りて猛火將に全艦を包まんとせり。

（四十一） 艦旗猛火に包まる

二時十五分頃ロゼストウエンスキイ提督は輕微なる傷を負ひ佐官並に少尉試補シスキン其他數名も同時に負傷せり、日本の砲彈は愈々烈しく旗艦に集中して如何とす可からざる状況なりしかば艦長は敵彈を避くる爲に旗艦の航路を轉せん事を請へり、二時廿分にロゼストウエンスキイ提督は右舷四點の廻轉を命じて斯の如く實行せられたり（日本艦隊は露艦隊の左舷より壓迫し來るを以て露艦隊は右舷の方に廻轉して敵の威壓を避たるなり）此時ウラデミールスキイ大尉は再び負傷せり間もなくロゼストウエンスキイ提督は頭部並に脚部に負傷し次でスウエルベエフ大尉並に司令塔に上らんとしたるソトフ大尉等も負傷せり是より先き旗艦スウロフは喫水線下なる機關室に敵彈の貫通孔を受け旗艦が廻轉を爲せる際に舵機運轉の音響止み艦體は徐々と右舷に傾動して廻轉し斯くて反對の航路に轉せんとせり、時に司令塔の傍側には烈しき火災起れり。ウラデミールスキイ大尉は再び繃帶所より司令塔に來りて機關を操縦し戰闘艦をして以前の航路に復せしめたり此時、艦内各種の機械は敵彈の爲に多くは破壊せられ司令塔の電話も僅に一箇の満足に残れるものあると傳令管も残れるは唯だ一箇所のみ

なりしかば司令塔より此の一箇の電話機と傳令管を通じて戦闘艦を操縦する事なれば非常の困難に陥りたり。少時を経て旗艦スワロフは再び猛烈なる敵弾の集中を受くるに至り敵弾は上に下に右にも左にも炸裂して弾片彈子は暴風の砂礫を卷くが如くに飛散し司令塔内にて艦の操縦に任じ居りたるウラデミールスキイ大尉は三度目の負傷を爲しバクダノフ大尉代りて指揮の任に當りたり、三時十五分には既にスワロフの煙突一箇と中樑とを敵弾の爲に折られ艦尾十二吋砲の砲塔は全く破壊せられ其の掩蓋は内部より爆破せられしかば全く外部に轉覆せり、其の外にも多くの備砲は或は破壊し或は顛倒し艦内に入る處に火災は起り死傷甲板の上下に算を亂して横はり全艦の畏怖す可き光景と惡戰兇闘の慘狀能く言筆の盡す所に非ず、司令塔は既に破壊せられて用を爲さざるに至り今や戦闘艦の操縦は艦の中央部署に於て之を爲さざる可らざるに至れり但だ此の時幸ひなる事には漸次甚だしからんと期したる艦體の傾斜は次第に直り且つ機關も修理して運轉を爲すを得るに至れり。而も四時頃に到り火災は最も猛烈に且つ迅速に延焼して猛火は兩舷の備砲甲板に及びしかば其處に配備し置きたる七十五ミリメートル砲彈の藥袋を爆發せしめたり然し藥袋の爆發は左まで大なる破壊力を逞うせざりき乗員一同は必死に防火に奔走し居りしかば藥袋の破裂の如きは殆んど注意せざりし程なり、乗員はあらゆる手段を竭して防火に盡力したるも布製の水管は悉く皆な敵弾の爲に切斷せられたれば猛火は益々其の威を逞うして漠々たる黒煙と毒氣全艦に充ち且つ烈火の爲に恰も釜中に在るが如く右往左往に奔馳して消火に懸命なる水兵は非常に苦めり消火指揮の任に當りて殆ど全艦を包まんとする猛火と奮闘せる者はボグダノフ大尉なりき。

（四十二） 旗艦の最後

少時を経て敵の砲火が少しく緩やかになりしが旗艦スワロフは此の時既に恰も手足を切斷せられたる不具者と均しき状態となれり、左れど生存の人員は敵の砲火が静かになりても尙ほ勇を振ひて今は敵の性質こそ異なれ一水火と云ふ敵を相手に奮闘せり艦底より豫備の水管を出して防火に力を竭したるも漠々たる黒煙は艦内艦上に漲り甲板の上は殆んど左右を辨するを得ざる状態となりて器物は悉く皆な黒煙の雲にて覆はれ諸方に在る艦の鐵梯は何れも皆な敵弾の爲に破壊切斷せられたり、海軍大佐クラビエデコロングは右舷中央六吋砲々塔のある底部甲板に在りて音聲を以て中央部署に命令を傳へながら戦闘艦を指揮せり、ロゼストウエンスキー提督は二度目の負傷を爲したる後直に六吋砲塔内に收容せられ戦闘中始終其處に居られたり。(譯者曰く當時旗艦には敵彈雨注すると共に艦内各處に火災起りて何處にも安全なる所なく六吋砲塔内は装甲防禦の施しある場處なれば比較的 safety なりとして提督を此處に收容したりとの事なり) 四時半頃なりしが日本の四隻の水雷艇襲來して我がスワロフに接近せり、左れど敵水雷艇は其の小口徑砲より數發の砲彈を送りたるのみ此の時我が艦隊はスワロフの方に近きしかば日本の水雷艇急駛逸走せりスワロフよりは敵水雷艇に對して僅かに七十五密砲を發し數名の水兵は小銃を發射したるのみなりき而かも此の武器は戦闘艦の大砲の武裝の中より僅に残存したる唯一の大砲なりしなり此の時我が艦隊は最も近くスワロフの近傍に來れり又此の時スワロフの傍らに驅逐艦ブイヌイも接近せり左れど當時スワロフには我が諸艦が接近し來ると共に敵艦隊も亦接近し

來りてスワロフは又再び暫時の間敵彈の猛射集中を受けたり驅逐艦アイヌイはスワロフの舷側に到りてロゼストウエンスキイ提督と其の側に在りたる數名の幕僚とを移乗せしめたり、低部甲板の上には健在せるボクダノフ大尉ウイルボフ大尉並に旗手フオンクルセリ等を認めたり幕僚の一人はフオンクルセリと共に驅逐艦に移乗せん事を勧めたるも彼は自艦と運命を共にす可しとて頑として移乗せざりき、驅逐艦がその舷側を離るゝや旗艦スワロフは遠く我が諸艦を離れて殆んど孤獨の狀に陥り只だ其の附近には工作船カムチアツカ一隻漂蕩し居るのみなりき。

カムチアツカより救はれたる一水兵談に依れば夜七時頃なりしが數隻の敵水雷艇スワロフに迫り同艦に若干の水雷を發射せると見る間にスワロフは間もなく海中に消えたり、其の沈没は同艦型の友艦ボロチノ並にアレキサンダー三世等の如くに轉覆せずして其の儘沈没せり何故に斯く轉覆せずし沈没したるかは明言するを得ざるも想ふにスワロフは既に夕刻までには煙突も艦檣も艦上の諸部は悉く挫折崩壊せられ又は火災の爲に焼却せられて艦の上部は大に重量を減じ平素健在中は傾動の甚だしかりしもその臨終の際には傾動減じて水平の位置を保ち得たるは轉覆せずに沈没したる一原因なる可し、旗艦スワロフの乗員は大概皆な同艦と其の運命を共にし生存者としては提督並に其の幕僚と共に驅逐艦に移乗し得たる者僅々數名のみなりき。

(四十三) 乗員全滅の戦艦

戦闘開始の當初に旗艦スワロフの直ぐ後に續航したる戦闘艦アレキサンダー三世は海軍大佐ブフウオストフ艦長として戦闘の指揮に任じたる戦艦なるが同艦に關しては遺憾ながら何等の知る所なし是れ同艦は驅逐艦ベズウブレチヌイ同様に乗組の將卒全員悉く其の戦艦と運命を共にして滅亡せるが故なり、左れば是等兩艦の最期の情況はその乗組員と共に永遠に葬り去られしなり。

アレキサンダー三世は既に戦闘開始の當初多大の損害を受けたる如くなりき、二時四十分頃同艦が始て戦列を出でたる際に同艦には既に大火災の起れるを認めたり、アレキサンダー三世が戦列を離れて間もなく再び戦列に加はりて斯くも久しく奮戦を爲したるを以て考ふれば同艦が一時戦列を離れたるは敵より受けたる損害の爲めなりしや否やは甚だ疑はし想ふに同艦は此の時恰も旗艦スワロフの遭遇したる如くに舵機などに何等かの故障を來し忽ち之を修理し得たりしに非ざるかアレキサンダー三世の艦上に生じたる戦闘中の光景は旗艦スワロフの遭遇せるものは甚だ類似せるもの多かりき、夜六時頃にアレキサンダー三世が最後に戦列を離れたる時我が艦隊は偶々同艦の傍側を通過せしに此の時、既に無数の貫通孔を受け左舷の傾斜一時に甚だしくなりて大砲の砲口は舷側より水面に接して時々海水を摩し艦體將た覆没せんとせり左れど生き残れる乗員は尙ほ戦闘を爲すの精力と勇氣とを失はず少しも發砲を止めざりき且つ彼等は健氣にも遂に艦の傾斜を恢復して再び戦列に加はりたり。左れど同艦最後の奮勵も同艦臨終の死苦を永く續くるを得ざりき僅に半時間の後に同艦は又も傾斜して戦列を離れたり、司令塔の附近には烈しき火災起りて黒煙天に漲り此時セニヤウインはアレキサンダー三世に續きて其の後より航進したるがセニヤウインより同艦を望見するに艦橋の上には一人の將校も認めず僅に信號兵一人佇立し居りて彼は海上信號器を以て我が艦禍難に遇ふ」と信號せり乗員も今は滅亡

の近きを感じたるにや多くの乗員は前甲板の方に群集せり左れど忽ち急速に轉覆せしかば乗員の多くは何れも轉覆艦の下になりて海中に覆没せられキールを上泳ぎ附きて昇りたる者僅々十五名に過ぎざりき彼等十五名の者も其の死期の一刻を延ばし得たるのみにて間もなく溺沈せり。而して轉覆せる戦艦の内部に居りたる幾多の負傷者と健全者とが戦艦轉覆の際に如何に恐る可き苦悶の最期を遂げたるかは何人も知るを得ざるなり、機關にて撲たれ砲彈その他の重量物にて壓せられたる彼等は必ずや轉覆艦に浸入せる海水より上方に匍ひ出たるに相違なきも上に出づれば今は彼等の爲には恰も天井となれる甲板に突當りて其處に行き詰り半ばは疵の爲めと半ばは空氣缺乏の爲めと又艦内に進入せる海水とに溺死せしなるべし。

（四十四） 勇敢なる艦長

戦艦ポロチノの乗員九百の將卒中より如何なる不思議の運命にや萬死に一生を得たる一水兵あり其の名をユスチンといふ彼は僥倖にも戦艦の際に一箇所の負傷をも爲さざりき故に彼は戦艦中自ら目撃し且つ自艦最期の状況を具さに談ずるを得たり。水兵ユスチンは其の戦艦任務の位置は艦首陰砲臺の七十五ミリ砲の一門を擔當せり左れば上甲板並に自艦諸部の出來事を彼れは自から目撃するを得ざるは勿論なりしも屢々彼の居りたる位置に來れる火災の消防員や負傷者收容員より艦内の出來事を一々傳へられ其の談話は充分に記憶し居れり、故に纔に生き残りたる此の一水兵の談話は同艦が戦争の時に如何なる行動を爲したるかは茲に明かに傳ふるを得べし。ユスチンの言に依れば戦艦將

に始まらんとするや全艦員より最も尊敬せられ居りたるポロチノ艦長セレブリヤニコフ大佐は艦の全員を上甲板に召集して一場の訓示を與へて曰く今將に開始せんとする此の戦艦に全員宜しく軍八の名譽を重じて其の義務と誓約とを履行す可き旨を説き示せり艦長の訓示終るや否や戦艦準備の喇叭は鳴り響きて間もなく乗員は熱心と奮勵とを以て戦艦を開始せり、乗員は艦長の訓示に大に激勵せられたり戦艦の始まりにはポロチノは左まで敵艦の集中を受けざりしも同艦が最初に重傷を負はされて右舷艦尾の喫水線の少しく上に敵艦の大貫通孔を受けたるは三時半頃なりき、是に依りて艦内には火災起り又敵艦の貫通孔よりは波浪の艦を襲ふ毎に海水は艦内に浸入せり、火災の起りたる場所には下士の指揮の下に防火員をして努力せしめしかば火災は間もなく鎮火せり此の時敵の一彈又もや飛來して砲臺に命中し其彈片の爲に其處に居たる少尉試補フリコトは兩足を奪取せられて壯烈なる最期を遂げたり。左れど戦艦ポロチノは兎に角に六時頃までは未だ非常なる損害を受けざりき又死傷者の數も比較的に尠なかりき然るに一旦戦艦を中止して再び激戦となりたる後敵砲火の集團の爲に非常の苦戦に陥りたり、激戦再始の後ち間もなく日本艦隊の大口徑砲彈は震雷の如き勢ひを以て右舷艦首の六時砲塔の附近に命中炸裂して舷側に舷門大の貫通孔を穿たれたり、其の砲彈の餘力は更に第二甲板をも破壊せり右の砲彈命中と殆ど同時に一彈又前甲板に命中して之を粉砕せり少時の後に敵の大口徑砲彈は司令塔の附近に炸裂して其の爆勢の猛烈激甚なるや艦橋全部を粉砕崩壊し去りて司令塔に在りし者も艦橋附近に在りし者も悉く一掃せられ或は即死し或は負傷せり、此の時正副航海長は二人とも斃れ其の一人の如きは全身寸断せられて骨肉共に飛散せり又掌砲長ザワリシ大尉は敵艦の爲に腹部を

列り去られたり然し大尉は自ら歩して下甲板の方に赴きしも綑帶所まで往くを得ずして途中に倒れて
 瞑目せり、艦長も水雷長も同じく負傷して下に收容せられたり此の外に艦首十二吋砲塔に命中したる
 敵彈の碎片は同砲塔の掩蓋を吹き飛ばし同砲の指揮を司り居りたるフークス大尉は其の顛頭を切斷せ
 られたり由て戦艦操縦の司令は二等大尉マカロフ代りて之に任じ中央部署に在りて之を指揮せり。艦
 長の負傷は頸部並に左の腕を切斷せられ重傷なるを以て綑帶所に横臥せり、艦長の負傷は大に士氣を
 沮喪せしめたり敵の砲火少しく静かになりし時多くの者は艦長の負傷を氣遣ひ之を見舞はんとて綑帶
 所に來集せり、艦長は精神に少しも異狀なく一々戦闘の状況を聞き乗員を勵まし始終戦闘の方策處理
 を爲せり。

(四十五) 唯一人の生存者

戦艦アレキサンダー三世の戦列を離るゝや戦艦ポロチノ之に代りて艦隊の先頭艦となりしが此時
 よりポロチノの爲に最も恐怖す可き苦戦の時は始まれり、敵艦隊より發する砲彈は小止みもなく同艦
 に命中して其の砲彈の觸るゝ所火災を起すに非ざれば必ず破壊の猛威を逞うせり此時までポロチノは
 火災に對して尙ほ充分防火の効を奏して祝融の威を縱まならしめざりしが艦隊の先頭となりて戦ふ
 に至りて全艦各處に起れる火災は復た容易に防ぐを得ざるに至れり、艦内到處漸次に濃厚なる堪へ
 難き煙に滿てられ其の黒煙の爲に敵艦の位置さへも見えずなりて射撃を妨げらるゝに至れり間も無く
 右舷に強き傾斜を感じたるも尙ほ戦列を離れず先頭を繼續して戦ひ其の備砲の多くは既に破壊せられ

砲員も亦多くは死傷したるを以て今は射砲の數さへ極めて稀なるに至りたるも兎に角に尙ほ多少の射
 撃を續けたり、其れに反して敵彈の落下命中は刻々に多くなれり。同艦沈没の少時前に諸士官は悉く
 死傷し一人の指揮に任ずる者もなく此時また喫水線下に數箇の貫通孔を受けたり、勿論ユスチインは
 其の貫通孔を目撃せしには非るもポロチノの艦體が一時に大傾斜を爲せるを以て斯く想像せり左れど
 ユスチインは火藥庫若くは水雷等の爆發せる如き何等音響は耳にせざりしとなり、同艦滅亡の間際に
 至りてユスチインは艦首に在る自己の擔任部署を離れて艦尾の方へと赴きたるに偶然にも艦の上部全
 く破壊せられたる大慘状を目撃するを得たり其時の光景を叙すれば左の如くなりしとなり、ポロチノ
 顛覆少時前にユスチイン等の在りし艦首なる陰砲臺に敵の發射せる巨彈が一彈又一彈相次で命中して
 ユスチイン並に彼れの長官たる掌砲士官チェバーキンを除くの外其處に在りたる人員を悉く打斃せり
 次で火災起りしも彼等二人の力にては到底その猛火を防ぎ得べきに非ず是に於てチェバーキンは疾呼
 ユスチインに艦尾に赴きて其處に助力の人員を招き來る可しと命せり、ユスチインは上官の命を奉じ
 て其目指す方へと赴きたり彼は濛々たる黒煙の間を潜りて走りしが砲臺の上の甲板は幾箇處となく崩
 壊せられ甲板の上には處々に大穴を生じたれば其穴に墜落せざる様にと非常の注意を爲せり艦の鐵梯
 は敵彈の爲に悉く破壊せられて上下甲板の通路は殆んど斷絶せられたり、各士官の私室も提督室も何
 れも散々に破壊せられ且つ猛火に包まれて近づくを得ざりき、ユスチインは辛うじて艦尾に到りしも
 一人の人影に無し想ふに防火班の部隊も悉く斃れしものなる可く其の周圍には慘絶なる、死體累々
 として横はれりユスチインは其慘状を見て慄然恐怖の感に打たれて思はず其處を飛び退き左舷の方よ

り上甲板に赴かんとせり其處に到れば甲板は悉く破壊し去られて見る影もなく殊に後部艦橋の如きは全く崩壊して其形をも存せざりき、ユスチインは今日撃せる此慘狀を掌砲士官に報告せんとして艦首の陰砲臺に走れり彼が自己の部署なる大砲の側に駆け附くや否や戦闘艦は一時に横に倒れ次でキールを上にし顛覆せり海水忽ち砲門より迸入し陰砲臺には海水満々たり、ユスチインは既に其の砲門より遁れ出る能はざるを認め天井へと匍ひ出たり其處に手探りにて偶然にも細き蒸汽管に取絶り其より被服を脱し足を擬門蓋にかけて其處に入り手足を動かして海水と戦ひ幾度か水を飲みつゝ遂に波上に浮出たり彼が海上に浮び出で、第一に認めしは顛覆艦の喫水線下の艦底にて其の上に水兵八名佇立し居たるのみにて其他幾百の乗員はアレキサンター三世の乗員の如くに恐怖す可き悲惨なる最期を遂げたるなり、顛覆艦の底に佇立し居りたる水兵の一人なる水雷機械兵ベトフはユスチインの波間に浮き揚がれるを見るや「此處に泳ぎ來れ」と叫び且つ自己の襯衣を脱ぎて其の一端をユスチインに與へ其に取りつかしめたり彼は其れに便を得て艦底に攀るを得たりしも彼等は皆な波浪の爲めに艦底より流されたり、ユスチインは其の近くに數箇の木片浮流して四人の水兵が取り付き居るを見れば勇を鼓して泳ぎ附き彼は帆桁の折れに取り附くを得たり暫時五人共に其の木片をたよりに漂ひ居りしが間もなく人も木片も共に波浪に漂蕩せられて彼方此方に散されたり、少時にして日も暮れユスチインは波上に漂ひ居りたる僚友を見失ひたり**ポロチノ**の艦底も最早や見えざりき

ユスチインは三時間も其の木片と共に波浪のまにまに暗黒の海上に漂はされながら萬感胸に満ちて今少し後には自分も力盡きて他の僚友の如くに海底の藻屑と消え去るならんとのみ豫期したり、然るに彼は何等の不思議なる天幸にや折りしも其の近傍を通過する三隻の日本水雷艇の認むる所となりて其の一隻の爲に救助せられたり乗員九百の中より生存者は實に彼れ一人のみなり

（四十六） 備砲悉く破壊

戦闘艦**オスラビヤ**は海軍大佐**ペール**艦長指揮の下に戦闘開始前に左列梯隊の先頭艦たりし事は人々の紀する所なる可し、同艦の橋頭には**フェルケルザム**提督の將官旗翻れりと雖も同提督は此の海戦三日前に未だ敵艦を見ずして長逝し其の遺骸はセメントを以て填充せられたる棺に納め艦内の祈禱所に置かれたり、日本艦隊が砲火を開きたる際に我艦隊の第一戦隊(右列)は左列梯隊の前に入りて尙ほ戦闘陣形を作るの追なかりしを以て**オスラビヤ**は依然として左列梯隊の先頭に在りたり、故に**オスラビヤ**は日本艦隊後續の諸巡洋艦即ち装甲巡洋艦の一枝隊より激烈なる砲火を集中せられたり**オスラビヤ**は急速に**アリオール**の次列に入らんとて舵を轉じたるも戦線は全く敵と並行せしかば**オスラビヤ**の艦上には敵彈雨霰の如く集中せられ甲板の上は忽ちにして壘々たる死傷者を以て充たされたり、且艦首左舷の喫水線下に大口徑砲の巨彈命中して貫通孔を生じ**オスラビヤ**は忽ち傾斜して艦首を少しく沈下せり戦闘陣形を作りたる後は敵彈の命中落下著しく減じたるも尙ほ數多の敵彈落下して間もなく**オスラビヤ**の艦首十吋砲の砲塔を崩壊し艦首陰砲臺に於ける連絡を断たれたり、其の外にも艦首に數個の敵彈を被りたり戦闘を開始して未だ三十分を經過せざるに左舷の備砲は敵彈の爲め悉く破壊せられ敵に對しては只だ艦尾の十吋砲と其他の艦尾備砲のみを以て戦はざる可らざるに至れり、二時三十分頃

にオスラビヤの艦首左舷に當り十吋砲臺の反對側に二回目の巨彈命中して舷側に巨大なる貫通孔を生じ其處より海水は恰も堤を決したる洪水の如くに流れ込みたり其の彈孔の巨大なりし事は驚くべき程にて其の目撃者の言に依れば貫通孔を生じたる反對側の處に藏しありたる不用水雷を其の彈孔より自由に入しむるを得たりと云へり、此の時尙後部第十六號石炭庫の眞向ふなる吃水線下の舷側にも敵の一彈を穿たれ其の彈孔より石炭庫に浸入したる海水は同一砲彈にて破壊せられたる隔板を経て艙帶所に近き居住甲板にまで襲來せり敵彈炸裂の際に破壊して吹飛ばされたる鐵片は艙帶所附近に轉落したりといふ。

オスラビヤの傾斜に急に甚だしくなり且つ艦首は依然として沈下せり之が爲めに同艦は機關の運轉を止めて戦列を離れたるが左舷の傾斜は刻々に益々甚だしくなれり、彈孔より奔騰して流込む激浪は非常の勢にて其の彈孔を填塞せんとする板類や吊床や其の他あらゆるものを悉く顛覆漂流して到底その水力を防止するの道なく艦内の水量が加はれば加はる程艦體沈下するを以て喫水線の上なる幾多の彈孔よりも浸水するに至れり、乗員は皆な「加る可きや」と問合へり右舷の方に集りたる乗員は今海を泳ぎ廻る様になれり、艦長は負傷せざりしかば戦艦の最期まで指揮を爲せり人々艦長に向ひ救助の事を謀りしに艦長は彼等に訣別の言を爲して曰く「卿等去て救を得よ余は此處を動かさず」と艦長の傳令下士ミハイロフは二箇の吊床を持來りて艦長に之を以て海中に投せん事を勧めたり、艦長ベール大佐は其の厚意に感泣せんばかりに下士ミハイロフを懷きて彼に「爾は去りて救を得よ余は是より司令塔に赴かざる可からず」と云へり此の後遂に艦長を見失へり、佐官ボフウイスネフは負傷して居住甲板の寢臺の上に臥し居るを認めたり機關室に在りし機關士並に水兵等は一人も上に出るの遑なく皆其の部署に残れり、船體の傾斜甚だしくなりて砲座甲板並に砲門まで水面に傾きしかば忽ち浸水一層激甚となりて艦體は艦首を沈下して俄然横に傾き遂に戦艦オスラビヤは艦首の方より海底に沈没せり、同艦は其の最後の刹那まで猛烈なる敵彈を被り乗員は既に甲板の上を襲へる水中を奔走し居り其の水中に炸裂せる敵彈の碎片に斃されたるもの其の數を知らず而して艦の沈没と同時に海上に浮流せる人員も多かりしかば之を救助せんとて我が驅逐艦ブイヌイ、フェイストルイ、ブラウイの三艦其處に近づき來りて救助を始めブイヌイは約二百人以上を救ひ得たり。

（四十七） 日本軍艦の義舉

戦艦シロイウエリーキイは戦闘開始の當初は敵艦隊の砲火を左まで甚だしく被らざりしかど前驅艦オスラビヤが戦列を離るゝや忽ち敵彈の落下命中を受け次でオスラビヤの滅亡するや今までオスラビヤを砲撃せる敵艦は忽ち其の砲口をシロイに轉じて猛烈なる砲撃を加ふるに至れり、而して多くの敵彈鋼鐵防禦の箇處に命中したるも一も之を貫通せざりきシロイが最も大なる損害を被りたるは四時頃に右舷を貫かれたるものにして我が艦隊が右舷の方より襲來せる日本装甲巡洋艦隊と戦ひし際に被りし重傷なりき、シロイは相次で敵の二彈を砲臺に命中せられ忽ち其處に火災を起し艦首喫水線下に貫通孔を受け艦首の一室に浸水せり居住甲板に命中したる敵彈は其處にも大火災を起したり是が爲にシロイは十五分間戦列を離れたり、此の時我が艦隊は我が運送船並に巡洋艦の航走せる傍側を通過せ

り、**ドンスコイ**は**シソイ**の急を見て同艦に近づき爲に自ら敵弾を被りながら遮蔽せり砲臺の火災を消すに二時間を要したり此の猛烈なる火災の爲めに備砲も大なる損害を受け又彈藥傳送器も燒棄せられたり。八時に到り日は地平線下に没して海上は薄暗くなれり**シソイ**は艦首喫水線下の敵彈貫通孔より多量の浸水ある爲に僚艦に續くを得ず漸次後れながら艦首彈孔の填塞に力を竭したるも充分に其効の奏するを得ざりき浸水の爲に填塞物を流され海水は絶えず艦内に進入し終宵排水の爲めに勞せり。日本の水雷艇は終夜午前の三時まで**シソイ**に對して斷えず襲撃を加へたるも始終巧に撃退せり但夜二時頃に敵水雷艇一隻の巧に發射したる水雷一箇我が**シソイ**に命中して舵機室の附近に爆裂せり、之が爲に**シソイ**は舵機を失ひたるにそ止むを得ず機關を以て操縦して航走を續けたり左れど黎明に至りて**シソイ**は目指す浦鹽まで到着する事は到底望むべからざること明になりしかば艦を後に廻轉して對馬島へと向へり。而して朝六時に地平線上に巡洋艦**ウラヂミルモノマフ**並に驅逐艦**グロムキイ**が共に同じく對馬島を指して赴くを認めたり兩艦が**シソイ**に接近せる時**シソイ**は**モノマフ**に對して「我が乗員を救助せよ」との信號を爲せり**モノマフ**は之に答て「救助するを得ず我れ自ら間もなく沈没せん」との答信を爲して遠く航走し去り**シソイ**の運命は益々危急に迫れり同艦は左舷に傾斜して艦首は甲板の上まで海中に沈下し艦尾は高く揚がり、地平線上に日本の假裝巡洋艦三隻現出して急駛**シソイ**を目懸けて前進し來れり**シソイ**は直に信號を揚げて敵艦に乗員の救助を請ひ且つ大端艇を降して先づ負傷者を敵艦に移乗せしむるの準備を爲せり、日本の巡洋艦も亦直に端艇を降して**シソイ**に航し來り其人員を收容し初めたり、又日本の巡洋艦は**シソイ**を曳船せん爲に接近し來りしも其の遠なく同艦は右舷の

方に轉覆して海底に沈没せり。**シソイ**ウエリキイの次に續航せるは戰闘艦**ナワリン**なりき同艦も亦**シソイ**と同様に**オスラビヤ**の滅亡までは左まで敵の砲火に苦しめられざりしが三時少し過に日本の十二吋砲彈飛來して**ナワリン**の艦尾左舷喫水線の直く近くに命中し大貫通孔を受けたり、暫時の後ち四時頃に**ナワリン**は同じく艦尾喫水線の恰も前の砲彈を受けたる場處と相均しき右舷に同様の貫通孔を穿たれたり此の二彈の爲に**ナワリン**の艦尾は散々に破壊され士官集會室を全く崩壊し且つ燒き拂へり火災は猛烈なりしも兎に角に鎮火するを得且つ彈孔も填塞して多量の浸水なき様に防ぐを得たり。**ナワリン**は甲板上の大破壊と大火災と又夕刻までの間に喫水線附近に艦尾左舷に一箇所艦首右舷の技師室の附近に一箇所の敵彈貫通孔を受けたり、戰闘の半ばに四十七ミリ砲を備へある艦首砲塔に命中したる敵彈の碎片にて艦長大佐**フェテンコフ**男は腹部並に脚部に負傷して手術所に收容せられたり、**トルキン**中佐艦長に代りて指揮の任に當れり長の他戰闘中に航海長**リクツキイ**大尉並に少尉**リミセ****フスキイ**並に同スチエルクノフ等も負傷せり。

（四十八） 日本水雷艇肉迫

彼我兩艦隊の砲戰終りて後ち**ニコライ**一世が是より將に取らんとする航路の方向を示し且「我に従へ」との信號を爲せし時殘存の諸艦は何れも速力を加へたり、戰闘艦**ナワリン**も亦是等諸艦に續航せんと試みたり然し**ナワリン**は其の艦尾海中に沈下し艦尾の貫通孔よりの浸水は益々その量を増して速力大に減じたるも兎に角に夜の九時までは敵の水雷攻撃を撃退しつゝ、殘存艦隊に續航するを得たり左れど

此の時同艦は艦尾の沈降益々甚だしくなりて海水は低部甲板を涵して既に十二吋砲塔までも浸水せり斯の如く到底他艦と速力を同じうして續航するの見込なきを以て速力を減じたり、他の殘存諸艦は暗中にその艦影を没して視線界より隠れし時ナワリンは全く機關の運轉を止めて貫通孔の填塞を始めた然るに敵の水雷艇隊は好機逸す可らずと思ひけん四方よりナワリンの周圍に猛烈なる攻撃を加へ來り一時は周圍に蟄集せる敵水雷艇二十隻以上に達せる事ありたり、ナワリンは是等水雷艇と奮戰激闘して最初の程は敵水雷艇をして容易に艦の近傍に近つかしめざり然るに十一時頃に攻撃艇の一隻は密に後方よりナワリンに接近して其の艦尾に一發の水雷を發射せり轟然爆裂して震雷の如き響を傳ふるや否や艦尾は忽ち水中に沈下せり、此時同艦の乗員は狼狽の極暫時喪心して常態を失ひたるに他の一隻の水雷艇は又一發の水雷を發射し右舷中央の艦腹に爆裂せりナワリンは之に最後の一發なる砲撃を加へたりしが同水雷艇は艦首を轉して廻避せんとするや我砲彈の爲に撃沈せられたり、ナワリンは最後に受けたる水雷の爲に太く右舷に傾斜しながらも尙ほ靜に前進せり乗員は皆各自艦滅亡の迫れるを認めて何れも任務の部署を棄て上甲板に走り或者は端艇を下さんとし或者は甲板上に打倒れ或は海中に躍り込みたり將校等は到底救助せらるゝの道なきを認め互に相擁して最後の別を告げたり、ナワリンは其の傾斜甚だしくなりて既に操砲發射するを得ざるに至れり同艦の右舷は既に水面に傾きて將に覆没せんとする際に敵水雷艇隊を離れてナワリンを指して駛走し來る二隻の敵艇あるを認めたり、此の二隻の水雷艇は猛然として來り左舷に肉迫して二發の水雷を發射せるよと見る間に其水雷が艦側を撃ちて爆裂しナワリンは其の最後の致命傷を受くるや俄然顛覆して沈没せり、戰艦滅亡の瞬

時前に下し得たる若干の端艇は僅に沈没を免れたり是れ實に夜の十二時なりき、茲に記述せる一節はナワリンの生存水兵三名が戰艦沈没の翌日日本水雷艇の爲に救助せられ後ち俘虜となりて日本に送られたる其の一水兵セドフなる者の實話なり。

（四十九） 漂蕩十六時間

戰艦ナワリン乗組の一水兵セドフが同艦覆没後十六時間海上に漂蕩したる始末は悲惨ながらも甚だ趣味ある記事なるを以て余は又彼の談話を茲に紹介せざる可からず、ナワリン覆没しセドフが海中に投じたる時波間に漂ひ互に蹴き泳げる水兵の間に混入せり彼等の多くは救助の材料を得ずして互に他人の身體を力にせんとして相蹴りしかば共に押重なりて溺没せり彼等は聲を揚げ叫びて救助を求めたるも當時尙ほ水雷攻撃の最中にて之を救ふの暇なかりしなり、日本驅逐艦も救助の道を講せず一隻去り二隻去りて皆な何處にか赴けり後には只だ波の間に漂へる水兵の叫喚號哭の聲を聞くのみなりき、セドフは砲手ガズニヤコフに縋られ將に彼の爲に沈没せられんとせるも漸くの事にて彼を離して一人となりしが彼は忽ち溺死せり周圍の海上には絶望の叫喚波浪の音と共に物凄く或は「泳ぐ勿れ寧ろ溺死せよ」と呼ぶ者或は「縋る勿れ殺さるゝも同様なり」と叫ぶ者ありセドフは一水兵の爲に縋られて深く海中に沈められしも後ち力を出して再び浮き上りたり此の時、沈没したる戰艦より木製の器具が突然浮び出でたれば多くの乗員はその器具に泳ぎ附きたり浮揚器物の爲に海上に漂ひ居る水兵多く負傷せりセドフの傍らに泳ぎ居りたる一水兵は手を折られ他の一人は頭を挫かれたり、彼は一聲

高く叫びて深く水中に没したりしが又再び何かに衝突して頭を挫きて浮揚りたり彼は救命帯を有し居しが故に死骸となりて浮流せり。ナワリン沈没後暫くは暗黒なりしが後ち月出で海上明るくなりたり海上に漂蕩せる者も次第に減じて尠なくなれり是れ非常なる疲労と寒さの爲に縋り居りたる木片や器物を持ち續く力さへも盡きて今は皆な海底の藻屑と消えたるなり、夜は限りもなく長く感せられしが雖も黎明となりて間もなく太陽出でたり、海上を眺むれば木片や器物に縋りて波間に漂ひ居る者尚ほ五十人程あるを認め又セドフの附近に救命帯を有して泳ぎ居るブホフ大尉の在るを認めたり此の時日本水雷艇の航走し來るを認めしかばセドフはブホフ大尉に日本の水雷艇は我等を救助す可きやを問ひたるにブホフは答て曰く「嗚呼可憐なる勇者よ助けくるゝや否やを知らず彼等の昨夜の行動に依りて察すれば助けくれざる可し」と然り水雷艇は我等の近く迄來りしも實に我等を救ひくれざりき、日本の水雷艇は我等が聲の限り呼び叫び手を以て招きたれば我等を認めざる筈なきも彼等は我等を顧みずして航走し何處にか赴きて其の艦影見えすなりたり、浮ひ居る者は尚ほ力のあらん限り泳ぎたるも次第に其の數を減したり或者は泳ぎながら發狂して奇妙なる聲を出して狂笑せり他の一水兵も發狂してブホフ大尉の後より泳ぎ來りて大尉の首に縋り大聲を擧て「アボホフよ爾は我を溺死せしめて何とする氣なるか」と叫び大尉を海中に沈め如何とも爲す可らざりき、セドフは之を見兼ねて艦中に令名ありたる大尉を救はんとて其處に泳ぎつき其水兵をつき離して大尉を救ひ水兵は頭を下にして忽ち溺死せり間もなく救助帯を有して泳ぎ居たる大尉は如何したるにや手を空中に指揚げて奇怪なる事を爲すよと見る間に遂に溺死せり蓋し喪心せしものなる可し、尙ほ暫時の間はセドフの泳ぎ居る附近に

（五十） 殘存二艦の最期

艦裝具に縋りて泳ぎ居る七名の水兵ありたりセドフも亦その中に加はりて泳ぎ居りしが彼等の力盡きて一人沈み二人溺れ漸次に皆溺死し遂にセトフ一人残りて人事不省に陥りたり而も廿三日の三時頃に其附近を航せる日本水雷艇の爲に救助せられて蘇生したるも彼自身は尙ほ生存せりとは容易に信ずるを得ざりしといへり。

巡洋艦ナヒモフは五月二十七日の戦闘に數個の敵彈を受けたりしも其の喫水線近くには一彈も命中せざりき故に同艦は同日夕刻迄では艦體に左まで危険なる損害を受けざりしを以て全速力を出して航走せる殘存艦隊に追従するを得たり、同夜八時過ぎに敵の水雷攻撃開始の際同艦に接近し來れる敵の水雷艇を味方の水雷艇と見誤りて之を撃退せざりしかば敵艇は肉迫して水雷を發射し多大なる損害を與へたり、水雷爆發の爲に受けし貫通孔は艦首右舷にて此の損害の爲に同艦は戦列を離るゝの止むを得ざるに至り彈孔閉塞の爲に機關の運轉を停止せり、彈孔には三個の閉塞栓を填塞したるも其彈孔の巨大なるが爲め殆ど填充の用を爲さず海水浸入して艦首の一區域に充滿せり終夜ポンプを運轉して排水に力を竭したるも依然として其水量を減せず彈孔填塞作業を終りし時又も機關の運轉を始めたり然し修理に盡力して機關は相當に運轉し得たるも艦首を沈下して徐々前進するを得るのみなりき、敵の水雷攻撃は之を充分撃退し得たるも夜半に至るまで續きたり而して浸水漸く増して將に沈没せんとするに至れり左れば同艦浦鹽までは到底航進するを得ざる事明かになりて全く絶望に陥りしかば黎明を

待ちて近くの沿岸を指して航路を取れり。同艦の遙か後方より始終敵の驅逐艦追尾し來りて無線電信を以て絶えず同艦の所在を通信せり、ナヒモフは朝七時頃に對馬の海岸に近づきしかば大端艇を下して先づ負傷者の上陸を始めたる時日本の假裝巡洋艦並に水雷艇接近し來れりナヒモフは乗員救助を請ふの信號を爲せしかば日本の巡洋艦も端艇を下して人員收容の爲に之をナヒモフに遣はせり、我は談判交渉の爲に一名の大尉を遣はしたるに日本の假裝巡洋艦隊長は同大尉に向ひ若し自らナヒモフを沈没せしむる如き事を爲さば海上に漂漾する悉くの人員を砲撃すべしと宣告せり、是に對して前記の我大尉はナヒモフは既に沈没しつゝある旨を答へたり實に同大尉の言の如く乗員の大部分を我端艇にて上陸せしめ殘餘の者は日本の端艇に收容せられて後ち間もなく朝九時十五分頃遂に海底に沈没せり此時遙か沖に巡洋艦ウラチミルモノマフ並に驅逐艦グロムキーが陸岸を指して航進し來るを認めたり。又砲艦ウシヤコフは日中の砲撃の終りし後殘存艦隊と共に航走せり然るに日没後に至りて他艦の如き速力を出すを得ざりしかば漸次艦隊に後れて遺されたるも夜間の敵の水雷攻撃は兎に角に之を撃退するを得たり。翌二十八日には浦鹽を指して西北の航路を取りて進みたり午後四時半頃前程に當り日本艦隊を認む間もなく二隻の敵の裝甲巡洋艦は其艦列を離れてウシヤコフを急馳追撃せり既に射程距離内に航進し來りて其の一隻は信號を掲げて子ボカトフ提督は艦隊を率ゐて投降せる旨を報知せり、是勿論ウシヤコフも同様に降伏せしむるの目的にて此の信號を爲せる者なる可し然るにウシヤコフは此の信號に對して何等の答へをも爲さず敵艦に近づきて突然砲火を開きたり戰鬪は長く續かざりきウシヤコフは間もなく自らキングストンを開きて沈没せり、夕刻六時頃にウシヤコフの沈没するや日

本の巡洋艦は直に端艇を下して人員を救助し乗員の四分の三を救助するを得たりウシヤコフの艦長ミクルフ大佐は救助せらるゝを欲せず其の艦と運命を共にして勇ましく最期を遂げたり、此のウシヤコフ沈没の事實に徴すれば若しネボガトフ提督がウシヤコフの如くに諸艦の沈没を命令するも人員を失ふの如何に少なかりしやは甚だ明かなる可し。

（五十一） 一巡洋艦の最期

巡洋艦ドミトリドンスコイは日中の戰鬪に纔に甲板の上と端艇等に數個の敵彈を受けたるのみにて重大なる損害を受けざりしかば夜に入りても南方を指して逃走せるオレーグ並にアウロラ等の僚艦に續航するを得たり、左れど他艦の出せる如き速力を充分に出すを得ざりしかば他艦に續航するは甚だ困難にて遂に非常に後れて諸他の友艦を暗に見失ひ止むなく舵を轉じて再び東北に向ひて航進せり同夜日本の水雷艇に攻撃を被りしも充分之を撃退せり、翌朝黎明に我が驅逐艦ファイヌイを認めたり同艦にはロゼストウエンスキイ提督移乗し居りしなり同提督はドミトリドンスコイに移乗せられては如何との幕僚の相談を受けたるも提督は是れに轉乗するを肯せずして驅逐艦グロスヌイと共に航し來れるベトウイに轉乗せしなり、ファイヌイはドンスコイの傍らに残りて同艦と共に航走せり然し間もなくファイヌイはドンスコイに續航するを得ざること愈々明かになりしかば先きにファイヌイがオスラビヤより救助したる人員を收容したるも今は又ファイヌイの乗員をもドンスコイに收容するに至れり斯くてファイヌイはドンスコイ自から發砲して撃沈し其の後ち同艦は東北二十度の航路を取りて航進せ

午後四時頃に**ドンスコイ**は前程の地平線上に數條の煤烟を認め又右舷遙か真横に當りて敵艦の追撃し來るを認めたり、是に於て**ドンスコイ**は鬱陵嶋を左舷真横に見通過せんと欲して舵を西北に轉じたり、暫くして右舷の煤烟を認めたりし方に二等巡洋艦嚴嶋松嶋橋立並に戰艦鎮遠の四隻現出せり、五時に至りて左舷の方に當りて二隻の三本煙突の快速力の巡洋艦新高音羽二艦現出し音羽は急駛**ドンスコイ**に接近せり、同艦は是等六隻の敵艦を相手に戦ふも到底勝算なきを覺悟して僅に二十五哩を隔る鬱陵嶋に航して擱岸せんと試み同嶋指して十三ノットの全速力にて航進せり敵の諸艦は左舷の方より追撃し來り六時三十分に至りて敵の一艦は始て砲火を開き**ドンスコイ**も亦之に應射し激烈なる戰闘を爲したり最初は敵彈の命中左まで甚だしからざりしが若干時の後に敵彈は艦上艦側に雨霰の如く集中落下して數個處の貫通孔を突たれ又艦内の各處に火災を起せり、殊に敵の一彈**ドンスコイ**の前艦橋に命中炸裂し艦長レベンフ大佐航海長シウリツ中佐等を傷け掌砲長ドルノフ大尉等を斃せり艦上には驅逐艦**アイヌイ**より收容したる約二百七十人の乗員が甲板上に群集し居るに命中落下する幾多の敵彈は是等の人員を陸續掃射して死傷壘々たる光景を來し**ドンスコイ**の運命は刻一刻に急迫せり、戰闘開始の當初は四隻の舊式敵艦徐々として我に接近し其砲火も左まで激烈ならざりしかば尙ほ多少の望なきに非ざりしに俄然敵彈は**ドンスコイ**の舵機を破壊し去り同艦は忽ち傾斜して敵艦の方に横向きになり其れと同時に敵彈の落下は益々多く戰闘の終る頃には僅に五ノット以上の速力を出すを得ざるに至れり、是れ敵彈の爲に各處に通ずる蒸氣の通管を破壊せられて汽罐の壓力大に減じたるが爲めなり幸に

して日没後になりて戰闘は停止せり、間もなく水雷の攻撃始りしも日本の水雷艇は成功を收むるを得ずして十時まで攻撃を續けたり**ドンスコイ**は暗夜に乗じて嶋嶼に達し最初は四ケーブルを隔て、停船し後ち更に二ケーブルまで接近して錨を投じ破損せざる端艇を下して乗員の上陸を始めたなり、其の上陸を朝の六時までに終了して殘餘の若干乗員は二等大尉ブロン指揮の下に錨を抜きて四十五サーゼン(一サーゼンは我が七尺強)の深さに出で其處にてキングストンを開きたり斯くて巡洋艦**ドミトリイ****ドンスコイ**は傾斜せずに徐々海底に沈みたり乗員は端艇に移乗して上陸せり。

(五十二) モノマフの最期

巡洋艦**ウラチミル** **モノマフ**は日中の艦隊戰の終りたる後最初は諸他の巡洋艦と共に同一航路を取りて**ドミトリイ** **ドンスコイ**の次に列し南方に向て航進せり然るに日没後に至りて諸他の友艦を見失ひ只だ一隻となり暗中に全速力を出して左舷の方より右舷の方の後方に反對の航路を取りて航走し其後航路を東北に轉じて浦鹽に向ふて前進せり、同夜九時迄の間に三回の水雷攻撃を撃退せり此時巡洋艦の艦尾後方に當りて暗號の信號を掲げ居る驅逐艦を認めたり是れ**グロムキー**なり依て之に信號して出來得るだけ艦尾に接近して航走す可しと命令せり此時敵の水雷攻撃愈々猛烈を加へ**モノマフ**は遂に其右舷艦側の喫水線に敵水雷艇の發射せる水雷を受けたり、當時目撃者の言に據れば敵の水雷艇は今少し先きまで**グロムキー**が掲げ居りたると同様なる目標の信號を掲げて**モノマフ**の殆んど艦側まで猛進し來りて其の水雷を發射せり、**モノマフ**の舷側に命中したる其の水雷爆發の猛烈なりしと實に驚

くばかりにて爆發震動の激甚なりしが爲に其振動にて一時機關の運轉止まり又水雷爆發の箇所の上部に在りし六吋砲の傍にありたる砲員は水雷爆發の震響の爲に砲門より海中に撥ね飛ばされたり、斯の如き状況なりしかば従て水雷の爲に受けたる貫通孔も巨大にて艦員は直に全力を竭して是れが閉塞の作業を始めたなり敵の水雷艇は交々來襲して其の作業を妨げたるもモノマフは此時既に速力を出して航走するを得たり、驅逐艦グロムキーは依然巡洋艦の近くに續航せしも天明に至りて遂に全く機關の運轉を止めて停船せりモノマフは信號を以て浦鹽に赴くと告げ全速力を出して航走せり。

モノマフは夜半に貫通孔の填塞作業が殆んど終りたる際に敵の水雷艇は艦首の方より襲撃し來りしかば之を避る爲に舵を轉じて全速力を出せり、此の時折角填塞したる閉塞栓は激浪の爲に打落されて海水は堤を決せる如き勢にて浸水せり是に於いてモノマフは到底浦鹽に赴くを得ざるを認め今は詮方なく陸岸に航進して擱岸す可しと決定し遂に航路を西方に轉じたり而して其傾斜は刻一刻に甚だしくなれり而も兎に角に艦體を動かすを得たり、敵の水雷攻撃は一時まで續きたり然し幸ひに他に損害を受けざりき夜明けて間もなく陸岸を望見せり、朝六時頃にシライウエリキーを認めたり同艦は信號を掲げて乗員の救助を請へり左れどモノマフも自らが甚だ危険なる状態に在るを以て救助し得ざる旨を告げて航走せり、八時頃に對馬嶋に近づきたり此時艦の浸水は既に汽罐及び蒸汽の壓力は十五フントに減退せり故に甚だ微弱なる速力にて徐々と前進し先づ負傷者を乗せたる端艇を下して乗員の救助を始めたなり此の時、日本の假裝巡洋艦一隻モノマフに向て航進し來りしが同艦の急迫を認め直に端艇を下してモノマフに送り其の乗員の一部を收容せり殘餘の者は泳ぎて日本の船に赴きたり、巡洋艦ウラ

チミルモノマフに残りたる人々は直にキングストンを開きたり同艦は左なきだに水雷貫通坑の浸水の爲に將に覆没せんとする状態に在りし事なればキングストンを開くや否や忽ち海底に沈没せり時に午前九時なりき。

(五十三) 壯烈なる巡洋艦

一等巡洋艦スウエトラナは五月廿七日の大海戦の始まるや否や間もなく艦首喫水線下のデナモマシン室(機械を電氣其他の動力にて轉達する樞要なる機械室)に敵弾を受け巨大なる弾孔を貫通せられ其の弾孔より海水非常の激勢を以て奔流浸入せしかば忽ち六吋砲の彈藥庫に浸入し其處に在りたる一水兵は砲彈搬送管より脱出し辛うじて一命を全うせり左れど尙ほ數名その彈藥庫に遺りて溺死せる者ある可しとの事なり、スウエトラナの艦首區畫は全く浸水せしかば同艦は甚だしく艦首を海中に沈降するに至り速力は十五ノット以上を出すを得ざるに至れり、只だ幸なる事には艦首と他の室との防水扉密閉するを得たりしかば他室の浸水を免れたり、同艦は日中の激戦に此の艦首の貫通孔の外にも喫水線に尙ほ一箇處の巨大なる貫通孔を穿たれたり其の外にも多くの敵弾を受けたるも損害は左まで顯著ならざりき又敵彈の炸裂する毎に屢々火災を起したるも何れも間もなく鎮火するを得たり、スウエトラナは始終他艦との戦列位置を保つを得たりしが日没後に至りて獨り戦列を脱し全速力を以て浦鹽を指して航走せり。夜間は平安にてスウエトラナと同一航路を取りて來れる驅逐艦アイストルイの外は他に一隻の船艦にも邂逅せざりき、翌廿八日の天明に至りて右舷遙かに數隻の敵艦を望見せり緩速力

を以て徐航するものゝ如くなりき是等敵艦は間もなく視界外に見えずなりたりされど間もなくして右舷直横の少し後方に當りて再び二隻の快速力の敵巡洋艦を望見せり、是等敵艦はスウエトラナを認むるや忽ち追ひ來りて急駛接近せりスウエトラナの右舷前程には鬱陵嶋を望み左舷遙かに水天髣髴の間に朝鮮の陸岸を望見せり、艦長は諸士官と協議して若し戦闘を避るを得ば朝鮮の海岸に航して自沈す可しと決定せり然るに追撃し來れる敵艦は既に目前に迫り到底逃る能はざるに至りたるを以て二隻の敵艦に對して四十五ケープルの間隔に於て砲火を開きたり、敵も亦砲火を開きて是に應じスウエトラナは優勢なる敵艦を相手に健闘奮戦せり左れど艦内には忽ち數箇所火災を起して黒煙海上に漲り又喫水線の上下に無数の彈孔を穿かたれ海水奔湍の如くに浸入して全艦水火の敵に苦められ將に覆没せんとするの運命に迫れり、艦の上下には無数の死傷者算を亂して横はり進退谷りて陸岸に遁れんとするも尙十五哩の距離あり左れど艦長は砲員より今は射砲を爲すを得ざるに至れりとの報告を得るまで奮闘せり艦尾の彈藥庫は既に一彈をも除まざるまで之を盡し艦首の彈藥庫は殆んど浸水せり。艦長は砲彈を打盡せりとの報告に接するや直に乘員救助の處理命令を與へ又水雷長を招きて艦體自爆の命令を下せり左れど彈藥庫は既に浸水し爆藥を得る能はざりしを以て爆沈の目的を達するを得ざりき、スウエトラナは敵彈の爲に重要なる蒸氣管を切斷せられしかば既に運轉するを得ずして徐々沈没し居るに日本人は尙も其砲聲を續けたり敵艦はスウエトラナ並に其の周圍に浮流し居る乘員に對して依然として砲彈を浴せかけ午前十時半頃に同艦が全く海中に沈没するまで砲撃を續けたり故に既に水中に浮流しながら敵彈の爲に斃れたる者尠なからざりき敵の巡洋艦はスウエトラナの最朝を見届け全力速

を以て南方に航走し去れり尙ほ海中に浮流し居れる者は全く救助の望みを失へり。

此の二十八日の最後の戦闘の終る頃に艦長セヘン大佐は前甲板に於て敵彈の爲めに戦死しズロイ中佐は乘員扶助の處理を爲さんとて奔走し居る間に砲臺甲板に於て艦體沈没の間際に負傷せり同中佐は重傷を負ひて甲板の上に倒れ人事不省に陥りて艦と其の運命を共にせり大尉アルツイバセフは砲臺に於て敵彈の碎片を頭部に受けて戦死し又大尉トルストイは負傷救助の爲に端艇を下さんと試み居たる際と同じく敵彈の爲に斃されたり。スウエトラナ沈没後、約五時間を経て海上に浮び居りたる多くの者は疲勞と寒さの爲に既に溺死したる頃に二本マストの大船を認めたり是れ運送船コレヤならんと想ひたりしが後ち日本の假裝巡洋艦亞米利加丸なる事を識りたり、亞米利加丸はスウエトラナの最後を遂げたる場所に來りて端艇を下して同艦の生存乗員の救助を始めたなり亞米利加丸に救助せられたる士官水兵を合して二百七十七人にて他は悉く戦闘中に斃され若くは海上に溺死せり大尉ウオロネツ少尉ニコド伯信號士アウエルベフ同アカテニフ等何れも溺死せり。

(五十四) 工作船の最期

巡洋艦スウエトラナに従ひて續航せる驅逐艦ブイストルイは敵の巡洋艦が疾驅追撃し來るを見るや到底スウエトラナと共に抗戦するを得ざるを認め全速力を以て朝鮮海岸に到り其處に乘組員を上陸せしめ艦は更に海上に出して自爆沈没せしめたり。

露國艦隊が本國より率ひ來れる大船の沈没に關しては尙工作船カムチアツカの滅亡に關して述ぶ可き

ものあり、同船の生存者は僅々五十六人に過ぎずして其も多くは職工のみなり彼等生存者の談に依ればカムチアツカは廿七日午後四時頃に運送船の一隊を襲撃せる日本の装甲巡洋艦隊より發射せる大口徑砲の巨彈數箇同船に命中して非常なる損害を被りたり、最初命中しなる一彈は艦橋の大半を崩壊し去りて其の時艦橋に在りし艦長ステバノフ中佐を斃しニコノフ大尉は重傷を負ひたりカムチアツカは忽ち最も危険なる恐慌を來し間もなく沈没す可しと想はれ乗員は周章狼狽し數名は船側より海中に飛び込みたる者さへありたり、左れどカムチアツカは依然として海上に浮び自由に操縦するを得たり其の後ち暫くしてカムチアツカは戰闘艦スワロフより僅に一ケーブルの距離に在りし時（五月二十七日の午後七時三十分頃）日本の二等巡洋艦數隻と數艘の水雷艇に包圍せられたり、敵の諸艦は最近距離の間隔に肉迫し來りてカムチアツカに對して最も猛烈に滅亡的の砲火を浴せかけたりカムチアツカは全く火焰に包まれし如き情況に陥り且つ數彈に喫水線下を穿たれしかば數箇所の船艙に浸水せり左れど幸ひに防水扉を鎖しありしを以て全艦の浸水を免れ尙ほ暫くの間は海上に漂ひ居りしが午後七時頃に敵の水雷艇の爲に撃沈せられたる戰闘艦スワロフの沈没と殆んど同刻に場所も其の附近にて船體を海中に葬り去りたり。工作船カムチアツカは沈没する前に端艇並に脚艇等を下すを得たり少尉試補アリストフは敵彈の爲に一手を切斷せられながらも乗員を端艇に移乗せしむるの處理を爲し且つ救助人員に對して船内の金庫の貨幣を分配し皆な之を取れ爾等に便宜を與ふ可しと言ひながら一々端艇に移乗する者に分け與へたり斯の如き事も皆な敵の砲火の下に行はれたり、大尉ゲンハ既に脚艇に移乗したる後に敵彈を受けて戰死せり。

カムチアツカ没沈前に工作部に職を奉ずる一人の技師は重傷を負ひて倒れ居るニコノフ大尉に日本人をして砲撃を停止せしむる爲に白旗を揚ぐ可しと勸めたり然るにニコノフ大尉は此の時殆んど人事不省に陥り昏睡狀に在りながら幾度か「何事も欲するがまゝに爲せ只だ白旗を揚ぐる勿れ」との言を繰廻せり日本艦隊はカムチアツカ並に戰闘艦スワロフが全く海中に沈没し去るまで砲撃を續け二艦の沈没するや否や全艦隊一齊に引揚げ去りて又敵の艦影を止めざりき。

（五十五） 提督と驅逐艦

我が艦隊が戰場に率ゐれる各驅逐艦の運命に關して最も深く我等の注意を牽くものは驅逐艦アイヌイ並にグロムキ一の運命なり。驅逐艦アイヌイにはコロメイツエフ中佐艦長として乗組み居りしが同艦はフェルケルザム提督逝去の計を知る由もなく只だ臨機オスラビヤの急に應ず可き命令を受け居りたり左れば二時四十分頃にアイヌイはフェルケルザムの將官旗を翻せるオスラビヤの状態甚だ危きを認めて同艦の急に赴きたり此の時、オスラビヤは既に沈没せしを以てアイヌイの來援は實に最後の援助なりきアイヌイは直に端艇を下して三回も往復し士官水兵を合せて二百四人の乗員を救助せりオスラビヤ滅亡の場處に又フラウイ、フィストルイの二驅逐艦も來航してアイヌイに助力してオスラビヤの乗員を救助せり。然るに日本艦隊はオスラビヤが最後を遂げたる場所に引續きて猛烈なる砲火を集中せしかば各驅逐艦は其場所を避けざる可らざりき、最後に來りたる驅逐艦ベドウイの如きは既に一人の沈没者をも救助するを得ざりきアイヌイはオスラビヤ最期の場處を去りて更に諸運送船の方

に赴きたり、三時四十五分頃に運送船ウラルが敵弾を受けて船體の大傾斜を爲し居るを認めしかばファイヌイは端艇を下して其の乗員を救助せりファイヌイは尙ほ航進して戦闘艦スワロフが主力艦隊を離れて火災に罹り居るを認めたりファイヌイの司令官コロメイツエフ中佐はスワロフに對する敵の猛烈なる砲火を冒し旗艦に近づきたり、旗艦スワロフの六時砲塔の甲板に一團の將校等手を以て塵くを認め風上みの舷側に接近し防舷枕の代りに吊床を投じて人員救助の準備を爲せり斯くて負傷せるロゼストウエンスキイ提督を六時砲塔より移し船體を動搖する波浪が驅逐艦を高く砲門に近づける機に乗じ提督をファイヌイに下し其の乗員は下より手を廣げて提督を受けたり、次でスワロフより數名の幕僚と下級乗員二十三名を移乗せしめたり此の時スワロフの舷側に少尉フォンクレセリ佇立し居りたるを以て參謀將校の一人は共にファイヌイに移乗する事を勧められたるも彼は之を辭せり斯くてファイヌイはスワロフの舷側を離れたる之れ午後五時三十分頃の事なりき、其より提督を移乗せしめたるファイヌイは我が巡洋艦に近づき信號士をして「提督は艦隊の司令をネボガトフ提督に譲る」及び「提督は負傷して驅逐艦に在り」との信號を爲さしめたり此の外に同一信號命令は海上信號旗を以て近傍に在りし巡洋艦並に驅逐艦にも傳へられたり、ネボガトフ坐乗のニコライ一世は遠隔の位置に在り此の信號を解するを得ざりしかばヘズウブレーチヌイをしてニコライ一世に赴かして艦隊を浦鹽に導く可き旨を音聲を以て傳ふ可しと命せられたりファイヌイはドミトリイドンスコイの傍らに従ふ事となれり、七時半頃にロゼストウエンスキイ提督は始めて生氣附きて幕僚中に驅逐艦内に救助せられざる者あるを識り驅逐艦ヘドウイをして再びスワロフに赴き乗員を救助す可き事を命せり然し後に聞けば既にスワロフの所在を識るを得ざりしとの事なりしが其實既に敵の水雷艇に轟沈せられたりしなり。

(五十六) 提督投降の決議驅逐艦の撃沈

斯くてロゼストウエンスキイ提督並に其の幕僚を移乗せしめたる驅逐艦ファイヌイはドミトリイドンスコイに追従して最初は南方の針路を取り後ち西方に向ひて更に針路を西北に取りて航進せり薄暮に至りてファイヌイの機關に異狀を來して航走頗る困難を極め遂にドンスコイの艦影を暮靄の裡に失へりファイヌイは夜半一時頃に北方の航路を指して進み黎明まで此の針路を取らんとせり。然るに驅逐艦ファイヌイの一箇の汽鐘は燒毀して機關は百三十回以上の廻轉を爲す能はず且つ艦内の貯炭は到底浦鹽までの量に充たず提督移乗の驅逐艦も進退谷まり今は最後の處理を爲さる可らざるに至れり、茲に於てファイヌイの艦内に會議を開きて此の會議に於て驅逐艦は陸岸に航し其處に提督を上陸せしめ驅逐艦は自沈す可しと決定せり又若し航走の途中に於て敵の巡洋艦に邂逅する場合には我が提督を砲撃せしめざる爲に白旗並に赤十字旗を揚げ驅逐艦は投降する事に決定せり、而して敵の巡洋艦に邂逅するとせば必ず朝鮮沿岸なるべきを以て僅に六十五哩に過ぎざるも朝鮮に航進せず日本に陸岸に赴く事に決せり天明に至りて西方に三本マストの二隻の日本巡洋艦を認めれば之を逃避するが爲に舵を東方に轉じたり、日本の巡洋艦はファイヌイを認めざる者の如く自己の取り來れる針路を取りて航走を續けたるを認めれば同艦の方を指して赴きたり驅逐艦ファイヌイはドンスコイを招く信號を掲げたるもドン

スコイはアイヌイを以て日本の驅逐艦と誤りて之を避くる爲に東方に航走せり、アイヌイは更に無線電信を以てドンスコイを招きしかばドンスコイは始て艦首を轉じて後進し來れり此の時アイヌイの艦長は其の操縦自在ならず到底浦鹽に到着するを得ざる旨を上申し且つ提督にトミトリイドンスコイに移乗せられん事を勧めたり然るにロゼストウエンスキイ提督は艦長の勧めに従はずして驅逐艦ベトウエイに轉乗する事に決せりベトウエイは二晝夜だけは充分なる石炭を有し且つ機關の運轉も完全なる事を報告せられたり。

其よりドミトリイドンスコイは端艇を下しロゼストウエンスキイ提督と其の幕僚とをアイヌイよりベドウエイに轉乗せしめベトウエイはグロスツトと共に航走し去れり、後ちトミトリイドンスコイはアイヌイより同艦が救助したるオスラビヤの乗員をドンスコイに轉乗せしめて之を收容し斯くて巡洋艦は驅逐艦と共に航走を續けたり。

間もなくして地平線上に數艘の日本の水雷艇を認めたり左れど其等水雷艇は忽ち見えすなれり然るに後ち間もなく驅逐艦アイヌイは到底ドンスコイに續航するを得ざる事明かになりしかば信號を以て此の事をドンスコイに通報せり、トンスコイは機關を止めて停船せしかばアイヌイは其の舷側に赴きて兩艦の間に概要の相談を爲して乗員をアイヌイより移乗せしめ後ち沈没せしむる事に決定して之を實行せり然るにアイヌイ爆沈の爲に仕掛けたる火薬は其の効を奏せざりしを以てドンスコイはアイヌイに八發の砲撃を加へて午前十一時半に齶陵嶋の南方七十哩の海底に之を撃沈せり。

（五十七） 健氣なる驅逐艦

驅逐艦グロムキーにはケルン中佐艦長として乗組み海戦の當夜は終宵ウラヂミルモノマフに従て航走せり是れモノマフは既に敵の水雷の爲に損害を受け居りしを以つて若し其沈没の場合には其乗員を救助せざる可らざるを以てなり、天明に至りてモノマフは兎に角に陸岸まで航走し得べきこと明かになりしかばグロムキーはモノマフを離れて浦鹽を指し航進せり然るに間もなく地平線上に二隻の日本水雷艇現出し全速力を以て之を追撃せり、敵水雷艇の一隻は可なり大なる船にて六百噸位のもの他の一隻は普通の中位の噸數なり此の二隻の日本水雷艇は疾驅してグロムキーに迫り稍や大間隔を持って砲火を開けり想ふにグロムキーの水雷と機關砲とを恐れたるものなる可しグロムキーは到底逃避の道なきを認めケルン大佐は戦闘を爲す事に決し俄然艦首を敵の方向に轉じて之を邀撃せり同艦は日本の大形水雷艇に向て急進せしかば敵は意外なる此の運動に辟易して一時機關の運動を止めたりグロムキーはケープルの間隔より日本の水雷艇に水雷を發射せり然るに不幸にして其水雷は只だ演習中に屢々實驗し艦長の再三上申したると同様なる悲む可き不結果に終りたり即ち其の結果は水雷に填裝せる爆薬の不足若くは粗惡なるために水雷は勢なく發射管を滑り出で水雷の尾端を艦の端角に觸れたるのみにて何等の効も奏せざりき、日本の水雷艇は發射管内に水雷を裝填し置かざりきグロムキーは最初敵の大水雷艇を陸岸の方に壓迫する様に有利なる運動を爲せり、斯の如くにしてグロムキーは更に又一發の水雷を發射したるも此時二隻の敵艇は既に全速力を以て航走せしかば水雷は空しく其の艦尾の

下を通過して沈下せり而して間もなく同艦は反て敵彈の爲に三箇の汽罐を破壊せられ汽罐の側に在りし火夫は悉く斃され又備砲も悉く敵彈の爲に破壊され今は射撃も爲し得ざるに至り將に沈没せんとせり、日本人は此の状を見て我が舷側に近つかんとしたる如くなりしもグロムキーの乗員が悉く甲板の上に起立し居るを認め是れ衝突接戦を爲さんとする者と推測したるにや若干サーゼンの近距離よりグロムキーの甲板に在りし乗員に猛烈なる砲火を浴せかけたり依て艦長は各自自由の救助を圖る可き旨を命せしかば乗員は舷側より海水に躍込みたり艦長ケルン中佐は此時既に重傷を負ひ續て少尉試補セラシニコフは敵彈の爲に斃されたり、十一時頃にグロムキーが全く沈没するや否や日本の水雷艇は直に我が乗員の海上に浮流し居る者の救助を爲せり。先是乗員が海上に浮流し居りし時一人の水兵は日本の水雷艇の舷側近くにて鱧の爲に捕はれし椿事ありたり日本の水兵は此の椿事を認め大音を出して叫び鱧を逐はんとて水面を打ちたりとの事なり、對馬海戦の際に鱧を見たりとの談は他乗員よりも屢々聞きし所なり然し鱧は此の方面の海中には生息せざる可しと想はるゝを以て是れ或は南方の海より艦隊に尾し來れるものに非ざるかグロムキーの乗員の談話は此の想像を確むるものなる可し。驅逐艦ヘズウフレーチヌイの乗員は一人も残らず滅亡したるを以て同艦最期の情況は毫も知るを得ず若し同艦の運命に就きて少しにても知れる者ありとせば是れ日本の巡洋艦千歳の艦長一人のみなる可し、巡洋艦千歳は東郷提督の報告に依れば油津灣より歸航の途中露國の驅逐艦に邂逅し之を撃沈せることを知るに足れり。(大尾)

日本海軍公報

日本海 の 海 戦 公 報

五月二十七、二十八日

第 一 報

(二十七日以來繼續中なる日本海海戦に關する聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

第 一

(二十七日午後著電)

敵艦見ゆとの警報に接し聯合艦隊は直に出動之を撃滅せんとす本日天候晴朗なれども波高し

第 二

(同日夜著電)

聯合艦隊は本日沖の嶋附近に於て敵艦隊を邀撃し大に之を破り敵艦少くも四隻を撃沈し其他には多大の損害を與へたり我艦隊には損害少し驅逐隊水雷艇隊は日没より襲撃を執行せり

第 三

(二十九日午前著電)

聯合艦隊の主力は二十七日以來殘敵に對して追撃を續行し二十八日竹嶋附近に於て敵艦「ニコライ」第一世(戰艦)、「アリヨール」(戰艦)、「セニャーウイン」(裝甲海防艦)、「アブラキシ」(裝甲海防艦)及「イツムルト」(巡洋艦)より成る一群に會して之を攻撃せしに「イツムルド」は分離して逃去せしか他の四艦は須臾にして降伏せり我艦隊には損害なし

捕虜の言に依れば二十七日の戦闘に於て沈没したる敵艦は「ボロヂノ」(戰艦)、「アレキサダー」第三世(戰艦)、「ゼムチユーク」(巡洋艦)外三隻なりと云ふ

捕虜海軍少將ネボガトフ以下約二千

第一 第二 報

(三十日午後 著 聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

五月二十七日午後より翌二十八日に亘り沖の嶋附近より鬱陵嶋附近までの海戦を「日本海海戦」と呼稱す

第二

(同)

上)

聯合艦隊の大部は前に電報したる如く一昨二十八日午後竹嶋附近に於て敗殘敵艦隊の主力を包圍攻撃して其降伏を受け追撃を中止し之か處分に從事中午後三時頃更に南西方面に敵艦「アドミラル、ウシヤークコフ」の北走するを發見し警手、八雲は直に之を追撃し先づ降伏を勸告せしも敵之に應せざりし故午後六時過已むを得ず之を撃沈し其生存者三百餘名を救助收容せり又午後五時北西に敵艦「ドミトリ、ドンスコイ」を發見し第四戰隊及第二驅逐隊之に追及し日没後に至るまで猛烈に砲撃せしも撃沈するに至らず夜に至り第二驅逐隊も之を襲撃し其結果不明なりしかば昨日に至り第二驅逐隊は「ドミトリ、ドンスコイ」の鬱陵嶋の東南岸に擱坐せるを發見し目下春日と共に其處分中なり又漣は一昨二十八日夕刻鬱陵嶋南方に於て敵の驅逐艦「ビエドール」を捕獲せり同艦には二十七日の戦闘中沈没したる敵の旗艦「クニヤージ、スワロフ」より敵艦隊司令長官ロゼストウエンスキー中將、エンクイスト(？)少將及幕僚以下八十餘名移乘し居りしを以て悉く之を捕虜とせり

右兩將官は共に重傷なり又千歳は一昨二十八日朝北航の途上敵の驅逐艦一隻を發見して之を撃沈し新高及叢雲は同日正午頃竹邊灣附近にて敵の驅逐艦一隻を撃破して擱岸せしめたるの報告に接せり

今までに得たる諸報告及捕虜の言を綜合するに二十七日より二十八日に亘れる戦闘に於て撃沈し得たる敵艦は「クニヤージ、スワロフ」、「アレキサンダー三世」、「ボロヂノ」、「ドミトリ、ドンスコイ」、「アドミラル、ナヒーモフ」、「ウラジミール、モノマフ」、「ゼムチユグ」、「アドミラル、ウシヤークコフ」、假裝巡洋艦一隻、驅逐艦二隻にして捕獲艦は「ニコライ」一世「アリョール」、「アドミラル、アブラキシン」、「アドミラル、セニヤークウイン」、「ビエードウイ」の五隻なり尙ほ捕虜の言に依れば敵の戦艦「オスラーピヤ」は二十七日午後三時、四時の交大破の後沈没し又「ナワリン」も沈没せりと云ふ其外第三戰隊は同日日没頃敵艦「アルマトズ」か進退自由を失ひ將に沈没せんとするを目撃せしと云ふも暫く疑を存し未だ報告に接せざる二十七日日没後より決行したる我驅逐隊、水雷艇隊襲撃の成果と共に之を後日に調査報告せんとす

我艦隊諸艦艇の損害に就きては未だ詳細の報告に接せざるも本職の視界内に在りしものには一も大破したるものなく孰も尙ほ作戰任務に従事しつゝあり死傷も未だ調査に暇なきも第一戰隊に於て將校以下四百餘名あり

依仁親王殿下は御無事に在らせられ三須司令官は二十七日の海戦に輕傷せり

第三 報

(同)

上)

「オスラービヤ」(戦艦)、「ナワリン」(戦艦)の沈没は確實なりと認む

(備考)戦「シソイウエリキエ」モ亦二十八日午前沈没セルノ確報ニ接セリ故ニ敵ノ損害ヲ計算スルコト左ノ如シ

戦艦「クニヤージ、スワロフ」(一三五一六噸)	撃沈	同「イムベラートル、ニコライ」第一世(九五九四噸)	捕獲
同「イムベラートル、アレキサンダー」第三世(一三五六噸)	撃沈	海防艦「クネラル、アドミラルアブラキシン」(四二六噸)	捕獲
同「ホロヂノ」(一三五一六噸)	撃沈	同「アドミラル、セニヤールウイン」(四九六〇噸)	捕獲
同「オスラービヤ」(一五六七四噸)	撃沈	驅逐艦「ビエードウイ」(三五〇噸)	捕獲
同「シソイウエリキエ」(一〇四〇〇噸)	撃沈	即チ敵ノ損害ヲ艦種ニ區別スレバ左ノ如シ	
同「ナワリン」(一〇二〇六噸)	撃沈	撃沈	捕獲
巡洋艦「アドミラル、ナローモフ」(八五二四噸)	撃沈	戦艦	計
同「ドミトリ、ドンスコイ」(六二〇〇噸)	撃沈	巡洋艦	六隻
同「ウラジミール、モノマフ」(五五九三噸)	撃沈	海防艦	一隻
同「スウエトラナ」(三七二七噸)	撃沈	特務船	二隻
同「ゼムチユーク」(三一〇三噸)	撃沈	驅逐艦	一隻
海防艦「アドミラル、ウシヤール」(四二二六噸)	撃沈	總計	十七隻
特務船「カムチャツカ」(七二〇七噸)	撃沈	噸數總計	十五万三千四百一十一噸
同「イルチツシエ」(七五〇七噸)	撃沈	右ノ外巡洋艦「アルマーズ」(三二八五噸)ハ沈没ノ疑アリ	
驅逐艦	三隻	捕虜中將ロセストウエンスキエ、少將ネガトフ少將、エンク	
戦艦「アッリール」(一三五一六噸)	捕獲	イスト(?)以下三千餘名	

第四報

(三十一日 聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

佐世保軍港に送りし各戦利艦は昨三十日夕刻までに其の乗員の陸送を了り全く我有に歸せりロゼスト

ウエンスキエ中將は海軍病院に收容せられたり前報告に戦利艦「ビエードウイ」の捕虜中にエンクウイ
スト少將あるを電報したれとも後右は全く無線電信の誤謬なるを知れり取消されたり

露國病院船「アッリール」、「カストロマ」の二隻抑留に關する聯合艦隊司令長官報告の要領

五月二十七日敵艦隊に従ひ朝鮮海峡に來れる露國病院船二隻は海牙條約違反の嫌疑あり且つ作戦上重
要の必要ありたるに依り一時之を抑留して翌二十八日佐世保軍港に引致せしめたり

第五報

(三十一日 聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

其後續々到達せる麾下各部隊よりの報告を綜合するに敵の戦艦「オスラービヤ」は二十七日海戦の初期に
大破して隊列を脱し午後三時過第一に沈没したること確實なり又戦艦「シソイウエリキエ」巡洋艦「アド
ミラル、ナヒモフ」及「ウラジミール、モノマフ」は已に二十七日の晝戦に撃破せられたる後同夜我艦
逐隊水雷艇隊の水雷攻撃に大破し全く戦闘航海力を失ひ對馬附近に漂流し翌朝に至り我假裝巡洋艦信
濃丸、八幡丸臺南丸、佐渡丸等之を發見して將に捕獲せんとせしも幾何もなく皆沈没せり其生存者約
九十五名は右假裝巡洋艦及沿岸民家に收容せられたり又戦艦「ナワリン」は二十七日日没後我水雷艇隊
攻撃の結果水雷四發命中し沈没せると其生存捕虜の言に依り確實なり又敵の巡洋艦「スウエトラナ」
は二十八日午前九時頃竹邊灣沖に於て新高、音羽の一隊に追撃せられ遂に撃沈せられたりとの新高艦
長の報告に接す其他敵艦「アウローラ」「アルマーズ」も二十七日夜の我水雷攻撃のため撃沈せられた
るの疑あり又前報告撃沈敵艦中に「ゼムチユーク」を算したれとも稍々疑あるを以て正確の調査を了る

まで暫らく之を取消す

茲に報告する所と前電報告を綜合すれば敵艦隊の主力たりし戦艦八隻、装甲巡洋艦三隻及装甲海防艦三隻は悉く撃沈又は捕獲せられ其手足たりし二等巡洋艦以下も大部分撃滅されたるを以て此一戦に於て敵艦隊は事實上已に全滅に歸せり我艦隊の損失に付ては其後の報告に依り二十七日の夜襲に際して三十四號艇三十五號艇及六十九號艇の三隻が敵の防禦砲火に撃沈せられ其乗員の大部分は僚艇に救助收容せられたるの外損失と認むべきものなく驅逐艦以上は其損害の程度豫想外に尠く一として今後の戦闘航海に支障あるものなし若し夫れ麾下將卒の死傷に至りては對戦の後初めより其多數を豫期したるに其後の死傷報告比較的僅少にして今日の所之を八百以内に算す是等死傷報告は到達次第著々電報し成べく速に家族の慰安に努めんとす

今回の海戦は彼我海軍共に殆ど其全力を捧げて對抗し戦場の局面頗る宏大なりしのみならず當日の天候濼氣深くして砲煙煤煙を混せざるも尙ほ展望五里以外に及ばず爲に晝戰に於ても麾下各部隊戦狀を本職の眼界に置くこと能はず加之戦闘二晝夜に亙り麾下各部隊は各方面に離散せる敵を追撃し今尙ほ戦後の諸任務に従事せるものさへあれば全軍の戦闘詳報に至りては尙ほ數日の後にあらざれば進達すること難し

第六報

(三十一日 聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

敵艦「ドミトリー、ドンスコイ」の生存者を收容して本日午後歸合したる春日艦長の報告に據れば「ドン

スコイ」は一昨二十九日朝排水を中止し「キングストン」を開き自ら沈没し其乗員は盡く鬱陵嶋に上陸したるものにして同艦の生存者中には沈没敵艦「オストラビヤ」及驅逐艦「フリースイ」よりの收容者あり右「フリースイ」は二十七日午後敵の旗艦沈没の前司令長官ロゼストウエンスキー以下幕僚を收容し此際一弾を受け尋て「オストラビヤ」の乗員二百餘名を收容したるも航海困難なるを以て司令長官以下幕僚を僚艦「ビエードウイ」に移し北方に遁走中二十八日朝「ドンスコイ」に邂逅し其乗員を悉く該艦に移し「フリースイ」は自ら沈没せりと云ふ又「オストラビヤ」生存者の言に據れば同艦は二十七日戦闘の初期第一の命中弾を司令塔に被り司令官フェルケルガム直に戦死し次で連續慘烈なる集弾を被り午後三時過僚艦の間に沈没せりと云ふ又「ドンスコイ」生存者の言に據れば二十七日晝戰中驅逐艦二隻が亂軍の中に沈没せるを目撃せりと之を事實とすれば敵驅逐艦の沈没したるもの前後六隻と爲れり

(備考)「フリースイ」はロゼストウエンスキー乗艦の上浦港に到達せる旨露國に於て公表せりと噂するものあり

第七報

(六月十一日 聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

一昨三十日北方の追撃より歸り直に南方の搜索に赴きたる撃手 八雲の一隊は只今(六月一日午後)歸著せり同隊は鳥島附近より上海航路の兩側を隈なく搜索せしも遂に敵影を見る能はざりしと云ふ又鳥村第二艦隊司令官(撃手坐乗)の報告に依れば二十七日の海戦中午後三時七分敵艦「ゼムチューグ」か撃手の前面約三千米突に於て同艦の猛射に遭ひ約十分時にして沈没せしこと確實なりと當時該艦火災に罹り其騰煙海面を掩ひ我他の諸艦よりは「ゼムチューグ」の沈没を目撃する能はざりしを以て先に暫く

疑を存し置きしものなり

第八報

(六月二十二日 聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

敵の特務艦船中去る二十七日の海戦に撃沈されたるは假裝巡洋艦「ウラル」、運送船「イルチッシュ」、工作船「カムチャッカ」外一隻なり右一隻は敵艦隊が給炭用として随伴したる曳船二隻中の一にして捕虜の言に據り其沈没したるを知れり

海戦當時戰場に現在せし敵の艦船中今日までに其行方不明なる者は二等巡洋艦「オレンジ」、「アウローラ」、三等巡洋艦「イズムールド」、「アルマーズ」特務艦三隻、驅逐艦二隻、曳船一隻にして其他は悉く撃滅又は捕獲せられたり右殘艦中「オレンジ」、「アウローラ」は二十七日の海戦中我第三戰隊、の射界内に入り時々火災を起せしを目撃したるを以て假令殘存せりとするも其の戰鬥力の回復には多數の日子を要すへしと信す

確定詳報

(聯合艦隊司令長官東郷平八郎報告)

天祐と神助に因り我聯合艦隊は五月二十七日敵の第二、第三艦隊と日本海に戦ふて遂に殆ど之を撃滅することを得たり始め敵艦隊の南洋に出現するや上命に基き當隊は豫め之を近海に迎撃するの計畫を定め朝鮮海峡に全力を集中して徐に敵の北行を待ちしか敵は一時安南沿岸に寄泊したるの後漸次北行し來りしを以て其我近海に到達すべき數日前より豫報の如く數隻の哨艦を南方警戒線に配備し各戰

列部隊は一切の戦備を整へ直に出動し得る姿勢を持して各々其根據地に泊在せり果然二十七日午前五時に至り南方哨艦の一隻信濃丸の無線電信は敵艦隊二〇三地點に見ゆ敵は東水道に向ふものゝ如しと警報し全軍勇躍直に發動し各部隊は豫定の部署に準して對敵行動を開始せり午前七時内方警戒線の左翼哨艦たりし和泉亦敵艦隊を發見して敵既に宇久嶋の北西二十五海里の地點に達し北東に航進するを報し巡洋艦隊(片岡中將直率)東郷(正路)戰隊續て出羽戰隊も午前十時、十一時の交壹歧、對馬の間に於て敵と觸接し爾後沖の嶋附近に至るまで此等の諸隊は時々敵の砲撃を受けしも終始能く之と觸接を保持し詳に時々刻々の敵情を電報せしかば此日海上濛氣深く展望五海里以外に及ばざりしも數十海里を隔つる敵影恰も眼界に映するか如く未だ敵を見ざる前既に敵の戦列部隊は其第二、第三艦隊の全力にして特務艦船約七隻を伴ふこと敵の陣形は二列縦陣にして其主力は右翼列の先頭に占位し特務艦船は後尾に續行せること又敵の速力は約十二節にして尙ほ北東に航進せると等を知り本職は之に依り我主力を以て午後二時頃沖の嶋附近に敵を迎へ先づ其左翼列先頭より撃破せんとする心算を立つるを得たり主力隊(主戰艦隊)東郷大將直率「裝甲巡洋艦隊」上村中將直率「瓜生戰隊及各驅逐隊」は正午頃既に沖の嶋北方約十海里に達し敵の左側に出んがため更に西方に針路を執りしか午後一時三十分頃出羽戰隊巡洋艦隊及東郷(正路)戰隊等も敵と觸接を保ちつゝ相前後して漸次に來り合し同時四十五分に至り正に我左舷南方數海里に始て敵影を發見せり敵は豫期の如く其右翼列の先頭に「ポロチノ」型戰艦四隻の主力艦隊を置き「オスラビヤ」「シンイペリキー」「ナワリン」「ナヒモフ」より成る一隊左翼列の先頭に占位し「ニコライ」一世外海防艦三隻より成る一隊之に次ぎ「ゼムチユーク」「イズムールド」の二艦は兩

列の間に介立して前方を警戒せる者の如く尙ほ其後方濃氣の中に「オレグ」「アウロラ」以下二三等巡洋艦の一隊「ドミトリドンスコイ」「ウラジミルモノマフ」其他特務艦等數裡に亘りて連綿航續するを仄に認むるを得たり是に於て全軍に戦闘開始を令し同時五十五分視界内に在る我全艦隊に對し皇國の興廢此の一戦に在り各員一層奮勵努力せよとの信號を掲揚せり而して主戦艦隊は少時南西に向首し敵と反航通過すると見せしか午後二時五分急に東に折れ其正面を變して斜に敵の先頭を壓迫し裝甲巡洋艦隊も續航して其後に運り出羽戦隊、瓜生戦隊、巡洋艦隊及東郷（正路）戦隊は豫定戰策に準し孰も南下して敵の後尾を衝けり之れを當日戦闘開始の際に於ける彼我の對勢とす

主力艦隊の戦況

敵の先頭部隊は主戦艦隊の壓迫を受けて稍々其右舷に轉舵し午後二時八分彼より砲火を開始せしかは我は暫く之に耐へて射距離六千米突に入るに及び猛烈に敵の兩先頭艦に集弾せり敵は之が爲益東南に擊壓せらるゝものゝ如く其左右兩列共に漸次東方に變針し自然に不規則なる單縦陣を形成して我と並航の姿勢を執り其左翼列の先頭艦たる「オストラビヤ」の如きは須臾にして擊破せられ大火災を起して戦列より脱せり此時に當り裝甲巡洋艦隊も既に盡く主戦艦隊の後方に列し我全隊の掩蔽砲火は射距離の短縮と共に益々顯著なる効果を呈し敵の旗艦「クニャーヂスワロフ」「二番艦皇帝」「アレキサンダー」三世も大火災に罹り戦列を離れ敵の陣形愈々亂れ後續の諸艦亦火災に罹れるもの多く其騰煙西風襲きて忽ち海上一面を蔽ひ濃氣と共に全く敵影を包み主戦艦隊の如きは爲に一時射撃を中止せるの状況なり又我軍に於ても各艦多少の損害を蒙り淺間の如きは後部水線に近く三弾を受けて舵機を損し且つ浸水甚

しく一時止むを得ず列外に落伍せしが幾もなく應急修理して再び戦列に入れり之れ午後二時四十五分に於る彼我主力の戦況にして勝敗は既に此間に決せり我主力隊は如此敵を南方に擊壓し煙霧の中敵影を發見する毎に緩除に之を砲撃しつゝ午後三時頃には既に敵の前路に出で約南東に向針しありしが敵は俄に北方に向首し我後尾を回りに北走せんとするが如きを以て主戦艦隊は急に左十六點に一齊回頭し日進を嚮導として北西に向ひ裝甲巡洋艦隊も其通跡を過ぎたる後正面を變じて之に續き再び敵を南方に擊壓し之を猛射し午後三時七分敵艦「ゼムチューグ」は裝甲巡洋艦隊の後方に突進し來りしも遂に我砲火に因り多大の損害を蒙り既に戦闘力を失ひたる「オストラビヤ」も同時十分に沈没し孤立せし「クニャーヂ、スワロフ」は益々大破して其一橋二煙突を失ひ全艦煙焰に包まれて操縦する能はず混亂せる爾餘の諸敵艦も更に多大の損害を受けつゝ又其針路を東方に採れり是に於て主戦艦隊も亦一齊に右十六點に回頭し裝甲巡洋艦隊之に次ぎ遁るを追て益々敗敵を掩撃し時々機を見て水雷發射をも試み午後四時四十五分頃に至るまで主隊の戦闘に就ては別に著しき現象なく始終敵を南方に壓して砲撃を繼續したるに過ぎず此間壯烈の事績として特記すべきは千早及廣瀬（順太郎）驅逐隊が午後三時四十分の頃鈴木（貫太郎）驅逐隊が午後四時四十五分の頃敵の廢艦「スワロフ」に對し勇敢なる水雷攻撃を決行したることにて前者の奏効は確實ならざりしも後者より發せし一水雷は敵艦の左舷後部に命中し須臾にして艦體十度許傾斜するを見たり此兩回の襲撃中廣瀬驅逐隊の不知火及鈴木驅逐隊の朝潮は附近敵艦より猛射せられ共に一弾を受けて一時危殆に陥りしも幸にして遂に無事なることを得たり午後四時四十分の頃に至り敵は北方に血路を開くを斷念せしにや漸次南方に向て遁走するものゝ如く依て我主隊は

裝甲巡洋艦隊を先頭とし之を追撃せしが少時にして敵遂に影を煙霧の中に失し南下すること約八海里行く行く我右方に離散彷徨せる敵の二等巡洋艦以下特務艦船等を緩射し午後五時三十分主力艦隊は再び針路を北方に執りて敵の主力を索め裝甲巡洋艦隊は南西方に折れて敵の巡洋艦に迫り爾後日没に至るまで此の兩戦隊は分離して各別の行動を執り又相見る能はざりし

主戦艦隊は午後五時四十分頃其左近距離に在りし敵の特務艦「ウラル」に一撃を加へて直に之を撃沈し尙ほ北方に索戦し航進せる際左舷艦首に當り敵主力の殘艦約六隻の一群が北東に向ひ遁走しつゝあるを發見し直に近きて之れと並航戦を再始し漸次敵の前方に出で、其先頭を撃壓せしかば敵は始め北東の針路を採りしも次第に西方に屈折し遂には北西に向針するに至れり此並航戦は午後六時より日没まで連續し敵は大破の餘其砲力減少せるに反し我沈著なる射撃は益々其威力を逞ふし「アレキサンダー」三世と見えたる敵艦は早く列外に出でて後方に落伍し先頭に占位せし「ポロヂノ」型戦艦は午後六時四十分頃より大火災を起し七時二十三分に至り俄然爆煙に包まれて瞬時に沈没せり蓋し火災の彈藥庫に及びしならんか又當時南方に在りて敵の巡洋艦隊を北方に追撃しつゝありし裝甲巡洋艦隊の諸艦は己に傾斜して進退自由ならざる「ポロヂノ」型敵艦一隻が午後七時七分敵艦「ナヒモフ」の側に來り遂に顛覆沈没せるを目撃せり後日捕虜の言に依り之れ即ち「アレキサントル」三世にして主戦艦隊の見たるものは「ポロヂノ」なりしを知るを得たり

此時夕陽已に暮き我が驅逐隊、水雷艇隊は東南北の三面より漸次に迫り已に敵に襲撃準備姿勢を執れるを以つて主戦艦隊は次第に敵に對する壓迫を弛めて日没(午後七時二十八分)と共に東方に變針し同

時に本職は龍田をして全軍北航して明朝樽陵島に集合すへしと傳令せしめ茲に當日の晝戦を結了せり

出羽、瓜生戦隊、巡洋艦隊及東郷(正路)戦隊の戦況

午後二時戦闘開始の令下に出羽、瓜生戦隊、巡洋艦隊東郷戦隊は孰も我主力艦隊と分離し敵を左舷に見て反航南下し豫定戦策に準じて敵の後尾に占位せる特務部隊及「オレグ」「アウロラ」「スウイートラナ」「アルマーズ」「トミトリトンスコイ」「ウラヂミルモノマフ」等の巡洋艦等を脅威迫撃せり出羽、瓜生戦隊は終始共同連繫して午後二時四十五分より先づ敵の巡洋艦に對して反航戦を開始し漸次敵の後尾を旋撃して其右方に出で更に並航戦を試み爾後優速力を利用して機宜我正面を變して或は敵の左に顯れ又は右に廻り攻撃を持續すること約三十分にして敵の後方部隊は漸次に動搖潰亂し其の特務艦船の如きは遂に右往左往して爲す所を知らざるの常態に陥れり此間午後三時過ぐるの頃「アウロラ」と見えたる敵艦單獨敵中より突進し來りしも我が猛射に多大の損傷を負ふて撃退せられ又午後三時四十分頃突撃し來りたる敵の驅逐艦三隻も爲す所なくして撃攘せられたり

出羽、瓜生戦隊協力攻撃の効果は午後四時の交に及んで著しく發展し敵の後方部隊は全く潰亂して箇々分裂し其諸艦船皆多少の損害を受けたるものゝ如く特務艦船中には既に操縦の自在を缺くるものあるを見るに至れり

瓜生戦隊は午後四時二十分頃三橋二煙突を有する敵の特務艦船一隻(或は「アナツール」ならん)か一方に孤立するを認め直に近きて撃沈し尋て四橋一煙突の特務艦船(或は「イルチツシユ」ならん)を猛射して殆ど之を撃破せり此頃より巡洋艦隊、東郷艦隊も來り加り出羽、瓜生戦隊と協同して共に潰亂せる

艦の巡洋艦及特務艦船を掩撃しつゝありしが午後四時四十分の頃北方より我が主隊に撃壓せられたる敵の戦艦(或は海防艦)四隻南下し來りて其巡洋艦に合力せしかば瓜生戦隊巡洋艦隊の如きは少時距離に於て之と對戦するの苦境に陥り孰も多少の損害を受けしも幸に大ならざることを得たり之より先き出羽戦隊の旗艦笠置は其左舷炭庫水線下に一弾を蒙りしが爾來浸水漸く増加し其應急修理のため波靜なる所に行くの止むを得ざるに至り出羽司令官は自ら笠置、千歳を率ひ麾下の他艦は之を一時瓜生司令官の指揮の下に屬せしめ午後一時油谷灣に赴き其將旗を千歳に移し夜に入りて出港北行せしも笠置は修理に時間を要し遂に翌日の追撃に参加する能はざりし

又瓜生戦隊の旗艦浪速も後部水線に敵弾を蒙り爲に午後五時十分同戦隊は一時避戦して其損所の應急修理を爲せり

此時に當り敵は南北兩方面共に既に全軍潰亂滅裂の悲境に在りしを以て午後五時十分の頃裝甲巡洋艦隊が我主隊と分離して此方面に來り南方より敵の巡洋艦を追撃するに同時に敵は群を爲して悉く北方に遁走し瓜生艦隊巡洋艦隊及、東郷戦隊も共に之を追撃せしが其途上に於て既に進退の自由を失せる敵の廢艦「クニヤージ、スワロフ」及「工作船」カムチャツカ」を發見し巡洋艦隊、東郷戦隊は直に其撃滅に轉じて午後七時十分「カムチャツカ」を撃沈し尋て巡洋艦隊に隨伴せる富士本水雷艇隊は突進して「クニヤージ、スワロフ」を襲撃し同艦は尙ほ艦尾の小砲一門を以て最終の抵抗を試みしも遂に我が水雷二發の下に沈没せり時に午後七時二十分なり幾もなく此等の諸戦隊は鬱陵島集合の電令に接し孰も戦を止めて北東に向進せり

各驅逐隊及水雷艇隊の戦況

二十七日の夜戦は晝戦の終結後直に各驅逐隊及水雷艇隊に依り猛烈果敢に開始せられたり

此日朝來南西の強風浪を揚ぐると高く小艇の操縦大に困難なるを認め本職が直率せし水雷艇隊の如きは晝戦開始に先ち盡く三浦灣に避泊せし程にて夕刻に至りて風較々和ぎしも浪尙ほ靜らず洋中の水雷攻撃は我に不利尠からざるの状況なりしも然も各驅逐隊及艇隊は此一遇の時機を失するを恐れ皆風濤を冒して日没前に來り會し各々先を争ふて敵に當り藤本驅逐隊は北方より矢島驅逐隊及河瀬艇隊は北東方向より敵主力の先頭を壓し吉島驅逐隊は東方より廣瀬(順太郎)驅逐隊は南東より其後尾に迫り福田(昌輝)大瀧、近藤(常松)青山、河田の艇隊等は南方より敵の主力部隊及其左後に併行せる巡洋艦の一群に追尾し日没の頃次第に三面包圍の形勢を爲せり敵は此勢威に屈したるにや日没後倉皇南西に避け更に東方に變針したるものゝ如く午後八時十五分矢島驅逐隊が第一撃を敵主力艦隊の先頭に加へたるを始として各驅逐隊水雷艇隊一時に突進して敵の周圍に蝟集し午後十一時頃に至るまで連續激烈なる肉薄襲撃を決行したり敵は日没より探照砲火を以て極力防戦せしも遂に此攻撃に耐はず其僚艦相失して四分五烈の情態となり各々血路を求めて任意に運動せしかば我襲撃隊の追躡と共に茲に一場の大混戦を現出し少くも敵の戦艦「ソニイベリキ」裝甲巡洋艦「アドミラルナヒモフ」及「モノマフ」の三隻は此間我水雷に罹りて全く其戦闘航海力を失ひ又我軍に於ても福田艇隊の第六十九號艇(司令艇)青山艇隊の第三十四號艇(司令艇)及河田艇隊の第三十五號艇の三隻は襲撃の際敵弾の爲め撃沈せられ驅逐艦春雨、曉、雷夕霧、並に水雷艇鷲、第六十八號第三十三號艇等は敵弾又は衝觸等のために多少の損害を被り

爾後一時戦闘に参加し難く死傷も又比較的少しとせず就中福田、青山及河田艇隊の死傷最も多し但し沈没水雷艇三隻の乗員は友艇雁、第三十一號及第六十一號艇等に依り救助收容せられたり

後日捕虜の言を聞くに當夜水雷攻撃の猛烈なりしは殆んど言語に絶し我艦艇連續肉薄し來りしを以て其應接に暇なく且其距離餘り近き爲め備砲俯角の度を過ぎ照準する能はざりしと云ふ

前記のものゝ外鈴木(貫太郎)驅逐隊及自餘の水雷艇隊は當夜他方面に索敵せしが鈴木驅逐隊は二十八日午前二時の比韓崎の北東微東約二十七海里の地點にて敵艦二隻の北走するを發見して直に之を襲撃し其一隻を轟沈せり後日生存捕虜の言に依れば轟沈されたる此敵艦は敵艦「ナワリン」にして同艦は兩舷に連續二發死の水雷命中し少時にして沈没せりと云ふ自餘の諸艇隊は終夜各方面を搜索せしも遂に獲る所なかりし

二十八日の一般戦況

二十八日黎明前日來の濛氣拭ふが如く主戦艦隊、装甲巡洋艦隊は既に鬱陵島の南方約二十海里に達し爾餘の戦隊並に前夜の襲撃を果したる各驅逐隊等も各航路を異にし順次後方より集合の途上に在り午前五時二十分本職は敵の退路を遮断する爲め麾下巡洋艦隊を以て東西に搜索列を張らしめんとする際後方約六十海里に占位して北進しつゝありし巡洋艦隊は早くも敵影を發見して東方に當り艦隊の煤煙數條あるを警報す幾何もなく同戦隊は敵に近づき復た報じて曰く敵は戦艦四隻(後に至り二隻は海防艦たるを知る)巡洋艦二隻より成り今北東に向針すと是れ問はずして殘敵の主力たるや瞭なり此に於て主戦艦隊、装甲巡洋艦隊は其針路を反轉し漸次東方に向ひて敵の前路を扼し東郷、瓜生戦隊も亦巡

洋艦隊に合して敵の後方を抑へ午前十時三十分の頃南方約十八海里の地點に於て全く此敵を包圍せり敵は即ち戦艦「ニコライ」一世、「アリヨール」、海防艦「ゲネラル、アドミラル、アブラキシン」、アドミラル、セニャーピン」及巡洋艦「イズムルード」の五隻にして他の一隻の巡洋艦は遙に南方に後れて當時其影を失す固より敗餘の敵艦已に多大の損傷を負へるのみならず我優勢に抵抗し得べきにあらざれば主戦艦隊、装甲巡洋艦隊が先づ砲火を開くや須臾にして敵艦隊司令官ネボカトフ少將は其部下と共に降意を表し本職は特に其將校以上に帶劍を許して之を受けたり然るに敵艦「イズムルード」のみは降伏に先ち其快速力を以て南方に遁れ我東郷戦隊に遮られて復東方に走れり此時油谷灣より歸港したる千歳も其朝途上に於て敵の驅逐艦一隻を撃沈したる後此地に來り會し直に轉じて「イズムルード」に追尾せしが遂に及ばずして之れを北方に逸せり

是より先き瓜生戦隊が北航の途上に在るとき午前七時の頃西方に一隻の敵影を發見し音羽、新高の一小队を有馬音羽艦長の指揮の下に之が撃滅のため分派せしが同隊は午前九時に至りて漸く敵に近接し其敵艦「スウェトラナー」が一驅逐艦を伴へるものなるを知り益々之を追窮し戰鬥約一時間の後午前十一時六分竹邊灣沖に於て全く「スウェトラナー」を撃沈し尙新高は其時來會したる驅逐艦叢雲と共に殘れる敵の驅逐艦「ブイストリー」を追撃し午前十一時五十分遂に之を竹邊灣の北方約五海里の無名灣に擱岸破滅せしめたり而して右二敵艦の生存乗員は我特務艦亞米利加丸及春日丸に依り悉く救助收容せられたり

敵の降伏を受けたる聯合艦隊の大部は爾後尙其地附近に漂泊して敵艦四隻の捕獲處分に從事しつゝあ

りしが午後二時頃南方より戦艦「アドミラル、ウシャーコフ」の来るを發見し警手、八雲の一隊は直に之に向ひ午後五時過其南走するを追及して先づ降伏を勸告せしも之に應せず反て彼より砲火を開きしかば止むを得ず砲撃して遂に之を撃沈し其生存者約三百餘名を救助收容せり又驅逐艦漣、陽炎は午後三時三十分の頃鬱陵島の南西約四十海里に於て東方より遁走し來る敵の驅逐艦二隻を發見し極力之を北西に追躡し午後四時四十五分追及して戦闘を開始せしに敵の後續驅逐艦は白旗を掲げて降意を表せり依て漣は直に之を捕獲せしに此驅逐艦は「ビエドゥイ」にして敵艦隊司令長官ロゼストウエンスキー中將及其幕僚の移乘し居るを知り其乗員と共に之を捕虜と爲せり尙陽炎は他の驅逐艦を追撃して午後六時三十分及びひしも遂に之を北方に逸せり又午後五時頃西方に索敵したる瓜生戦隊及矢島驅逐隊は敵艦「ドミトリ、ドンスコイ」の北走するを發見し之を追尾して午後七時鬱陵島の南約三十海里に至りし頃恰も好し竹邊灣方向より來會しつゝありし音羽、新高の一隊並に驅逐艦朝霧、白雲、吹雪等が既に西方より敵に迫りて砲撃を開始し瓜生戦隊と共に之を挾撃するの好位を制し左右相待て日没後まで之を猛撃し殆ど敵を撃破し得たるも未だ撃沈するに至らずして遂に夜に入り其影を失せり此攻撃中止と共に吹雪及矢島驅逐隊等連續之を襲撃し其效果不明なりしも翌朝に至り「ドミトリ、ドンスコイ」は鬱陵島の東南岸に漂ひ遂に沈没したるを發見せり而して同島に上陸したる其の生存者は春日、吹雪等にて救助收容せられたり

聯合艦隊の大部が北方追撃の戦果を收むるに汲々たる際南方前日の戰場に於ても亦相應の殘獲ありたり此日早朝戰場掃除の任務を持って出發したる特務艦信濃丸、臺南丸、及八幡丸は韓崎の北東約三十海里の地點に於て戦艦「シソイ、ベリキヤ」が前夜の水雷攻撃に傷き將に沈没せんとするを發見し之が捕獲の手續を了して其乗員を救助收容せり而して該艦は午前十一時零五分終に沈没せり又驅逐艦不知火特務艦佐渡丸も午前五時三十分頃對馬琴崎の東方約五海里に於て敵艦「アドミラル、ナヒモフ」が沈没に垂んとするに會し續て又た敵艦「ウラジミル、モノマフ」が著しく傾斜して其附近に來るを發見し孰も佐渡丸にて捕獲處分を爲せしに二艦共に大破して浸水甚しく遂に其乗員を救助し得たる後午前十時の交相前後して沈没せり其時又敵の驅逐艦「グロムキヤ」も此附近に來りしか遽に北方に遁逃せしを以て不知火は直に之を追撃して蔚山沖に至り午前十一時三十分頃水雷艇六十三號と協力攻撃し敵砲の沈黙するに及んで之を捕獲し其生存乗員を捕虜とせり

該艦も亦大破して遂に午後零時四十三分に沈没したり其他麾下砲艦特務艦等にて戰場附近の沿岸等を搜索して救助收容し得たる撃沈敵艦の乗員尠からず戦利艦五隻の捕虜と合して其數殆ど六千に達す以上は五月二十七日午後より二十八日午後に亘れる海戦の經過にして其後當隊の數部は尙ほ遠く南方に敵を搜索せしも遂に又其隻影を見ず日本海を通過せんとせし敵艦隊約三十八隻にして我撃滅又は捕獲に洩れたりと認むるものは巡洋艦、驅逐艦及特務艦各數隻に過ぎず而して此の二日間の戦闘に於て我艦隊の失ひたる所は水雷艇三隻のみにして其他多少の損害を蒙りたるものあるも一として今後の役に支障あるものなし又死傷は全軍を通し將校以下戦死百十六名負傷五百三十八名にして其細別は別に報告せるが如し

此對戦に於ける敵の兵力我と大差あるにあらず敵の將卒も亦其祖國のために極力奮闘したるを認む然

も我聯合艦隊が克く勝を制して前記の如き奇績を収め得たるものは一に
天皇陛下の御稜威の致す所にして固より人爲の能くすへきにあらず殊に我軍の損失死傷の僅少なりし
は歴代神靈の加護に依るものと信仰するの外なく嚮に敵に對し勇進敢戦したる麾下將卒も皆此成果を
見たるに及んで唯々感激の極言ふ所を知らざるものゝ如し

(備考) 戰場ニ類レタル敵艦船

戰艦	八隻	六隻 擊沈「クニヤマトツ、スプロフ」、「アレキサンダー三世」、「ホロヂノ」、「ゴスラビヤ」、「シツイベリキヤ」、「ナワリン」	二隻 捕獲「アリヨール」、「ニコノイ一世」	假裝巡洋艦	一隻 擊沈「ウラール」						
巡洋艦	九隻	四隻 擊沈「アドミラル、ナヒモフ」、「ドミトリイ、ドンスコイ」、「ウラチミル、モノマフ」、「スウエトフーナ」	三隻 馬尼刺ニ逃走抑留「アウロラ」、「ヤク」、「ゼムチユーク」	特務船	六隻	四隻 擊沈「カムチャツカ」、「イルチツシユ」、「アナスイリ」、「ルツシ」	二隻 上海へ逃入武裝解除「コンヤ」、「スウエリ」	病院船	二隻	抑留「アリヨール」、「カスツロマー」	内「カスツロ」
海防艦	三隻	二隻 捕獲「アブラキシン」、「セニヤウイン」	一隻 擊沈「ウシヤニコフ」	合計	八十三隻	二二隻 擊沈	六一隻 捕獲	五隻 逃走	二隻 不明	二隻 抑留	一隻 解放
驅逐艦	九隻	一隻 「ビエードウイ」	四隻 擊沈「ブイヌイ」、「アリストルイ」、「グロムスキ」	一隻 外一隻	一隻 上海へ逃入武裝解除「ホードルイ」	一隻 上海へ逃入武裝解除「ホードルイ」	一隻 逃逃ノ途損害ノ結果沈没「プレステヤチス」	一隻 不明	浦鹽へ逃入「プラーウイ」		

露帝ニコロ提督との電報往復并に ネボガトフ少將の電奏

ロヂエストウエンスキー提督は我軍に收容後左の電報を露國皇帝陛下に電奏方東郷聯合艦隊司令長官に依頼し來りたるを以て許可せられたり

ツアールスコエ邑に於て

皇帝陛下

五月十四日(五月二十七日)午後一時三十分對馬南端と日本との間に於て十二隻より成る日本艦隊主力及十二隻より尠らざる其巡洋艦隊と戦闘を開始せり

二時三十分スフロフは中央位を去るの止むを得ざるに至れり

三時三十分幕僚の一部及小臣は知覺を失ひたるまゝブイヌイに移されしが同艦には已に沈没せるオストラビヤ乗員一部を收容しありたり

艦隊の指揮權はネボガトフに委せりブイヌイは夜間艦隊と相失せしが翌朝二隻の驅逐艦を伴へるドンスコイに遭遇してオストラビヤの兵員を同艦に移し又小臣はベドウイに移されグロムキイと共に前進せり

十五日(二十八日)の夕刻ベドウイは二隻の日本驅逐艦に降伏せるを知れり

十七日(三十日)ベドウイは佐世保に引致せらる

十八日(三十一日)ネボガトフ佐世保に在りと聞く

侍從將官　　ロヂエストウエンスキー

露國皇帝陛下は在本邦佛國公使館を経て左の勅電をロヂエストウエンスキー提督に賜はりたり

六月九日午後發電

佛國公使　　ア　　ル　　マ　　ン

ロヂエストウエンスキー提督宛

唯今左の勅電に接候に付閣下に傳達致候

ロヂエストウエンスキー提督、朕は卿及艦隊の全員が露國及朕の爲に戦闘に臨み身命を抛ち誠實に其任務を盡したるを深く嘉みす上帝は卿に名譽の戦勝を冠するに至らざりしも卿等不朽の勇武は向後祖國の恒に誇とする所となるべし朕は卿が速かに全快せんことを望む神は卿等を慰藉せらるべし

ニ　　コ　　ラ　　イ

ネボガトフ少將は我國に收容後間もなく左の電報を露國皇帝陛下に電奏方東郷聯合艦隊司令長官に依頼し來りたるを以て許可せられたり

聖彼得堡

皇帝陛下

謹んで奏す前夜の激戦の後五月十五日(二十八日)戦艦ニコライ一世、セニヤールウイン、アブラキシン、アリヨール及巡洋艦イズムルードは浦潮斯徳に向け進航の途次二十七隻の日本軍艦(水雷艇を

算入せず)の爲に包圍せられたり彈丸の缺乏大砲の破損及アリヨールの戦闘力喪失の爲に敵艦隊に抵抗を試むるは絶對に不可能なる状態に在り且此上二千四百の人命を失ふは無益なるのみならず亦避くべからざりしを以て高速力を利用して逃走したるイズムルードを除くの外他の四隻は士官以上の帶劔を許し且士官以上は宣誓の上本國に歸還するを得る様日本政府に對し盡力すべしとの條件を以て降伏するの已むを得ざるに至れり右條件は日本皇帝陛下の寛大なる聖意に依り御承認を得たり小臣は右に付て陛下の御聖鑒を仰ぐ

戰　　死　　者	艦長	スミルノフ(ニコライ一世艦長)
海軍大尉男爵	ミルバフ	陸軍中佐
海軍少尉	シユービンスキー	テオドチエフ
下士卒	六名	陸軍大尉
		海軍少尉
重　　傷　　者	ユング(アリヨール艦長)	下士卒
艦長		軍艦アリヨールの死傷者を除く
負　　傷　　者		
		ネ　　ボ　　ガ　　ト　　フ

尙六月十二日に至り更にロヂエストウエンスキー提督よりもネボガトフ少將以下の降伏に關して左の電報を露國皇帝陛下に電奏方依頼し來りたるを以て許可せられたり

皇帝陛下

陛下の御親電を拜受したる數時間前に至り小臣は戦艦アリヨール、ニコライ、セニヤールウイン、アブ

ラキシンの五月十五日(二十八日)敵に降伏したるの報道に接せり小臣は此災害を聞き茫然爲す所を知らずこれ全く小臣一人の責任に對するものと思惟す小臣は茲に悲慘の状況に在る者に對し陛下の御聖鑒を切願す

ロヂエストウエンスキ

右二將官の電奏に對しては其後何等の勅答なし而してネボガトフ少將以下降服士官は露國皇帝陛下の允許なき以上は宣誓歸國を欲せざるに付又此上永く海軍の手に於て右將校等を留置くことは双方に取りて不便なるを以て將來露國皇帝陛下の勅許來りたるときは宣誓歸國を許すとの條件を附してネボガトフ少將以下投降士官を陸軍俘虜收容所に移すこととせり

明治三十八年六月二十五日

大本營海軍幕僚

我皇の仁慈

三十日海軍軍令部長子爵伊東祐享は敵旨を奉し左の通聯合艦隊司令長官東郷平八郎へ傳達せり
 天皇陛下は聯合艦隊司令長官東郷平八郎をして戦艦「イムペラトル」、ニコライ「第一世」、同「アリヨール」(髮甲海防艦)「ゲネラル」、アドミラル、アブラキシシ、同「アドミラルヒニャーウギン」を率ゐて投降せし敵將ネボガトフ以下に對し特に左の通履行せしむることを得せしめらる
 一、ネボガトフ少將に戦況報告書並に死傷者及捕虜と爲りたる者の名簿を露國皇帝に送呈するを

許すこと

二、前記四艦より收容せる捕虜士官以上に宣誓の上其故國に歸還することを許すこと

勅語 下る

三十日聯合艦隊司令長官東郷平八郎へ左の勅語を賜りたり

聯合艦隊は敵艦隊を朝鮮海峡に邀撃し奮戦數日遂に之を殲滅して空前の偉功を奏したり

朕は汝等の忠烈に依り祖宗の神靈に對ふるを得るを憚ふ惟ふに前途尙遼遠なり汝等愈よ奮勵して以て戦果を全ふせよ

奉 答

日本海の戦捷に對し特に優渥なる

勅語を賜はり臣等感激の至りに堪へず此海戦豫期以上の成果を見るに至りたるは一に陛下御稜威の普及ひ歴代神靈の加護に依るものにして固より人爲の能くすべき所にあらず臣等唯々益々奮勵して犬馬の勞を盡し以て皇謨を翼成せんことを期す

明治三十八年五月三十日

聯合艦隊司令長官 東郷平八郎

同日海軍へ左の勅語を賜りたり

我海軍は籌畫攻戰共に宜しきを得中外相待て敵の艦隊を殲滅し以て朕が望に副へり朕深く其偉功を嘉尙す汝等益す努力して大成を期せよ

奉 答

謹て奏す

臣 權 兵 衛

陛下の御稜威に依り帝國海軍か敵の艦隊を殲滅したるに對し茲に優渥なる勅語を賜ふ臣等感激の至に堪へす尙ほ益々奮勵以て

聖旨に副ひ奉らむことを期す臣權兵衛誠恐誠懼海軍を代表し謹て奉答す

明治三十八年五月三十一日

海軍大臣 男爵 山 本 權 兵 衛

謹て奏す

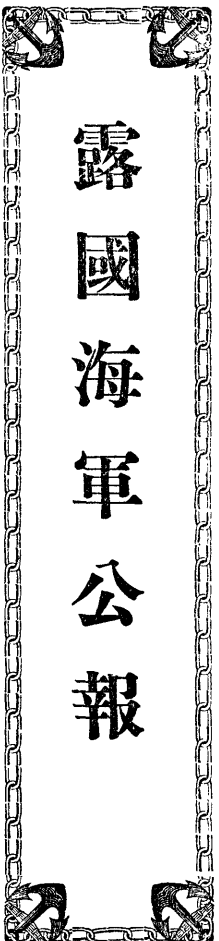
臣 祐 亨

陛下の御稜威に因り我海軍が敵艦隊を殲滅したるに對し優渥なる勅語を賜はり臣等感激の至に堪へす臣等益々奮勵誓て

聖旨に副ひ奉らんことを期す

明治三十八年五月三十一日

海軍軍令部長 子爵 伊 東 祐 亨



露提督の報告

明治三十八年四月二十三日露都着

(ロゲエストウエンスキー司令長官報告)

艦隊は未だ敵を見ず又麾下各艦は凡て完全にして兵員の健康及び士氣は共に優良なり

五月廿七、廿八日

日本海の海戦

(1)

(リネウヰツチ將軍五月廿五日附報告)

浦潮斯徳に入港したる巡洋艦アルマーズの艦長が報ずる所に依れば波羅的艦隊は五月廿七日對馬海峡に於て日本艦隊と交戦せりポロヂノ、オスラビヤ兩戰艦及び巡洋艦一隻は沈没しアレキサンダー三世は大に破損しロヂユストウエンスキー提督は開戦の初に負傷して他艦に移されアルマーズは艦隊より離れたる戦争は夜に入りて繼續せられたるも其結果明かならず

(2)

(驥 逐 艦 アラウイ 艦長
ツルノ、ウオ 大尉 報告)

本艦は五月二十七日午前九時艦隊と分れたるが當時オスラビヤ及スワローフ型一隻を除き他の諸戰艦は戰陣を作り快速力にて航進せるを認めたり午後四時本船は猛烈なる十字火を受け六時砲弾は本艦の艦橋を貫き上部汽罐室爆發し前部汽罐二個蒸氣主管及前檣共に破壊せり本職は成るべく本艦の目に

觸るゝを避けんが爲め大橋を下し日中煙突を白色に塗替へたり五月二十九日夜に至り第三蒸氣管爆發し爾來本艦は五哩以上の速力を以て汽走すること能はず又石炭缺乏を告げたるより一切木造の部分を燒棄せり五月三十日大橋を揚げ浦潮斯德に着港せり

(3)

(外 務 省 着 電)

(イヅムルド艦長フェルゼン男より六月一日ナルガ灣(浦潮の北方約二百海里)發露國皇帝宛電奏)
バルチック艦隊は五月二十七日對馬海峽に進航せるに茲に敵の全艦隊と邂逅せり

砲火は午後一時廿分を以て開かれたり敵の砲火は先づ旗艦スウアロフとラスラビヤとに集注せり黄昏前に於てラスラビヤ、アレキサンドル三世及ポロヂノは沈没せりスウアロフ、カムチャツカ及ウラルは甚だしく破壊せられ遂に行く處を知らず茲に於て艦隊指揮の權はネボガトフ少將に歸したり黄昏よりニコライ一世、アリヨール、アブラキシン、セニャグイン、ウシヤコフ、シソイウエリキーナワアリン、ナヒモフ及イヅムルドの各艦は上述の順位にて北方に向ひ進航し我艦(イヅムルド)は戦艦に傳令の任務を負へり二隻の巡洋艦即ち(ナヒモフ及びナワアリンなるべし)は艦列より遮斷せられ再び相見ること克はず

戦艦は十四海里の速力を以て進航せしが此間幾度か敵の水雷艇に攻撃せらる殊に艦列の兩端に在るものを然りとす翌朝黎明に至り我艦隊を爲すものはニコライ一世、アリヨール、アブラキシン及セニャグインのみなるを確知せり(即ちシソイ、ウエリキイ及ウシヤコフの喪失せるを意味す)

廿八日曉天地平線上に敵煙を認む本職之をネボガトフ司令官に傳へたるに司令官は茲に於て速力を進めたりセニャグイン、アブラキシンの兩艦は遮航の爲め艦後に落ちたり午前十時に至れば日本艦隊は先づ我左舷に顯はれ次で右舷に轉見す同時に敵の巡洋艦隊は我後方より左舷を壓せり我艦は隊列より分隔せられ再び之に投合すること不可能となりたるを以て浦潮斯德に向け進航することに決したり本職は敵の追躡を受けつつ全速力を以て進めり石炭の不足と敵の巡洋艦に出會するを免れんが爲め本職は途中航路を轉じてウラジミル灣(ラルガ灣より稍北方に當る)に向へり我艦は二十九日夜を以て同灣に着きしが會々眞黒咫尺を辨せず午前一時半我艦は全く灣入口の暗礁に乗上げたり

石炭を餘すと僅かに十噸剩へ艦隊を浮上げしむると到底不可能と認めたるを以て本職は乗組員を上陸せしめたる後艦の敵手に落るを防がんが爲め之を爆沈せり

海戦中水兵の負傷者十名あり士官及其他の水兵は總て安全なり

(4)

(六月五日附マニラ發
エンキスト海軍少將報告)

海戦は二十七日に生まれり日本艦隊は午後一時四十五分北方に現はれ夫より戦闘に入れり敵の戦略は我艦隊の浦潮斯德に達するを防ぐにありき我艦隊が針路を北方に執らんとする毎に敵は優勝なる速力を以て常に我艦隊の先頭を壓したり敵の戦闘艦は我の重なる戦闘艦に砲火を集中し九隻の日本装甲巡洋艦及鎮遠は獨立に運動し我戦闘艦を挾撃せんことを試みたり交戦中我巡洋艦は此の敵艦に對して行動する必要あり爲めに我運送船をして甚だ困難の地位に陥らしめたり

夜に入り敵は水雷攻撃を開始せり其結果如何は彼我艦艇を區別し能はざりしに由り本職之を明言する

を得ず本職は屢々北方に逃れんことを企てしも累次の敵の攻撃は本職をして南に逃るゝの止むを得ざるに至らしめたり

廿八日朝本職は我主力艦隊の所在を失し敵の全艦隊の攻撃を受くるの危険に瀕し我巡洋艦は既に多大の損害を蒙り加ふるに石炭の缺乏を來したるを以て遂にマニラに向ふことに一決せり木職麾下水兵の行動は稱賛に餘りあり

(5)

(六月六日 附上海發)
ライノフェンスタイン海軍少將報告

驅逐艦ボドリー號艦長の報告に曰く

戦争は廿七日午後一時に始まり午後七時頃驅逐艦ブイヌイ號は旗艦クニヤズスワロフ艦側に赴き頭部に負傷したるロヂエストウエンスキー提督を引取れり

我艦隊は當日左記の順序に於て北進せり

ニコライ一世、ボロチノ、アレキサンダー三世、アブラクシン、セニャヴイン、ウシヤコフ、シゾイヴエリキナワリン、ナヒモフは右縦隊にスウエトラナ、アルマツ、オレグ、オーロラ、ドミトリドンスコイ、モノマフは左縦隊に運送船及び水雷艇は右縦隊の間に位置せり而して午後七時半巡洋艦は左方に轉向せり若干時の後ドミトリドンスコイ、モノマフ、イズムルード、アルマツ、スウエトラナは更に北方に轉じオーロラ、オレグ、ゼムチュグは南方に驅逐艦ボドリ及ブレスチャスターも亦十節の速力にて之に従へり廿八日午前一時過ぎ此等南向諸艦は對馬海峽を通過せしもブレスチャスターは午前五時沈没し其

乗組將校四名下士卒七十五名はボドリー之を救助收容せりボドリーは南方に航行を繼續せしも遂に巡洋艦を見失ひ加ふるに石炭及艦體の木製部分を焚き盡し遂に進退谷まるに到りしが英國汽船は之を發見し上海迄引き行きたり

清國官憲はボドリー號に對し二十四時間内に出港せんことを求めしも同夕上村艦隊はサツドル島に到着し加ふるに同艦は大洋を航行する爲めには石炭不十分なるを以て其出發は即ち同艦を失ふに至るの外なきを以て本職は同艦を上海に止むることに決定したり

各日本
國本
新海
聞の
の大
評捷
論と

日本海の大戦と各國新聞の評論

英 國

倫敦の新聞紙は日本海軍の成功偉績に就きて稱讚措く能はず此勝利は英國の同盟國が恰もトラファルガル戦勝の第百周年に相當するの今日に得たるを以て英國人の歡喜は其底止する所を知らざるなり○五月三十日のタイムスに曰く今や露國は當時海軍國たるの地位を失へり一二敗殘の露艦は或は遁れて浦鹽斯德の巡洋艦に加はることあるべきも些かの艦船と黒海に存する艦船とを除くの外露國には今や軍艦の隻影だも留めざれば第四等に位する海軍にも當る能はざるなり今や露國波羅的港灣と雖も之を侵さんとするものあらば之を防遏すること能はざる可し然るに此一舉は此まで海上に敵を歴し來れる日本の制海權をして益々鞏固ならしめ敵をして復之を争ふに由なからしめたり海戦の勝敗に關しては従來多少疑懼の念を懷くものなきにあらざりしかども今や斯る念は全く消滅するに至れり佛國は其の「好意的中立」を以てロヂエトウエンスキーを誘致して之をして遂に死地に陥らしめたり敵にして此以上の光輝ある成效を收めんとは得て望むべからざるなりと○又佛國の新聞ルタンが露國政府は宜しく止むを得ざるの勢に屈從して刻下の慘怛たる戦闘を歎むべしと云へる論文を掲げたるに對しタイムスは佛國が速に露國敗衄の真相を洞觀したるは怪むに足らざるなり但し露國は果して能く此同盟國の思慮深き好意に出でたる勸告を納るゝに至るべきや否や記者の知る所に非ずと○又曰く露帝は遂に能く自ら其挫敗を認めて勵精治を圖り以て國內の改革に従事すべきや否や内治の改良は實に今回の壞敗よ

り一層其急を告ぐるに至りたるなり其の狂瀾を回す所以の策は露帝一として之に施さざるものなかりしと雖も今や百計既に盡きたれば此上戦闘を繼續するが如きあらば獨り東洋に其地位を失ふに止まらず歐洲に於ても亦之れを失ふに終らんのみ

スタンダード曰く對馬海峡の海戦は能く人の機械に勝れることを證明せり天性航海に適し又之を練習するものは海戦に勝を制するの國民なり今や露國は極東に其位地を恢復するの望み絶えなければ(少くも爾後數年間は)平和克復の望は隨て起るべきの理なり然れども果して平和の克復せらるべきや否や記者茲に疑ひなきこと能はず凡そ敗衄を重ねる毎に夜叉の心を起し以て報復を圖るの暴君は獨り埃及王のみに止まらざればなり

デイリー、テレグラフ曰く此の如き大敗を取りて戦争を繼續するは頑迷不靈と云ふも愚なり蓋し是れ愚にして且つ罪惡を犯すものなればなり奉天の戦争後露國は直に平和を締結すべかりしに其機を逸せり當時さへ早く已に媾和の理由存せり况んや今日に於てをや此特筆大書すべき對島の海戦は此悲惨なる日露間の戦役を終結するに至らんことは記者の期して望む所なり而して英國の同盟國が千古無雙の連勝を結ぶに赫々たる戦勝を以てし能く東洋に雄視せんとするに至りては英國國民たるもの誰か之を祝せざらんや

デイリー、メールは「トラファルガルの戦勝を凌駕す」と題する社説を掲げ其結論に曰く今や露國の解決すべき問題は平和を締結すべきや否やにあらざりて如何なる平和條件を日本より得べき乎にあり今にして降伏を躊躇せば既に被れる損害をして益甚だしからしむるに至らんのみ

モーニング、ポスト曰く露政府にして苟も事理を解するものならんには日本の諾すべき條件にて一刻も速かに平和を締結するの外他に策の施すべきものあるを見ず或は列國會議を催し戦勝國をして戦勝の利を收めしめざらんと圖るものあらん然れども英國は斯る會議を開くことに同意する能はざるなり英國の當に務むべきは如何なる外交上の干渉にも加はることなく固く日英同盟の條約を守り海軍をして何時たりとも變に應じて起つの備へあらしむると是れなり

自餘の諸新聞の論調も以上掲ぐる所と大體其趣を同じくせり
同 三十一日のタイムズ新聞は平和問題に就き論じて曰く今や露國は戦闘を繼續するの望み全く絶えたるものにして強て之を繼續せば自國の不利となるに止まらんのみ斯の如きは理の尤も親易きものなるに拘らずツアルヌコエセロの行宮に於ては其慮の未だ此に出でざるやの觀あるは露國の爲に惜むべしとなす

又大陸新聞中に日本戦勝の結果として黃禍の益恐るべきことを説くものあるに對し論じて曰く佛獨其他何れの國に在りても正當なる戦勝の結果を日本に得せしめざらんと欲して聊かたりとも運動をなすものゝ如きは毫も之なきを信す苟も斯る類の運動をなさんとするものあらば英國は一切の手段を盡して飽くまで之を拒むべきの責あることは世の共に知る所なり遼東還附の當時に於けるが如き愚を今日に再びせんとするものあらば假偽の黃禍を變じて却て實際の黃禍となすの路を啓くに至らん斯る不條理の愚策に出づるものあるに於ては無論英國だけは之に對して峻拒措かざるべし

スタンダードはロヂェエストウエンスキーの行爲の勇敢なりしこと及其國家に忠實なりしことを稱讚し

たるの後今回の大敗が露國に平和を促すの機とならんことを望み且曰く今や露は銳意平和の基礎とすべき條件を考究するに至りたるや疑ふべきにあらず日本の政治家は先づ平和の問題を提供するは露國よりせざるべからずと主張すべし是ハ理の當に然るべき所なれども開戦以來日本は毎に慎重の態度を執りて苟も中和を失するが如きことなかりしを以て其偉功を奏したる今日に在りても必ず過度の要求を爲すが如きことあらざるべしと而して筆を擱くに臨み日英同盟のことに及んで曰く該同盟の世に裨益あるとは勿論之を認めざるべからず而して又之をして永久に存せしむることを努めざるべからず或は英國の該同盟を繼續せんとするを妨げ又英國が該同盟より生ずる一切の責任を負はんとするを阻するの舉に出でんとするが如きは是れ實に國家を誤るものと謂ふべきなり苟も政治家にして國家に對するの責務を知るものは輕々一黨派の利を圖らんとして同盟條約の大義に戻るが如きの舉に出でざるべし

自餘の大新聞も亦自由黨の新聞と共に露國に勸告するに理の在る所に鑑みて和を請ふべきことを以てせり

米 國

五月三十日發刊紐育サン曰く、日本が露國艦隊を殲滅し以て事實上同國の海軍力を碎破したるは海軍史は云ふを俟たず世界の史乘にも其の類例を見ざる偉業なりと云ふも過言にあらず日本の文明世界に對して開國せるは今より僅に五十年前の事にして其泰西文明の典型を採用してより未だ二十五年を出でず而して其稍々觀るべきの海軍を有するに至りたるより未だ十年の星霜を経ざるも爰に一躍して世

界海軍國の首班に列することゝなれり日本は陸上に於て既に名のみ世界の最強國たる露國に對して優勝國たるの實を擧げたる末今回の朝鮮海峽に於ける海戦は世界の兵力及軍艦の分配上一大變更を來したるものと云ふべし今回の海戦に依りて卜知すべきが如く日本國愈々露國を制伏せんか強國としての日本の地位は駸々として向上し其進歩發達十年前征清以後の步趨に劣らざるに於ては今世紀の終らざるに先ち宇内に首位を占むるに至るべきは疑を容れざる所なり

新式海軍機器の實用に供せられ新式戰艦現今の發達程度に達したる以來充分の實試を経たるは實に朝鮮海峽に於ける海戦を以て嚆矢とす我米國海軍のマニラ及サンチャゴに於て西國艦隊を撃破したる事實は未だ以て此の如き實試と爲すに足らざりしものなり尤も其今回の日本海に於けるが如き成果の不可能にあらざるを證したるや疑を容れず何となれば西露兩國の艦隊とも敵國艦隊に著しき損害を加へずして撃碎せられたるを以てなり新式戰艦が堂々として交戦するに於ては互に損傷なきを得ざるべしとの説は今回の一戦にて全く打破せられたりと云ふべく日本は實に海戦史上最も著しき勝利の一に數ふべき勝利を博したるのみならず自ら損害を被ることなくして能く戦勝の功を收めたる者なり

日本が露國に對し軍事上海陸とも優等に位するや歴然たり日本は實に戰勝國なり借問す歐洲諸國中遙に優大なる海軍力を有する英國の外日本に對し露國に勝りたる結果を收め得べきものありや否や而して日本にして今回の勝利に準じ愈發達して止まざれば英國と雖も餘り遠からざる將來に於て其後へに瞻着たらざるを得ざるに至らざるなきを保すべからず我米國に至りては即ち如何去る土曜日日曜日の電報は二十世紀中文開化の趨向を全然變更すに至るも未だ知るべからず

五月二十九日の華盛頓タイムズ曰く露國の敗衄は文明の凱旋なり迷信に惑溺するもの及宗教の故を以て人を虐ぐるものゝ金城鐵壁を破壊するものなり随つて人類自由進歩の最大障礙物の崩解し去れるなり
 スラブ人種とアングロゼルマン種族とは二十世紀中決死の争闘を爲すべしとは嘗て那翁の豫言せし所なり此豫言は全然事實とならんも計り知れずと雖も今や果して其一部は已に實行せられたるものと云ふべし何となれば日本國はアングロゼルマン理想の正當なる承繼者にして又其發展者なればなり世界が露國の敗衄を喜ぶ所以のものは他なし世界に於て露國政府の目的と政略を惡み此敗衄は以て平和を來すべきを以てなり今や平和は必然の勢にして其事實となるべきの機大に近づきたりと云ふべし然れども余輩は此必然の趨勢を見て歡喜すると同時に兩交戰國の勇士と其家族に對し衷心深き同情を表せずんばあらず

此争闘に於て徒に人命を損じたるは大に世界の悲しむ所なり然も世界は此人命損傷の責を以て敢て露國民衆に嫁せず全く之を貪傲傲慢懦弱の統治者に歸せり世界は露國民衆に同情を表し其前途に望みを囑し又小軀勇戰の日本人に對しては其武勇を稱揚し其策略の巧妙を驚嘆し以て萬歳を唱ふるものなり
 矮小のダヴキットは巨大のゴライアスに會しダヴキット果して勝利を得たり

佛 國

我海軍大捷の飛報は佛國新聞界に至大の反響を生ぜり諸新聞は皆舉て其の終局的効果に關する確報の到來を待ち且つ我損害の皆無なるに對し幾分の疑念を發表すると同時に露國海軍の大々の敗衄を認め而して真面目なる諸新聞紙の語調より察するに佛國公衆平和克復を切望すること瞭然なりとす左に掲ぐる所は何れも大捷報道到着の第一着の報道にて發表せられたるものなるに付尙追々評論の特筆すべきものあるべし

五月二十九日夕刊タン新聞曰く露國は其の艦隊已に潰敗したるを以て全然制海權の回復を斷念せざる可からずして其の制海權を有せざる以上は再び旅順口を取らんことは不可能に屬すリネウイチ將軍に於て如何なる事をしたればとて戦前の舊状態に回復することは到底兵力を以てなし得べきにあらざること確然なりとす露國頑硬其敗績を挽回するの必要あるや否やは奉天戰後既に世人の思想に上りたる所の問題なるが予輩も當時速かに媾和を遂ぐるこそ策の得たるものならんと思惟したり然るに露國は猶最後の決闘を試みるに決したるが今日に至りては余輩が去る三月十一日に論じたる所益確實となりたるが如し露國は其版圖の一極端にのみ其全力を集注し以て其他の地域に於ける活動を萎靡せしむることを得ず吾輩冷靜の心胸より出でたる慎重の勸告は若し佛國にして露國に同情を宿することを止めたらば決して呈供することなかるべきものなり蓋し余輩は露國の同盟に熱中すること敢て前日に異なる所なく此同盟を以て我れに對しても將た露國に對しても歴史的必要のものとなすが故に余輩は露國並に我國の利益に適合するものと確信する所の意見を開表するを憚らざるなりと

五月三十日發刊ジュルナル新聞は先づロヂェストウエンスキー提督の勇敢に對し若干の稱讚を述べ烈しく露艦四隻の降伏殊にニコラス一世及びアリオールの降伏を批難し（其著しく日本海軍力を増加す

べきを云云し）たる後結論して曰く此海戦の今後の結果に付露國にとりて最も良好なる推測を下すも其海軍は全滅に歸したる事を認めざるを得ず而して日本艦隊は如何なる損害を受けたりとするも東郷大將は尙ほ偉大なる優勢を占むるものなり

ヒュブリック、フランセーイ新聞は露國は今後果して何事をなすべきやとの問題を起して而して述て曰く露國は己に海戦に敗績せること明白にして而して陸戦に於ても決勝を取ること蓋し難かるべし無謀の頑剛は無用なり今や露國は其自負心如何に傷害せらるゝも最早其妄想を脱却し去らざるを得ざるの時期に至れり

ジルラフ新聞は露國利益の爲めには勿論已に幾分か萎靡したる國際的利益のためにも亦平和の必要を論じ戦後に於ける日佛露三國協同の事に論及せり

ユーマニテー新聞は人道論よりの必要のみならず佛國の如く本戦争に利害の關係ある諸國の名を以て平和克復の必要を主張し且曰く日本國今回の戦捷は露國民の自由に關し殊に重要なりとす何となれば若し戦敗其處を異にする場合に於ては人權發展の機運は確に壓碎せらるべければなり

五月三十一日刊行レビュブリク、フランセース曰く、日本の勝利は單に戦争の期間に對して間接の影響を及ぼすに過ぎず即ち露國宮廷に於ける平和派の氣勢を興奮すべきことは是なり然かも戦争にして尙繼續せられんには戦争の唯一の効果は是れまで浦潮の攻撃を遅延せしめたる危惧の念を除去したるにあり然れども海戦に於ける日本の全勝は他の點に於て大に興味を有するものとす即ち太平洋に出生したる大海軍國は向後列國の連衝の動搖するに至るべきことなりとす英米の人民も爲に憂懼すべく佛國

に至つては既に久しく日本の成功の結果に關して焦慮する所ありたり佛國は日本勢力の非常なる増進を寒心しつゝある各國と遂に事を共にするの已むを得ざるに至らん佛國自己の利益の爲め即ち亞細亞に於て佛國の位置を維持せんが爲に事茲に出でざるを得ず

エコー、ド、パリ新聞はロヂェストウエンスキー艦隊の撃滅後に於て英佛兩國が各自の同盟國に對する友誼的干渉問題は不日現實上交渉の問題を構成すべく又官邊に於ても昨日平和談判は目前に迫りたりとの談論盛なりしとの風説を掲げたり

クレマンソー氏はワール新聞に於て從來親露論者が總て露國の敗績は其實勝利なりと解釋したりしとを痛く批評し又露國の親友は旅順陥落後媾和を勸告せしものなりと言明し進んで露國連敗後に於ける國狀に付冷評を下し且問ふて曰く此慘憺たる悲劇は何れの日か終了せんとする乎と

ロシユフル氏はアントラシジャン新聞に於て論じて曰く露國の爲めに平和が崩壊かの意なり而して崩壊は則ち死滅なり併し一國の君主は其臣民を率ゐて殲滅に陥るゝの權利を有するものにあらず他日露國人は假令ロヂェストウエンスキー及ネボガトフ死したるも露帝の尙生存せられ居るを認知するに至るべし事茲に至つて露帝が事の不可能に屬するにも拘らず尙且つ固執、敗衄の勢を挽回せんとするに方りて愈其責任を重大ならしむる有らんのみ皇帝は國運の危急なるを解せざるなり各強國は須く彼に勸告するに人命の尊重すべきを以てし依つて帝が更に許多の人命を落さんとするを抑止すべし

プチット、レビュブリック新聞は露國が波羅的艦隊の士氣粗喪せる勢力を以て氣運を挽回せんとする愚昧なる抱負を酷評して聲言して曰く斯の如き犯罪的愚策を頑守する者は實に之を監禁するの價値あり

のみと

グロアル新聞は大文字を以て其結論を書して曰く戦争愈永續するときは平和條件は愈苛酷となるべし(一句不明)革命黨は團結して竊に運動し露國政府は殆ど内外の敵に向ひ永く對抗するを得ざるべし左れば假令露國は其自負心に對しては忍ぶべからざる所あるにもせよ敗餘の今日將來無益の流血を避けんが爲め平和を請求せざる可からずと

獨逸

日本國今次の戦勝は伯林に至大の感動を與へ之れに依つて速かに平和克復せらるべしとの希望益多きを加ふるの結果を生せんとは一般公衆の信ずるところとなれり

獨逸新聞は其主義の如何を問はず總て異口同音に海戦の終局せるを唱へ露國が其陸軍を以て今日迄成効し得ず一に其の艦隊に向て囑望し居たる豫期願念は全く地に墜ちバルチック艦隊の殘艦は最早何等の活動を爲すの力なく全く殲滅の運命に遭遇するは其の免る能はざる所にして露國は今や其最終の手段を盡したるものなれば其の戰運挽回唯一の望も爰に全く消亡し去れり而して露國今回の敗衄たるや極東に於ける其海上權の平衡を恢復するの望みを遠き將來に至る迄滅却し去りたるものと云へり

日本の大捷に對する祝電は獨逸國の各部より續々帝國公使館に來着しつゝあり

有栖川兩宮殿下が府中に御馬車を驅らるゝ毎に市民の兩殿下に對する歡呼湧くが如し五月三十一日觀兵式の歸路日本國武官は街路に市民より「日本バンザイ」の聲を以て盛んに喝采せられたり

伯林ロカール、アンツアイゲル新聞曰く、日本艦隊が戦勝の利に乗ずるや至らざる所なく其追撃は精

悍を極め且つ至倅の成果を收めて敵の敗殘艦を捕獲し一旦遁逃せるロヂェエストウエンスキイ、フェルケルザムの兩提督を俘虜とし巨艦四隻が久しからずして新に旭旗を其檣頭に輝さんとするの事實は日本軍の依然として安全なるべきを證するに餘りありと云ふべし

フォツジツシエ、ツアイツング新聞は論じて曰く日本軍の作戦は海上に於ても陸上に於ても均しく燦然たる光彩を放ち其將帥、組織、管理及交通制度は全世界の嘆賞する所にして將卒は居常如何なる任務に就くことをも辭せず且つ克く自ら抑損し勤厚以て事に當り命令あれば何時にても職務に服し連戦連勝の功を致し以て常に優者の地に立ち已に奉天を屠り更に滿洲の露軍に打撃を加へんとする準備中なるに今や東郷大將は敵國の驕慢なる最後の希望を絶ち露國皇帝の輔弼にして最も深く自信する所ある輩をも今回の東洋大戦争は結局日本の敗績に終るべしとの念慮を絶たしめたり是に於てか露國は今後多年間東洋海軍國の班伍に列する能はざるとなり嘗て獨逸皇帝をして最強國の元首として謳歌せしめたる威名赫々のニコラス二世も其戦勝者に對し大敗を恢復するの望なきことなれり露國は其國境を防禦し且革命運動を鎮定する爲め歐洲に數十萬の兵を留めざるべからざるに日本は則ち國を空うして海外に送兵するを得るの位地に在り何となれば寛大なる憲法のあるあり全國民舉つて皇帝の聖意に服すればなり露國皇帝より媾和を提議するは今の時を好機とす蓋し同皇帝若し今にして媾和せざれば波羅的艦隊の全滅は革命派に聲援を與ふると頗る大なるべく今後戦争を繼續するは媾和條件をして益重大ならしむるに止まるべく且諸外國も無謀の戦争を繼續するの資金を供給せざるべきを知悉せられざる理由なきを以てなり而して各中立國の位地は正に旅順陥落の後に均しく露國に對し自ら進んで忠

言を入れ或は何等の勢を執らんと提議するの要あるを見ず然り而して日本は其戰勝及其國民の良好なる徳義心及愛國心に依り文明國及強大國の間に無比の好地位を占むるを得たり此地位たる戰爭の今日終局を告ぐると其繼續せらるゝとを問はず永く失墜せらるゝとかなるべきものなり

ケルニツシエ、ツアイツング新聞は海軍軍事上の見地より今回の大戰爭を論評したる上左の如述べたり

日本戰勝は特に武人的性質を帯べる獨逸人民をして日本に對する尊敬及び稱讚を益深からしむるは毫も怪しむに足らず是れ獨逸のみならず其他世界各地に於ても亦同様なるべきは疑を容れず

有栖川宮殿下が日本海軍の偉大なる勝利の報道發表せられたる日を以て伯林に御入京ありたるは奇遇と云ふべし獨帝親しく停車場に臨幸せられ軍隊の禮式を盡して之を迎へられたるの時に方り伯林市民は會々世界歴史に特筆大書せらるべき勝利を得たる國の代表者たる同殿下を拜するの機會を得たり従つて殿下及御一行に對する待遇の懇篤誠實なるは他に其比を見ざる所にして御一行は必ず軍事上の成功を認識するに於て毫も吝ならざる國土に在を感せられしなるべし

而して露國は既にバルチック艦隊を以て今回の戰爭の結果の依て繋れる最後の手段を盡し居るものなることを繰返したる同新聞は更に左の如く論せり

露國は其最後の手段を盡して現に見るが如き失敗を致したる今日、果して論理上明白争ふ可からざる最後の結論に首服すべきか而も露國が其艦隊の全滅を招きたるの後に於て如何なる措置に出づべきやを勸告するは獨逸の義務に非ず

次で同論文は「露西亞の將來は單に東亞のみに於て存するに非ず歐洲及中央亞細亞に於ても亦存するものなれば露國が日本との戰爭の爲めに疲憊することを避け之れと和を講せんことを切に祈る」との佛國ルタン新聞の意見を轉載して筆を擱けり

壘 國

日本海海戰に關する壘國新聞紙の論調左の如し

ノイエ、フライエ、プレツセ曰く露國が最終の努力を爲したるの今日此上戰鬪繼續の爲め何等畫策し得べしとするも是れ目的もなく成功の見込あることなし日本は極東海面の専全なる主人にして露國は日本の同意を得るに非ずんば亞細亞沿岸に於て其國旗を掲ぐるを得ず是を以て露國政府は其極東に於ける地位を抛棄するか若くは媾和するか二者其一を選ばざるべからざるの究境に陥りたり

エキストラ、プラット曰く勝利は争ふべからざる覇權を日本に與ふると同時に敗績は必ず革命の潮流に新刺戟を加へんとす然らば露國は媾和するの外他に策の出べきなし

ターゲ、プラット曰く今回の戰爭に於ける成功の要件は制海權なりき而して制海權は全然露國の喪失する所となりたるを以て露國は媾和するにあらずんば只だ敗衄に加ふるに敗衄を以てするに過ぎざるべし

ツァイト新聞曰く前途一縷の望さへなきに際し戰爭を憎忌する人民に向ひ更に戰費を徴收するが如きは犯罪なり狂氣なり

フォクル、スツアイツング曰く露國は最後の手段を盡したれども遂に失敗に了はれり今や東郷は恐ら

くは進んで浦潮を封鎖するならんと
ドイツチエー、ガゼット新聞の確信する所に依れば今や此敗戦ありたるに方り露國は是非とも媾和せざるを得ずと

伊 國

對馬海峽に於る日本海軍勝利の報音が最初全歐に傳播せるは伊國トリブヌナ新聞に由りてなり同新聞は五月二十八日午後に於て在天津通信員より電報を受け取り直に號外を發したり是れ蓋し伊國新聞に在りては異例に屬す

伊國の公衆は初め略電に接して之を疑ふの風ありしが追報によりて詳細を知るに及んで日本海軍の目覺しき成功に對し大に歡喜を表したり彼れ伊國人は凡そ日本の成功とあれば其の何たるを論せず之を歡迎するを常とす然れども今回我戰捷の報音は先づ彼等をして呆然自失せしめたり蓋し伊國人と雖も亦他の歐洲人の如くバルチック艦隊の戰鬥力を過重視するに偏し居りたることなれば今や此の驚くべき戰報に接し之が説明を求むるに窮したるなり而も遂に之を日本人の報國心及戰鬥能力の高度なるに歸し今世の武裝如何に發達せりと雖も苟も兵員の技能よく之に伴ふに非らずんば遂に其戰鬥力を發揮するに能はざる者なりと論せり

伊國の諸新聞は日本海軍に對し尊敬の意を表するは勿論なるが同時に此上戰爭の繼續は人命を無益に殞するものなりと論せり左に諸新聞の所説を概述すべし

タビニラン曰く浦潮斯德に達せんとする露國艦隊の計畫は茲に破れて日本の軍艦見事成功せり吾人は今や五月二十七日の海戦を以て歴史上重要なる出來事と爲すことを確言するものなり然れども此の海戦を以て東亞に於ける露國の權力を終世蝕滅せしめたるものと爲すは誤謬たるを免れざるべし何となれば浦潮斯德の軍港は猶依然として存在するのみならず今猶無限の資力を有する露國に取りて既往百年の計畫を拋棄するは最も其嫌忌する所なればなり多少の歲月の後に於て露國も再び起つて日本と抗爭し得るに至るは疑ひなかるべし而も日本は亦今や世態一變したれば我は世界的政策に加入せざるを得ずと謂ふなるべし之れに對する吾人の所見如何といふに吾人は曾て所謂黃色患なるものを信じたることなし而して吾人は此確信は今回日本海軍の大決勝後と雖も敢て替ることなきなり若し露國以外の歐洲大陸に位する國にして今二十世紀の文明を以て彼我相互の意思と權利義務とを尊重する和好の意義に解せずして矢張り十九世紀に於けるが如く文明の擴張は宜しく之を砲門に訴ふべしと思惟するものありて爲に日本と戦を啓くものあらば黃色患なるもの茲に初めて發現するに至るべきも苟くも然らざる限り斯句は畢竟無意義たるのみ

吾人を以て見れば東郷提督は日本國民の智能の發現體なりと謂ふべし從來日本人を以て單に巧慧なる模倣家なりと爲したる吾々歐洲人は今日に至つて日本人が更に模倣者たるに止まらずして歐米積年の智識の上に更に一生面を啓くの能あるものと認識せざるを得ざるに至れり之に反して天運は飽まで露國に勝利を拒絶し開戦以來十六箇月間に一回の捷利をも得しめず意識的か將た無意識的か何にもせよ露國海陸の兵卒等は驚く可き勇氣忍耐を示し吾人をして最早飽き足る迄多數の死骸を見せしめたり思ふに露國革命黨は此無用の殺戮に對する非難を絶叫するならん

波羅的艦隊の潰敗は白耳義の人心に最も深刻なる感動を與へ其新聞紙は異口同音に露國向後の抵抗を以て愚昧無謀の擧なりとし今回露國御前會議に於る主戰の決議は徒に列國の同情を離反せしめ國內革命運動を猖獗ならしむるに止まる者なりとせり

和蘭及丁抹

和蘭の公衆は初め日本海軍の全勝を疑ふの觀ありしも追々詳報に接するに及んで其範圍の廣大なるに驚き今や一般に之をトラファルガルの海戰に對比せり

六月一日のアルオミーン、ハンデルス、ブラドはバルチック艦隊の全滅と之が大責任の歸する所を論じ畢竟今世の戰爭に於ける勝敗の決は物資に因らずして兵員に因ると論決せり

五月三十一日のニウス、ロットテルダム、クーランは今回の日露戰爭を以て露國に取りて危殆なるものとし海上權挽回の最後の希望を失ひたる露國は物資と兵員と兩ながら缺如せるに至りたることなれば此上戰爭を斷念して多數の民意に従ふの外なかるべしと論せり

五月二十九日の海牙ニウス、クーラント曰く極東に於る日本の優越なる位置は最早之を争ふものなきに至れり歐洲殊に佛國たるものは須く日本國民に就て注意する所あるべし蓋し日本國民は其他國より受けたる屈辱を忘るゝものにあらざればなり

五月三十一日のスタンダートは日本の勝利を認めながらも其艦船には損傷ありたることを疑へり丁抹國に於ては公衆は深く日本海軍成功に對する驚嘆と露國の恐るべき敗北に對する同情と相半し斯

る災禍の如何にして到來せるかを驚くのみ今や平和の望み増大せること、思惟せらるる
アムステルダム株式市場に於ける日本四分利公債は去五月廿七八日に八一八分の一なりしも同三十一日には一躍して八六と八分の七に騰れり(外務省着電)

露國

日本の海戰勝利に關して露國に於ては新聞檢閲官の嚴命に依り五月三十日迄は公衆に之を知らしめざりしが同日に至り最早之を秘する能はざるに至れりと云ふ而して其諸新聞紙は五月三十一日を以て初めて我公報の幾分を公にすることを許可せられしが是より生じたる感想大概左の如し

諸新聞紙は異口同音激烈なる語調を以て戰鬪指揮上の過失を指摘し國民代表者の至急招集せられんことを要求しノウオエ、ヴェレミヤの主筆は形勢の危殆なるを聲明し内務大臣を以て長とする委員會の調査結了を待たずして國民の代表者を招集あらんことを要求せり

又ガゼット、ド、プールス曰く英國の政治社會に於ては尙滿洲に於ても露國が新なる災厄に逢遇すべきを夢み居るに引替へ佛國の輿論は露國に向ひ此上の難禍を避くる爲め和を結ぶの緊急なることを友好的に説けり然れども外部の平和は目下根本的に攪亂せらるゝ内部の平和を回復するにあらずんば決して之を致すとを得ずと而してノウオスチーは今回の海戰敗北がリネウイッチ軍に殆んど致命的影響を及ぼすべきを指摘して曰く此海戰は浦潮港に對し容易ならざる危難を醸すものにして目下唯一の企望は時日亘久の間に確定の局を結ばしめ以て能く名譽ある媾和を可能ならしめん爲め陸海の殘力を巧に使用するにありて存すと

時局に對する露國新聞の論旨は何れも媾和の決をゼムスキーサポール(國會)に問ふ可しと云ふに歸着せり

ノウオエ、ツレミヤは曰く露國は當初片手を以て戦ひ漸く雙手を動かさんとするに至りて又片手を失ひしも其の戦闘力を失ひたるものにあらず然れども今や國會を召集するの時期は到來し最早片時も猶豫すべからず全國の良智と同情とを以てするにあらずんば國內の民心は到底鎮撫し得べからず

ルス新聞は論じて曰く今日は吾人が我國の敗績を黙止すべきの時にあらず宜しく奮勵して新露西亞を建立して以て將來の形勢を革新するに努むべし

ムロトウオ新聞は曰く官僚政治は又も我國民に汚辱を加へたり今や露國に取りて國會を召集するは誠に焦眉の急なりと

然るにメシチエルスキーは六月一日論じて曰く露西亞が望を繋ぎたるは一つに波羅的艦隊にありき左れば同艦隊の敗衄が痛く一般民心に影響せしは勿論特に我滿洲軍に大なる打撃を與へたるの事實は最も憂ふべきもの、一なり今や國民皆時局に對し取るべきの處置如何を論じ昨日まで余の平和論を罵倒したる所謂愛國の記者等も今日となりては異口同音に媾和の必要を説けり而も彼等は平和成立時期の半を失せしを覺るや否やノウエウレミヤ新聞は慌て、國會召集の必要を絶叫せり併し如何に急激に之を召集するも日本軍の進撃一層迅速なるに及ぶまじきとは同記者果して之を考慮せしか、余は信す平和の聲を聞かんが爲めに今の機を以て國會を召集するは却て紛擾を來す可きを以て決して策の得たるものにあらず若し召集の目的媾和にあらずとせば此際之を急ぐの必要なし媾和を爲さんが爲めに速に

國議院、議政院、教務院の聯合議を以てすること上策なり

露國に於ける感情に關しノウオエ、ウレミヤ新聞は左の如く論せり

我艦隊は對島海峽附近に於て重大なる戦敗を招き爲めに今後多年間露國をして何等海軍力無からしむることは吾人之を認識すと雖も其結果陸上に於ける戦争の繼續を不可能と爲せりとは見る可からず滿洲に於て五十萬の兵を有する露國は未だ媾和に耳を傾くるを得ず海軍の敗衄は陸上の戦局に變化を及ぼすものにあらず而して陸軍に於て露國が自國の兵力に信賴するを得ること開戦以來今日に至りても變る處なし對馬附近に於ける我海兵の損失は實に慄るべきものあり是即ち日本が提議する儘に媾和を容れんとする露國人多かるべしとの想像をして却て益無稽に陥らしむる所以なり

ルシアン、ブルスガゼットは露國官僚政治の動搖並に露國人民の不平困究及び疲憊に就き述ぶる所あり且左の言を爲せり露國官僚政治は外國に於て毫も友人を有せず従つて何等其援助を豫期する能ず同政治組織の廢絶にして一日を速かにせば露國國運の挽回亦一日を早くすべし露國は國家として敗衄又屈辱を受けたるものに非ず

明治四十年十一月十五日印刷
明治四十年十一月十八日發行

不許
複製

翻譯者

發行者

印刷者

印刷所

發行所

定價金五拾錢
郵税金八錢

東京市京橋區南鍋町二丁目十二番地
時事新報社

長崎縣佐世保市濱田町八番地
田熊萬藏

東京市神田區中猿樂町四番地
藤澤外吉

東京市神田區中猿樂町四番地
秀光社

長崎縣佐世保市濱田町

海軍勳功表彰會本部

東京市神田區西紅梅町十一番地

海軍勳功表彰會支部

○本會出版物の種目及其概要

海軍勳功表彰會編纂

天日露海戰記

附錄戰域大海圖

定價金 貳圓

本書は日露戰役に於ける我海軍の行動を網羅して遺す所なく文章は潤色を避けて着實を旨とし尙文中詳密なる圖解を挿入して參考となし専ら日露海戰の正史として後昆に傳へんことを主眼として編纂したるものなり

附錄は日露兩艦隊の行動を明らかにせん爲め黃海蔚山沖日本海の三大海戰は固より軍艦及商船の沈没場所其他海戰日誌日露兩軍艦の噸數及艦形等を明寫せしものなり

時事新報社翻譯

露艦隊來航秘錄

定價金 五拾錢

本書は露國第二艦隊口提督の幕僚たりし將校の一人がバルチック港拔錨以來對島海峽迄の出來事を細大漏らさず筆記して最愛なる妻に寄せたる日誌なり
尙同人は日本海に於て無慘の最後を遂げたるに依り其妻たる未亡人は夫の靈を慰めん爲涙と共に公表せし珍書也

時事新報社翻譯

露艦隊幕僚戰記

定價金 五拾錢

本書の著者は同じく口提督幕僚の一人なるも戰國中觀況觀察の任務を帯びて筆記に従事したる將校なれば視界内にある露艦隊の行動は勿論旗艦スクロフの最後に到つては其慘憺たる光景を最も詳細に且つ寫實的に明記したるを歸國の後公表せしものなり

時事新報社翻譯

露艦隊最期實記

定價金 五拾錢

本書は同じく第三艦隊の幕僚なりし海軍中佐の著せし戰記なり其特色は口提督の作戰計畫より脱起し彼我兩艦隊の巧拙を最も無遠慮に論破し然る後日本海大海戰奮闘の有様より降伏軍艦の大悲劇に到る迄快調なる文字を以て遺憾なく著述せし好文草なり

時事新報社翻譯

右三戰記合本 全

定價金壹圓五拾錢
郵稅 十 八 錢

本書は前掲の三戰記を合本とし最も斬新なる意匠を以て日露海戰記同様總クローヌ金文字入の美麗なる洋裝なれば紀念として珍藏せらるるに最も適當の頁書なり